

60s

70s

80s

90s



第8回

# チームケア学会

「人生100年生きるためのリテラシー」  
～医療と福祉の連携～

2023年9月11日（月）12日（火）

《研究発表》

「人生100年生きるためのリテラシー」～医療と福祉の連携～

開催日：2023年9月11日（月）9：30～18：00

演題数：53 演題

《シンポジウム》

「超高齢化社会に向けた医療と福祉の連携」～未来に向けての取り組み～

開催日：2023年9月12日（火）14：40～16：40



一般社団法人チームケア学会

一般財団法人 愛生会 多摩成人病研究所

## 目 次

|                      |     |
|----------------------|-----|
| 学会長ご挨拶               | P2  |
| 学会長ご紹介               | P4  |
| インフォメーション            | P5  |
| 第1日目 プログラム           | P7  |
| 研究発表会 抄録集            | P9  |
| 全演題一覧 タイムテーブル        | P10 |
| ROOM 1 抄録            | P11 |
| ROOM 2 抄録            | P31 |
| ROOM 3 抄録            | P51 |
| 第2日目 プログラム           | P71 |
| シンポジウム               |     |
| 「超高齢化社会に向けた医療と福祉の連携」 |     |
| ～未来に向けての取り組み～        | P72 |
| あとがき                 | P75 |
| チームケア学会運営スタッフ        | P76 |

## 会長挨拶

チームケア学会の全国発表大会の開催は、早いもので、今年で8回目となります。これも、なかなか終息しないコロナ禍のなかで創意工夫を重ねながらチームケアを鋭意実践されている会員の皆様の熱意とご尽力の賜物と感謝いたしております。コロナによる感染症の対策を法人横断的に臨機にかつ迅速に行うことで、法人間での感染症対策のノウハウの共有化と高度化が進み、チームケアのレベルも向上したと思います。

チームケア学会は、発足時より、100年生きるために自分らしく（その方らしく）生き抜くために、生きる当事者も含めたチームケアのメンバーは何を考え、何をすべきかを多面的な観点から実践し、その研究を行ってきています。

第4回全国大会から、「人生100年を生きるための「リテラシー」」をメインテーマに据えています。第4回では、サブテーマをもっとも基本的な「食べること」とし、食と口腔ケアについての議論をおこないました。第5回全国大会は、新型コロナウイルス感染症という突発的な状況を鑑み、大会テーマを急遽「新型コロナウイルス感染対応の情報共有」とし、大会の主目的をコロナ感染のリスクに対処する為の有用な情報交換に置き、感染ケアに関する様々な事例を発表・共有する場といたしました。

第6回全国大会では、メインテーマを「人生100年を生きるためのリテラシー」に戻し、サブテーマを「身体と心のメンテナンス」としました。高齢化というプロセスの中で、身体と心のバランスを如何に維持し、健やかな生活を過ごせる、当事者としての自己認識としての「健康寿命」を如何に伸ばせるかについて議論を行いました。今年の第7回全国大会ではサブテーマを「ケアの基本、より自由になるために」としました。言うまでもなく、高齢化とは基幹機能の避けられない低下であり、それを前提に「より自由になるために」を語ることは、一見矛盾のように思われるかもしれませんが、しかし、これは、ある意味でのパラドクス（逆説）であり、より不自由になるので、より日常生活における小さな判断や行動が自由であることの価値が高まるということであると思います。

難しくなりますが、社会情動的選択理論によれば、高齢になるとは、「今、現在ここにあるもの、日々の喜びと親しい人たちを大切にする」方向に意識が向かうことを意味します。これを前提に、サブテーマである「ケアの基本、より自由になるために」とは、言い換えれば、介護が必須な時に生きる当事者を含むケアチームのメンバー一人一人が「どう生きるか」を考え、実践することであると言えます。そのチームケアの実践に求められるのは、老いる当事者の「人生の継続性の尊重」、「自己決定の尊重」、「低下の避けられない自己資源（残存能力）を最大限に活用する強い意志」であるかと思えます。

今年は、湖山医療福祉グループ創立40周年にあたりますことから、その40周年記念行事と歩調を合わせましてチームケア学会の全国大会を行うことといたします。今回の第8回全国大会のテーマは、「医療と福祉の連携」といたします。

急激な高齢化、それも75歳以上の後期高齢者の人口が急増するなかで、慢性疾患や複数の疾患を抱える高齢者が増え、高齢単身世帯も増える中で、医療・介護の複合ニーズを有する高齢者が増加しており、医療・介護の連携の必要性が急激に高まっていると言えます。この意味で、今回の大会テーマである「医療と福祉の連携」は、時宜に適したテーマであると言えます。

政府もこの状態を強く認識しているので、「医療及び介護の提供体制については、サービスを利用する国民の視点に立って、ニーズに見合ったサービスが切れ目なく、かつ、効率的に提供されているかどうかという観点から再点検していく必要があります」、「いわゆる団塊の世代が全て75歳以上となる2025年、その後の生産年齢人口の減少の加速等を見据え、病床の機能分化・連携、在宅医療・介護の推進、医療・介護従事者の確保・勤務環境の改善等、「効率的かつ質の高い医療提供体制の構築」と「地域包括ケアシステム（医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される体制）の構築」が急務の課題」であると言っています。そして、「このため、消費税増収分を活用した地域医療介護総合確保基金を各都道府県に設置し」、「各都道府県は、都道府県計画を作成し、当該計画に基づき事業を実施していくこととなります」と言っています。ここで、考えるべきことは、都道府県主導で、「医療と福祉の連携」は、順調に進むのかであると思います。また、後期高齢者のケアを考える時に、介護・医療・生活保護は、相互に深くかかわる社会福祉政策ですが、厚労省が、それらを老健局、医政局、社会・援護局という縦割りの組織で管轄しているという実態も、「医療と福祉の連携」の推進にとってどのような影響があるかを考慮する必要がるかもしれません。

さて、チームケア学会としては、各法人において、率先して、技術革新を念頭に介護と医療の連携を如何に実験的に進めるかが問われているかと思います。施設における介護と医療の連携を進めることは、ケアの高度化・複雑化が進むことを意味します。

このケアの高度化・複雑化を踏まえて、チームケア学会の会員の方々に再度認識して頂きたいのは、ケアとは、「常に個別で関係的な営為」であり、「感覚的活動を通じたマネジメント」であるということです。そして、介護と医療の連携は、より高いマネジメント能力が求められるということです。畢竟、適切なケアであるかは、与え手が「なにを提供しているか」だけでは判断できず、「誰が」「誰に」という個別の観点と受け手が提供されている「なに」にどのくらい依存しているかという観点から総合的に判断されるものであるということです。

これをもって、ご挨拶とさせていただきます。

敬具

2023年9月11日

一般社団法人チームケア学会

会長 小笠原 泰



## 《チームケア学会 学会長紹介》



おがさわら やすし  
小笠原 泰

明治大学 国際日本学部 教授

1957年鎌倉生まれ。

東京大学卒、米国シカゴ大学大学院国際政治経済学修士、経営学修士(MBA)。

マッキンゼー&カンパニーを経て、米国カーギル社ミネアポリス本社に入社。

米国本社および同社オランダ、イギリス法人勤務後、NTT データ経営研究所に入社、同社パートナーを経て、2009年4月より現職。フランスの *Université Toulouse 1 Capitole, Toulouse School of Management* の客員教授を歴任(2018年4月～2020年3月)。その間、EU及びフランスの政治・経済・社会関係や社会保障システムなどを研究する。

研究領域は、グローバル化の中での経営組織文化論およびパワーを中心に据えた技術社会(政治経済)論。近年は、テクノロジーの進歩とグローバル化の中で起きつつあるパワーシフトを念頭において、国家の再定義と社会保障政策を中心に据えた社会システムデザイン再構築に関する研究に力を入れている。

### 【主な著書】

『CNC ネットワーク革命』(東洋経済新報社 2002年)

『日本的改革の探究』(日本経済新聞社 2003年)

『なんとなく、日本人』(PHP新書 2006年)

『日本型イノベーションのすすめ』(日本経済新聞社 2009年)

『2050年、老人大国の現実』(東洋経済新報社 2012年)

『わが子を「居心地の悪い場所」に送り出せ』(プレジデント社 2019年)

# Information (学会期間中のご案内)

## ●研究発表会について

発表は、各事業所より ZOOM での発表となります。

### 1) 受付について

参加者は事前申し込みとさせていただきます。

法人ごとに参加名簿を作成し、申し込みをお願いいたします。

参加費は、無料です。

### 2) 会場について

事前にお知らせいたします ZOOM の URL からお入りください。

その後、教室ごとにブレイクアウトルームがございますので、ご自分で選択してご入室下さい。

入退室は自由です。

入室時、ミュートにしてお入りいただき、ご発表の妨げにならないようご注意ください。

研究発表を行う会場は下記の教室です。

【 ROOM 1、ROOM 2、ROOM 3 】 計 3 会場

### 3) 研究発表会の進め方について

1 研究の発表時間及び質疑応答については、以下の時間配分となります。

|      |      |                          |
|------|------|--------------------------|
| 発表   | 10 分 | 発表時間中の移動は、原則禁止とさせていただきます |
| 質疑応答 | 5 分  |                          |

※発表者の皆様は、発表時間の厳守をお願いいたします。

※研究発表後、10 分間の休憩がございます。

※各研究の発表時間につきましては P10 のタイムテーブルをご参照ください。

### 4) 研究発表会中の留意事項

- 参加中は、携帯電話・スマートフォンをマナーモードに設定してください。
- 学会を円滑に進めるため、決められた時間はお守りください。
- ミュート・ミュート解除、ビデオオン・オフ、マイクの設定、音量操作など最低限の ZOOM での操作が可能な方を、お近くに配置してご参加ください。

## ● アンケートについて

チームケア学会終了後、アンケートのご提出をお願いいたします。

下記の QR コードから、または配信いたしました URL からグーグルアンケートでお答えください。ペーパーでの回答は行っておりませんので、ご協力お願い申し上げます。



《1日目》



《2日目》

## ● チームケア学会 概要

■正式名称 : 一般社団法人チームケア学会

■創立年月日 : 平成 28 年 11 月 25 日

■目的

チームケア学会では、保険・医療・福祉にかかわるあらゆる職種の学習、研究活動を支援し、学識経験者並びに各関連機関との情報交換、交流、連携を通じて、医療・ケアの質の向上に寄与することをめざします。

■学会ロゴ

「チームケア学会」を英語表記した際の「Team Care Society」の頭文字「TC」をモチーフにしています。横に傾けると車いすの絵になります。



## 2023年度 チームケア学会 第1日目 プログラム

開催日：令和5年9月11日（月）

| 時間    | プログラム  |
|-------|--|
| 8:30  | 受付開始   |
| 9:30  | 開会<br>社会福祉法人草加福社会 宮崎 智和  |
| 9:40  | 学会長挨拶<br>一般社団法人 チームケア学会 学会長 小笠原 泰（明治大学教授）<br><br>*各会場へ移動（ブレイクアウトルームを各自選択して入室）    |
| 10:00 | 研究発表開始<br>『第8回チームケア学会』 53 演題<br>※発表10分 質疑応答5分 会場移動5分<br>※各部屋の発表順はP10のタイムスケジュール参照 |
| 16:50 | 研究発表終了   |
| 17:10 | 全体総評<br>銀座医院院長補佐 久保 明  |
| 17:30 | 1日目の所感<br>湖山医療福祉グループ代表 湖山 泰成   |
| 17:50 | 1日目 閉会<br>1日目アンケート回答   |
| 17:52 | 事務連絡   |

A series of 20 horizontal dashed lines spanning the width of the page, providing a template for handwriting practice.



# 研究発表会

## 抄録集

9月11日(月)

10:00～16:40

# 研究発表会 タイムテーブル

| ROOM        |             | ROOM1          | ROOM2                                      | ROOM3                                    |
|-------------|-------------|----------------|--|--|
| テーマ         |             | 研究(業務改善、その他)   | 教育   | 職種連携                                     |
| 1           | 10:00~10:15 | 法人名            | 社会福祉法人平成会                                  | 社会福祉法人カメリア会                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人福祉施設                                   | 母子生活支援施設                                 |
|             |             | 題名             | 不適切なケアの減少を目指して～自己チェックシートの活用～               | バケツ洗濯機を通した生活・心理的支援                       |
| 2           | 10:15~10:30 | 法人名            | 医療法人財団百葉の会                                 | 株式会社ライフアシスト                              |
|             |             | サービス形態         | 通所リハビリテーション                                | 放課後等デイサービス                               |
|             |             | 題名             | 物品カードによる業務の効率化～スタッフのストレス軽減とコスト削減～          | 時計を読めるようになろう!                            |
| 3           | 10:30~10:45 | 法人名            | 社会福祉法人大和会                                  | 医療法人社団平成会                                |
|             |             | サービス形態         | 認可保育園                                      | 小規模多機能型居宅介護                              |
|             |             | 題名             | 子どもを事故や怪我から守るために保育士ができること<br>～安全係からの発信～    | 私たちの仕事とは<br>～カンファレンスを通して見つめ直す～           |
| 4           | 10:45~11:00 | 法人名            | 社会福祉法人日翔会                                  | 社会福祉法人カメリア会                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人福祉施設                                   | 母子生活支援施設                                 |
|             |             | 題名             | セラミド効果で皮膚トラブル改善                            | 新人研修に自己探索ツールを使用した取り組み                    |
| 11:00~11:10 |             | 講評(10分)        |  |  |
| 11:10~11:20 |             | 休憩(10分)        |  |  |
| テーマ         |             | 研究(業務改善、食事・栄養) | その他  | その他                                      |
| 5           | 11:20~11:35 | 法人名            | 医療法人財団百葉の会                                 | 社会福祉法人湖成会                                |
|             |             | サービス形態         | 小規模多機能型居宅介護                                | 認知症対応型共同生活介護                             |
|             |             | 題名             | KYTとカンファレンスで事故を防ぐ～小規模事業所における事故防止の取り組み～     | 安心できる居場所づくり～みんながいるから寂しくない～               |
| 6           | 11:35~11:50 | 法人名            | 社会福祉法人華加福祉会                                | 株式会社健康倶楽部                                |
|             |             | サービス形態         | 特定施設入居者生活介護                                | 地域密着型通所介護                                |
|             |             | 題名             | 高たんぱく質栄養補助食品摂取による低栄養改善の一考察                 | 「俺は帰る!」～帰宅願望のある方に対する支援～                  |
| 7           | 11:50~12:05 | 法人名            | 社会福祉法人カメリア会                                | 社会福祉法人白山福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 通所介護                                       | 短期入所                                     |
|             |             | 題名             | いつまでも健康に!<br>～栄養教室を通じて在宅の食事を豊かに～           | 動画を用いた記録共有の意義<br>～30歳代の高次脳機能障害利用者支援を通して～ |
| 8           | 12:05~12:20 | 法人名            | 社会福祉法人大和会                                  | 社会福祉法人苗場福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人福祉施設                                   | 小規模多機能型居宅介護                              |
|             |             | 題名             | 食の楽しみを届けたい～健康への取り組み～                       | 認知症の見当識障害へのアプローチ<br>～時間がわかるとできることが増える～   |
| 12:20~12:30 |             | 講評(10分)        |  |  |
| 12:30~13:30 |             | 休憩(1時間)        |  |  |
| テーマ         |             | 研究(リハビリ、看取り)   | 看取り、職種連携、業務改善                              | リハビリ、排泄、食事・栄養                            |
| 9           | 13:30~13:45 | 法人名            | 社会福祉法人緑愛会                                  | 社会福祉法人苗場福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人福祉施設                                   | 介護老人福祉施設                                 |
|             |             | 題名             | リクライニング車椅子上でのバックサポート角度の違いによる体圧分散の違い        | あなたにもあった15日間<br>～ACPを活かした看取りケアの軌跡～       |
| 10          | 13:45~14:00 | 法人名            | 株式会社テイクオフ                                  | 医療法人社団日翔会                                |
|             |             | サービス形態         | 通所介護                                       | 小規模多機能型居宅介護                              |
|             |             | 題名             | デュアルタスクトレーニングを取り入れて                        | 施設を超えた多職種協働<br>～ICTを活用して褥瘡改善に取り組んだ事例～    |
| 11          | 14:00~14:15 | 法人名            | 医療法人社団水澄み会                                 | 社会福祉法人湖成会                                |
|             |             | サービス形態         | 介護老人保健施設                                   | 通所介護                                     |
|             |             | 題名             | 認知機能低下とADLの関連性<br>～ユニットケアに入るリハビリ職員だから出来る事～ | 熱海伊豆海の脚を選んでよかった<br>～稼働向上は利用者の満足から～       |
| 12          | 14:15~14:30 | 法人名            | 社会福祉法人華加福祉会                                | 社会福祉法人苗場福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人福祉施設                                   | 介護老人福祉施設                                 |
|             |             | 題名             | 私たちの看取りケア～より良い湯灌にむけてPart2～                 | 入浴支援ロボットの導入                              |
| 14:30~14:40 |             | 講評(10分)        |  |  |
| 14:40~14:50 |             | 休憩(10分)        |  |  |
| テーマ         |             | 研究(業務改善、その他)   | 排泄   | 住民活動、その他                                 |
| 13          | 14:50~15:05 | 法人名            | 医療法人財団百葉の会                                 | 社会福祉法人苗場福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 病院   | 認知症対応型共同生活介護                             |
|             |             | 題名             | 回復期リハビリテーション病棟における、感染流行期の退院支援の課題           | トイレで失敗したくない～排泄支援の見直し～                    |
| 14          | 15:05~15:20 | 法人名            | 社会福祉法人大和会                                  | 株式会社ライフアシスト                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人福祉施設                                   | 特定施設入居者生活介護                              |
|             |             | 題名             | ポジショニングで拘縮を改善する<br>～利用者のつらい姿勢を何とかしたい～      | トイレでの排泄ができる取り組み                          |
| 15          | 15:20~15:35 | 法人名            | 医療法人社団日翔会                                  | 社会福祉法人苗場福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 認知症対応型共同生活介護                               | 介護老人福祉施設                                 |
|             |             | 題名             | 抗菌性洗口剤をもちいた口腔内の細菌減少                        | ラクテュロス介入による腸閉塞の既往がある方の苦痛軽減に向けての排便コントロール  |
| 15:35~15:45 |             | 講評(10分)        |  |  |
| 15:45~15:55 |             | 休憩(10分)        |  |  |
| テーマ         |             | 研究(感染症、住民活動)   | 業務改善                                       | 排泄、感染症、レクリエーション                          |
| 16          | 15:55~16:10 | 法人名            | 医療法人財団百葉の会                                 | 社会福祉法人華加福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人保健施設                                   | 介護老人福祉施設                                 |
|             |             | 題名             | 新型コロナウイルスクラスター発生時、ゾーニングの工夫でADLの低下は防げたか     | ショートステイ利用時の忘れ物を減らしたい<br>～忘れ物を減らしたい～      |
| 17          | 16:10~16:25 | 法人名            | 株式会社テイクオフ                                  | 医療法人社団平成会                                |
|             |             | サービス形態         | 小規模多機能型居宅介護                                | 介護老人保健施設                                 |
|             |             | 題名             | エコマップを用いた地域交流の実情把握と今後の支援の在り方               | 申し送りノートの見直し～「知らなかった」からの気づき～              |
| 18          | 16:25~16:40 | 法人名            | 社会福祉法人カメリア会                                | 社会福祉法人苗場福祉会                              |
|             |             | サービス形態         | 介護老人福祉施設                                   | 短期入所生活介護                                 |
|             |             | 題名             |  | 選ばれるショートステイを目指して<br>～稼働率の向上に向けた取り組み      |
| 16:40~16:50 |             | 講評(10分)        |  |  |

# 研究発表会

《ROOM 1》

抄録

9月11日(月)

## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 1 】

| 発表時間                 | 法人          | 題名   | 発表者        | ページ |
|----------------------|-------------|--|------------|-----|
| 1<br>10:00<br>10:15  | 社会福祉法人平成会   | 不適切なケアの減少を目指して<br>～自己チェックシートの活用～           | 佐々木典子      | 13  |
| 2<br>10:15<br>10:30  | 医療法人財団百葉の会  | 物品カードによる業務の効率化<br>～スタッフのストレス軽減とコスト削減～      | 井出幸        | 14  |
| 3<br>10:30<br>10:45  | 社会福祉法人大和会   | 子どもを事故や怪我から守るために保育士ができること<br>～安全係からの発信～    | 井出恵        | 15  |
| 4<br>10:45<br>11:00  | 社会福祉法人日翔会   | セラミド効果で皮膚トラブル改善                            | 美甘泰幸       | 16  |
| 11:00<br>11:10       | 講評 (10分)    |  |            |     |
| 11:10<br>11:20       | 休憩 (10分)    |  |            |     |
| 5<br>11:20<br>11:35  | 医療法人財団百葉の会  | KYTとカンファレンスで事故を防ぐ<br>～小規模事業所における事故防止の取り組み～ | 佐々木翔 荻島めぐみ | 17  |
| 6<br>11:35<br>11:50  | 社会福祉法人草加福祉会 | 高たんぱく質栄養補助食品摂取による低栄養改善の一考察                 | 田中美緒       | 18  |
| 7<br>11:50<br>12:05  | 社会福祉法人カメラア会 | いつまでも健康に！<br>～栄養教室を通じて在宅の食事を豊かに～           | 佐藤沙樹       | 19  |
| 8<br>12:05<br>12:20  | 社会福祉法人大和会   | 食の楽しみを届けたい～健康への取り組み～                       | 矢野風香       | 20  |
| 12:20<br>12:30       | 講評 (10分)    |  |            |     |
| 12:30<br>13:30       | 休憩(1時間)     |  |            |     |
| 9<br>13:30<br>13:45  | 社会福祉法人緑愛会   | リクライニング車椅子上でバックサポート角度の違いによる<br>体圧分散の違い     | 赤城駿佑       | 21  |
| 10<br>13:45<br>14:00 | 株式会社テイクオフ   | デュアルタスクトレーニングを取り入れて                        | 佐々木香織      | 22  |
| 11<br>14:00<br>14:15 | 医療法人社団水澄み会  | 認知機能低下とADLの関連性<br>ーユニットケアに入るリハビリ職員だから出来る事ー | 藤原菜津美      | 23  |
| 12<br>14:15<br>14:30 | 社会福祉法人草加福祉会 | 私たちの看取りケア ～より良い湯灌にむけて Part2～               | 松田笑奈       | 24  |
| 14:30<br>14:40       | 講評 (10分)    |  |            |     |
| 14:40<br>14:50       | 休憩 (10分)    |  |            |     |
| 13<br>14:50<br>15:05 | 医療法人財団百葉の会  | 回復期リハビリテーション病棟における、感染流行期の退院<br>支援の課題       | 大野蘭        | 25  |
| 14<br>15:05<br>15:20 | 社会福祉法人大和会   | ポジショニングで拘縮を改善する<br>～利用者のつらい姿勢を何とかしたい～      | 市川宏一 戸澤直行  | 26  |
| 15<br>15:20<br>15:35 | 医療法人社団日翔会   | 抗菌性洗口剤をもちいた口腔内の細菌減少                        | 田中幸太       | 27  |
| 15:35<br>15:45       | 講評 (10分)    |  |            |     |
| 15:45<br>15:55       | 休憩 (10分)    |  |            |     |
| 16<br>15:55<br>16:10 | 医療法人財団百葉の会  | 新型コロナウイルスクラスター発生時、ゾーニングの工夫で<br>ADLの低下は防げたか | 縣寛樹 大塩みゆき  | 28  |
| 17<br>16:10<br>16:25 | 株式会社テイクオフ   | エコマップを用いた地域交流の実情把握と今後の支援の在り<br>方           | 小関麻理       | 29  |
| 18<br>16:25<br>16:40 |             |  |            |     |
| 16:40<br>16:50       | 講評 (10分)    |  |            |     |

|        |                              |       |                    |
|--------|------------------------------|-------|--------------------|
| 題名     | 不適切なケアの減少を目指して～自己チェックシートの活用～ |       |                    |
| 法人名    | 社会福祉法人平成会                    | 事業所名  | 特別養護老人ホームリアンヴェール美里 |
| 発表者    | 佐々木典子                        | 共同研究者 |                    |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                     |       |                    |

## I はじめに

身体拘束廃止・虐待防止委員会にて不適切ケアを減らすために、法律の周知と毎月のラウンドだけでは不適切なケアの減少が難しい為、自己チェックシートを使用し課題を明確化することで不適切ケアの減少を図りたいと考えた。

## II 目的

介護職員全員に2カ月に1回自己チェックシートを使用し、ユニットでの話し合いと個々の振り返りにより自らのケアを振り返る事で高齢者虐待の芽となる不適切ケアの減少を図る。

## III 方法

1. 研究期間：2022年4月～2023年4月
2. 研究対象：A施設の介護職員10ユニット42名。  
男性22名、女性20名。
3. 具体的方法（評価尺度を含む）
  - 1) 2カ月に1回介護職員全員に身体拘束虐待防止委員会で作成したシートを記名で実施する。  
(アンケート項目：法律、虐待の種類、薬剤関係、ストレス、虐待行為に準ずるありがちな不適切なケアの27項目)
  - 2) 集計と分析を行う。(全体とユニット別で課題を明確化しユニット会議で改善の為の話し合いを行う)
  - 3) 3回目実施後からは個々の変化がわかるように一人一人に配布する。
  - 4) 2023年4月に一年間の集計結果報告と課題の報告を勉強会として実施する。
4. 評価尺度：初回結果と4回目結果の比較とする。

## IV 倫理的配慮

対象者に本研究の主旨、目的、個人の特定がされないようプライバシー保護等を説明の上、同意を得ている。

## V 結果

1. コロナ感染等により年4回の実施となった。改善出来なかったと回答している項目は44%あり、改善が出来た項目が61%に上った。
2. 全体、ユニット別での集計を行い、各ユニットの弱い部分を明確にし、集計をユニットに貼り出し会議で弱い部分の項目について改善策を話し合った。
3. 3回分の個人データをまとめ、個人のケアの変化が分かるようにし配布を行った。(重大事故に繋がる恐れのある項目や前回に比べ改善なく悪い結果のみの職員には個別に話しを聞き対応した)
4. 職員会議時に集計報告として1年間の変化を勉強会として実施し周知を行った。

## VI 考察

1年間の推移として27項目中、21項目で改善がみられ、改善が出来た職員数が全体の61%と不適切なケアの減少を図る事が出来た。しかし、項目によっては重大事故に繋がる恐れのあるものや、必ず0にできる不適切ケアも含まれており、その項目をどう改善していくのが課題といえる。個人での振り返りはとても重要だが、環境や利用者それぞれの特徴などユニットや業務手順など、どこに要因があるのかを追及していく必要がある。これからも一人ひとりが気づく事、考える事、疑問を持つことができる様、そして相談できる環境を構築できる様、施設全体で取り組んでいきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 松本望, 高齢者介護施設における虐待予防に焦点を当てた研究方法と課題;調査研究のレビューおよび調査項目の分類を手がかりに社会福祉学評論, 13, 2014, 17
- 2) 松岡佐智, 施設内虐待の発生要因と防止策の課題—高齢者虐待に関する先行研究等の整理から—福岡県立大学人間社会学部紀要, 2020, 29, 1, 35-44





|        |                                   |       |                |
|--------|-----------------------------------|-------|----------------|
| 題名     | 物品カードによる業務の効率化～スタッフのストレス軽減とコスト削減～ |       |                |
| 法人名    | 医療法人財団百葉の会                        | 事業所名  | 介護老人保健施設ききょうの郷 |
| 発表者    | 井出幸                               | 共同研究者 |                |
| サービス種別 | 通所リハビリテーション                       |       |                |

## I はじめに

5Sとは職場環境整備のローガンで、安全衛生管理の基本とされている。A事業所では、物品がきちんと管理されていない、ローリングストックが出来ていない、無駄なコストの発生等の問題や、物品発注の流れにストレスを感じるスタッフがいる現状があった。物品管理が出来ていないと、いずれインシデントにつながる恐れがあると感じた為、5S活動を実施した。

## II 目的

1. 5S活動を通して、安全で快適な職場環境の実現を図る。
2. 発注カードの有効性を確認する

## III 方法

1. 研究期間 2022年10月5日～2023年4月11日
2. 研究対象

A事業所で勤務する20代～50代のスタッフ6名  
(看護、介護、リハビリ職から無作為に選出)

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) 2022年10月に5Sの勉強会実施
- 2) 物品発注カードの試験導入
- 3) 物品発注カードの使用開始
- 4) 5S活動取り組み前の2022年2月14日～同年4月11日までの物品請求にかかる入力時間(対象者)、実際のコストを2023年の同期間と比較する。
- 5) 取組後のスタッフの意識調査アンケートを4件法で9問対象者に実施。

## IV 倫理的配慮

アンケート結果は回答者が特定できないように秘密を保持し、得られたデータは研究以外で使用しない旨を対象者に説明し、口頭にて同意を得ている。

## V 結果

2022年10月に複数回に分け5Sについての勉強会を実施。物品の定数、定位置、発注のタイミングが記入

されたカードを使用して物品請求を行うことで、1回の発注の入力にかかる時間が57%減少した。期間中の発注は、2022年が6回116品、102,278円であり、2023年は4回28品、41,526円であった。取組後の意識調査は表1に示す。

表1 スタッフの意識調査 単位(名)

|  | 感ととも<br>じるも | 感ま<br>あ<br>じる | い感あ<br>ま<br>り<br>な | い感全<br>く<br>じ<br>な |
|--|-------------|---------------|--------------------|--------------------|
| ①入力時間の短縮を感じるか  | 5           | 1             | 0                  | 0                  |
| ②カタログで品番を探すストレス等、小さなストレスを省くことはできたか                       | 6           | 0             | 0                  | 0                  |
| ③以前と比べ、資材が無くて困った経験は減ったか                                  | 1           | 1             | 4                  | 0                  |
| ④発注入力は簡単で誰でもできる方法だと思うか                                   | 4           | 2             | 0                  | 0                  |
| ⑤カードを使った発注方法は、新人や中途採用のスタッフに教えるときに簡単だと思うか                 | 6           | 0             | 0                  | 0                  |
| ⑥5Sの取り組みを始めてから無駄な資材は省けたと思うか                              | 5           | 1             | 0                  | 0                  |
| ⑦物品の見える化が職場内でできたと思うか                                     | 2           | 4             | 0                  | 0                  |
| ⑧カードを使うことでローリングストックを意識するようになったか                          | 3           | 3             | 0                  | 0                  |
| ⑨5Sの取り組みを始めてから、コスト漏れ、発注間違い、ストックが切れた状態はインシデントだという意識は芽生えたか | 4           | 1             | 1                  | 0                  |

## VI 考察

5S活動の実施と、発注カードを使用することで現場内のローリングストックが確立され、発注カードを使った物品請求の方法の有用性が明らかとなった。また発注回数の減少や、入力時間の短縮がケアを提供する時間や清潔な環境の保持へとつながることができた。また、カードを使用することで、スタッフの教育にかかる時間の短縮にもつながり、物品発注コストの削減だけでなく、スタッフのストレスに関わる時間の短縮にもつながることが明らかとなった。

### 【参考文献】

- 1) 医療現場の5S活用ブック, 日本能率協会マネジメントセンター, 2016
- 2) 野村志保子, 5Sの視点から見た看護の質向上, 順天堂大学保健学部, 順天堂保健看護研究, 2, 1, 2013



|        |                                     |       |           |
|--------|-------------------------------------|-------|-----------|
| 題名     | 子どもを事故や怪我から守るために保育士ができること～安全係からの発信～ |       |           |
| 法人名    | 社会福祉法人大和会                           | 事業所名  | やまとさくら保育園 |
| 発表者    | 井出恵                                 | 共同研究者 | 小島真輝 中村茜  |
| サービス種別 | 認可保育園                               |       |           |

## I はじめに

近年、報道などで園児の関連する事故を多く耳にするようになった。持病を持った園児も在籍していることもあり、職員の安全に対する意識を高め園児の事故を減らすことを目的に、安全係が発足した。職員の安全意識をあげるための取り組みを報告する。

## II 目的

1. ヒヤリハットの件数を上げて、気づきを増やし職員間で周知・共有することで事故を防ぐ。
2. 職員の安全意識を上げる。
3. 実際に事故が起きたときに、起きた事故を振り返り優先順位を決めて対応できる。

## III 方法

1. 研究期間：2021年4月1日～2022年3月31日
2. 研究対象：常勤職員19名、非常勤職員10名
3. 具体的方法
  - 1) ヒヤリハットの表の改訂
  - 2) 外部や係主催の園内研修、アンケート調査
  - 3) 事象の振り返り、会議での全体周知、緊急時のフローチャートの作成

## 4. 評価尺度

- 1) グラフによるヒヤリハット件数の比較
- 2) アンケート調査による職員の意識調査

## IV 倫理的配慮

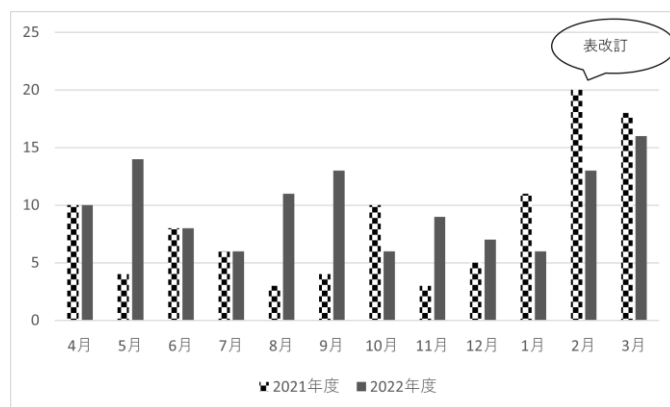
本研究の主旨と目的を職員に説明し、同意を得た。

## V 結果

ヒヤリハット件数は、年間を通して見ると微増した。2021年度は、月によって件数のばらつきが多くあったが、2021年2月より、ヒヤリハットの記入様式を変更したことで、平均的に出すことができるようになった。緊急時のフローチャート作成後1件救急搬送があったがスムーズに対応することができた。子どもの緊急連絡簿を改訂し、必要な情報を一元化することで

情報を集約することができ、緊急時にスムーズに対応できるようになった。

図1. 表改訂前と改訂後のヒヤリハット件数の推移



職員の安全に対する意識は、日頃の取り組みにより高く持つことが出来ていることがアンケート調査で分かった。ヒヤリハット改定前の意識調査をしていないため比較検討はできないが、子どもの事故を防ごうとする意識はどの程度あるか？88.9%、事故が起きたときの対応の仕方を知っているか？85.2%という結果が出た。

## VI 考察

ヒヤリハットの件数については様式を入力しやすいものに変更したことで、様々な職員が入力し、件数の安定化につながったと考える。事故減少については園全体で職員の安全意識が上がる取り組みを増やし、事故が起きた際はその都度振り返りを行うことで、意識が上がったと考えられる。今後は定期的にアンケート調査を行い、チームワークとスピード感を大切に、緊急時の対応のしくみをその都度見直し、更新していきながら職員の意識を上げる取り組みを増やしていく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 森美佐紀他, 子どもの事故と安全に関する現状と課題, 東京女子大学紀要論集, 69, 2, 2019, 137-149



|        |                 |       |                |
|--------|-----------------|-------|----------------|
| 題名     | セラミド効果で皮膚トラブル改善 |       |                |
| 法人名    | 社会福祉法人日翔会       | 事業所名  | 特別養護老人ホームあいご   |
| 発表者    | 美甘泰幸            | 共同研究者 | 三輪愛莉 奥田美名 山本香織 |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設        |       |                |

## I はじめに

老人性乾皮症とは、皮脂や汗、保湿因子が加齢と共に減少することで生じる皮脂欠乏症である。当施設でも、入所者の半数以上が皮膚の乾燥・痒みを自覚されており、掻破症や不眠などのトラブルに繋がっている。

そこで、手軽に有効な保湿が可能とされているセラミド配合の保湿剤を使用することによって、皮膚トラブル等が改善した事例を報告する。

## II 目的

セラミド配合の保湿剤を使用することで、乾燥や痒みが軽減できることを立証する。

## III 方法

1. 研究期間：2023年2月17日～4月18日

2. 研究対象：利用者3名(食事・水分が摂取できている方を選出)

A氏 90歳代男性要介護5寝たきり度 B2 認知症度Ⅱb

B氏 70歳代女性要介護4寝たきり度 B2 認知症度Ⅱa

C氏 90歳代女性要介護4寝たきり度 C1 認知症度Ⅲa

3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) 取り組み開始時・終了時の利用者の皮膚状態・痒みの状況等について比較
- 2) セラミド配合度が高いとされている保湿剤を1日2回(午前9時・午後5時)、患部を中心に全身に塗布
- 3) 評価・検査(週1回)  
スキンチェッカーによる水分・油分量の検査実施(午前8時に実施)  
観察により肉眼的に状態把握(入浴時)

## IV 倫理的配慮

研究目的、方法、倫理的配慮について、本人、家族へ書面と口頭で説明し同意を得た。

## V 結果

取り組み前後で皮膚の水分量・油分量の数値に改善が

見られた(表1)。肉眼による皮膚状態の確認でも、徐々に掻き傷が減少し、1か月後には自覚症状の痒みも消失した。入所者3名とも皮膚トラブルの軽減・解消という成果が得られた。

表1 スキンチェッカーによる数値の推移(%)

|    | 水分(施設平均20%) |      | 油分(施設平均28%) |      |
|----|-------------|------|-------------|------|
|    | 2/17        | 4/18 | 2/17        | 4/18 |
| A氏 | 11          | 29   | 13          | 43   |
| B氏 | 12          | 22   | 15          | 24   |
| C氏 | 14          | 21   | 29          | 24   |

## VI 考察

セラミド配合の保湿剤を1日2回塗布するという手軽な方法で利用者3名の皮膚トラブルが改善した。

老人性乾皮症の治療にはスキンケア教育が必須とされている<sup>3)</sup>が、今回の方法は「手軽で誰でも取り組みやすい」という点で有効だったと考える。このためセラミド配合の保湿剤とスキンケア教育を併用していくことでさらなる効果が期待できると考える。

今回は3名と研究対象者が少なく、効果の立証が明確とは言えない。今後は施設利用者全体にセラミド配合の保湿剤を導入し、有効性を明確にしていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 對間秀利, 第45回教育セミナー(2020)「角層のサイエンス」セラミドに着目した敏感肌のスキンケア, 日本化粧品学会誌, 45, 3, 2021, 201-208
- 2) 山本道代, 林裕子, 高齢者に対する皮膚保湿に関する文献検討, 北海道科学大学研究紀要, 43, 2017, 21-28
- 3) 戸倉新樹, WOCNursing. 老人性乾皮症/ドライスキンの治療・ケア, 医学出版, 2022



|        |   |       |               |
|--------|---|-------|---------------|
| 題名     | KYT とカンファレンスで事故を防ぐ～小規模事業所における事故防止の取り組み～ |       |               |
| 法人名    | 医療法人財団百葉の会                              | 事業所名  | 小規模多機能ホーム花ごろも |
| 発表者    | 佐々木翔 荻島めぐみ                              | 共同研究者 | 柏樹ほのか         |
| サービス種別 | 小規模多機能型居宅介護                             |       |               |

## I はじめに

A事業所では繰り返されるインシデントが多い事、事故レベル0のインシデントが少ない事が課題である。職員に忘れ物についてのアンケートを取り、過去のインシデントを分析した結果、事故カンファレンスを行う仕組み、教育や研修が不十分な状態であるとわかった。現状の課題に対して仕組み、教育、意識の3つを柱に取り組みだ内容を報告する。なお事故レベル分類についてはレベル0（間違ったことが実施される前に気付いた）レベル1（間違った事が実施されたが利用者に変化がなかった）としている。

## II 目的

危険予知能力(気付ける力)を高め、事故レベル0を増やし、繰り返されるインシデントを減らす

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年3月15日～2023年5月15日

### 2. 研究対象

小規模多機能職員16名（常勤10名、非常勤6名）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 教育として事業所オリジナルの資料を用いた危険予知トレーニング（Kiken Yochi Training:以下 KYT とする）を集合研修、紙面にて実施する。
- 2) 仕組みとして日勤リーダーを中心に、事故発生後に15分以内でカンファレンスを実施する。
- 3) 業務マニュアルの見直し、注意事項の視える化を行う事で職員の事故に対する意識の向上を図り、事故意識は3項目単一回答のアンケートで評価する。

## IV 倫理的配慮

研究を実施するにあたり、職員には紙面にて説明し同意を得た。また利益相反にあたる行為はない。

## V 結果

1. KYTを実施した結果、取り組み前後でレベル0

のインシデントは14件から33件に、レベル1のインシデントは42件から58件に変化した。

2. 事故カンファレンスを行う仕組みを作り実施した結果、繰り返されるインシデントが60%減少した。
3. 業務マニュアル見直し、注意事項の視える化を行った事で利用者の繰り返される忘れ物は0件となった。事故意識についての調査では100%で向上したと回答、コミュニケーションについて以前より仕事の話をするようになった、他の職員とコミュニケーションが取りやすくなった、の2問が75%となった。

## VI 考察

福田氏らは「危険を事前にキャッチする『気づく』力を高め、事故を未然に防ぐことは最重要である」<sup>1)</sup>と述べている。3つを柱に取り組み得た結果を受け、KYTで職員の気付く力を養い共有した事、カンファレンスで職員が話をする機会が増えた事、視える化で職員同士が声をかけ合えるようになった事の3点が、結果の要因と考える。気付きも大切だったが、職員間のコミュニケーションを向上させる事も重要であった。気付きとコミュニケーションに注力し、これからも利用者に信頼され、安心して過ごせる施設を目指したい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 福田明・斉藤真木：介護福祉士養成教育におけるKYT(危険予知訓練)の導入とその効果—高齢者施設における介護職員へのKYTの取り組み事例を踏まえて—, 松本短期大学研究紀要, 20, 2011, 61-74





|        |                            |       |                |
|--------|----------------------------|-------|----------------|
| 題名     | 高たんぱく質栄養補助食品摂取による低栄養改善の一考察 |       |                |
| 法人名    | 社会福祉法人草加福祉会                | 事業所名  | クラシックレジデンス江戸川台 |
| 発表者    | 田中美緒                       | 共同研究者 | 佐久間愛 鳥越佐江子     |
| サービス種別 | 特定施設入居者生活介護                |       |                |

## I はじめに

相談員より入居者 A 氏の介護への拒否が強く下肢挙上等が困難であり、栄養面で浮腫を改善したいと相談があった。A 氏は食事摂取量が少なく、活気が無かった。また、体重減少・Alb 値の低下が見られ、たんぱく質が不足しているのではないかと考えた。

## II 目的

高たんぱく質栄養補助食品を提供することで、栄養状態や浮腫がどのように改善したかを検証する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年6月9日～2023年3月17日

### 2. 研究対象

A 氏 90歳代 女性 要介護4 介護拒否：強  
既往歴：左大腿骨骨折、高血圧、子宮摘出  
アルツハイマー型認知症、両下肢浮腫

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

栄養障害の A 氏に栄養素、価格、味から選定した高たんぱく質栄養補助食品（タンパクゼリーセブン ホリカフーズ(株)以下、タンパクゼリー）を1日1回提供し、体重、血液データ、要介護度を検討する。

## IV 倫理的配慮

事例発表について、入居者と家族に口頭・書面にて説明を行い、同意を得た。

## V 結果

2017年7月（入居時）身長 148 cm、体重 45.8 kg BMI20.9であった。2019年4月に要介護1から要介護4になった。2020年6月は体重 47.5 kg、アルブミン値（以下 Alb）2.8g/dl で中等度栄養障害、総蛋白質値（以下 TP）6.2mg/dl、ヘモグロビン（以下 Hb）10.5g/dl で低値、中性脂肪 77g/dl で低め、浮腫が著明であった。7月に経口栄養剤が処方されたが摂取進まず、8月にタンパクゼリーの提供を開始した。2021年

1月は Alb2.8g/dl、TP6.3g/dl とほぼ変化は無かった。2月に COVID-19 感染し、4月は Alb2.7g/dl、TP5.5g/dl と低下が見られた。2022年1月 Alb3.7g/dl、TP6.9g/dl、Hb13.5g/dl で基準値となった。以降、Alb は軽度栄養障害、Hb は改善、TG も上昇した。タンパクゼリー提供開始から、約1年6ヶ月（2020年8月～2022年1月）を要した。

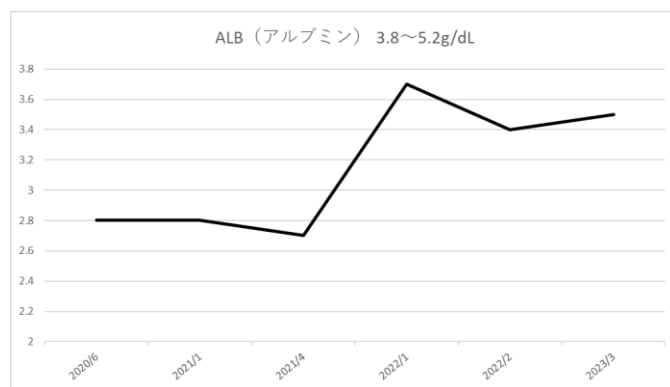


図1 タンパクゼリー付加前後の Alb 値の推移

## VI 考察

高たんぱく質栄養補助食品を摂取しはじめてから栄養状態の改善までに1年6ヶ月を要した。浮腫の改善は見られず、要介護度の改善には至らなかったが、要介護4で食い止めることができた。

COVID-19に感染し、一時的な栄養状態の低下は見られたが、家族の協力もあり、継続的に摂取することでADLや表情、食欲、肌艶などに改善が見られ、日常生活の向上につながったと考えられる。両下肢の浮腫に対しては、現在、弾性包帯を巻き、利尿作用のある降圧剤に変更し、引き続き浮腫改善に努めている。今後も、入居者に対し早期介入ができるよう、多職種での情報共有に努め、1人1人に寄り添った支援をしていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 杉山みち子, 「介護予防マニュアル」分担研究班, 栄養改善マニュアル(改訂版), 厚生労働省, 2009, 11





|        |                              |       |                     |
|--------|------------------------------|-------|---------------------|
| 題名     | いつまでも健康に！～栄養教室を通じて在宅の食事を豊かに～ |       |                     |
| 法人名    | 社会福祉法人カメラア会                  | 事業所名  | 墨田区特別養護老人ホームなりひらホーム |
| 発表者    | 佐藤沙樹                         | 共同研究者 | 外村友理                |
| サービス種別 | 通所介護                         |       |                     |

## I はじめに

毎月デイサービスでは栄養科主催の食事レクを行っているが、さらなる利用者の満足度及び集客率向上のために、栄養科にて行った取り組みを報告する。「在宅の方は自分で食事・栄養管理ができていない」というところに焦点を当て、「利用者には知識の提供と楽しみを届けたい」と栄養教室を行った。

## II 目的

偏りがちな高齢者の食事に対する意識を向上させる。栄養教室を通じて学んだことを自宅の食事に活かす。

## III 方法

1. 研究期間：2023年1月17日～6月13日

2. 研究対象：第2火曜日の利用者30名

他の曜日と比較して自立度が高く、火曜日利用者のうち6割が認知症高齢者の日常生活自立度I・II及び障害高齢者の日常生活自立度Jに該当する。

### 3. 具体的方法

- 1) 毎月、栄養科が季節に合った内容の栄養教室を計画する。1月バランスの良い食事、2月三大栄養素、3月骨粗しょう症、4月フレイル予防、5月風邪予防、6月食中毒予防について。
- 2) 栄養教室は1回60分とし、前半は栄養や食事についての説明を行う。後半は内容に応じて利用者が参加できる取り組みを行う。  
10食品群チェックシートやフレイルチェック、クイズ、嚥下体操など。
- 3) 毎回終了後、利用者全員に5項目の記名式アンケートを実施する。

### 4. 評価尺度

- 1) アンケート結果
- 2) その後の利用者の言動及び行動変容

## IV 倫理的配慮

アンケートにデータの使用は本研究以外の目的では

使用しないことを記載し、提出をもって同意とした。

## V 結果

### 1. アンケート結果

回収率は全日程80%以上。

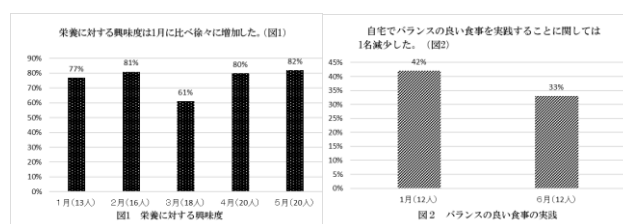


図1 栄養に関する興味度 図2 バランスの良い食事の実践

### 2. 利用者の言動及び行動変容

「朝・昼・夕で違うものを食べるように気を付けるようになった。」「いろんな食べ物を食べるように気を付けている。」等の行動変容を得た。また、「もっといろんな料理を知りたい。」「家でも作りやすい料理を教えてください。」等の食事に関する質問も増加した。しかし、自宅でバランスの良い食事を実践することに関しては「手が動きにくいから難しい。」「作りたいけど重い鍋を持つのが大変。」「娘が買ってきたものになっちゃうから。」等の声があり、自宅で実践するまでには至らなかった。

## VI 考察

自宅でバランスの良い食事を実践することに関しては知識の提供だけでは難しく、個別支援が必要であると考えられる。可能な範囲で個別に支援を行ったり利用者参加型の調理レクを企画したりしてより実践しやすいよう工夫していきたい。また、ご家族様への情報提供として、生活環境に合わせた社会資源の活用方法を提供することも大切であると感じた。

### 【引用・参考文献】

- 1) 真鍋久ら, 在宅高齢者の健康と食事内容の実態調査, 日本食生活学会誌, 18, 2, 2007, 117-125



|        |                      |       |              |
|--------|----------------------|-------|--------------|
| 題名     | 食の楽しみを届けたい～健康への取り組み～ |       |              |
| 法人名    | 社会福祉法人大和会            | 事業所名  | 特別養護老人ホーム愛生苑 |
| 発表者    | 矢野風香                 | 共同研究者 | 塩田彩乃         |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設             |       |              |

## I はじめに

利用者の栄養改善・生活の質(Quality Of Life：以下、QOLとする)の向上には、安全が確保された食の楽しみの提供が重要である。A氏は歯の状態を考慮してきざみ食を提供していたが、食事摂取量が少なく食事形態に対する不満を抱いていた。そこで、過去の生活歴およびA事業所での生活での様子を基に食事形態の変更を行った。本人の意向を踏まえた食事形態の提供による食事摂取量の変化について報告する。

## II 目的

A氏の食事形態の見直しに取り組み、その効果を明らかにする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年2月1日～6月30日

### 2. 研究対象

A氏 70歳代 男性 要介護度5

改善前：粥きざみ食（約1か月）

改善後：粥一口大（約1か月）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 変更前と変更後の1日当たりの食事摂取量の変化
- 2) A氏への聞き取り調査
- 3) 職員アンケートを実施し、客観的な視点から利用者の満足度を評価（介護課、医務課、栄養課、総務課職員 計64人）

## IV 倫理的配慮

A氏及びそのご家族に対し研究の目的や方法について説明し、書面にて同意を得た。職員についても研究の目的を説明し、研究協力の同意を得た。

## V 結果

1. 粥きざみ食提供時と粥一口大提供時での食事摂取割合を比較したところ、粥きざみ提供時から粥一口大提供時で有意に増加した。また、主菜副菜のエネルギー

一摂取量とたんぱく質摂取量においても、粥きざみ食提供時から粥一口大提供時で有意に増加した。結果を図1に示す。

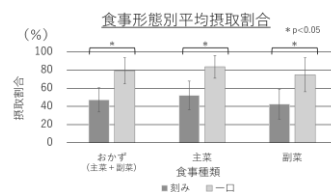


図1 食事形態別平均摂取割合 (%)

2. A氏より「食形態が変わったことによって変化を感じることはない。ただ普通の食事に近づいたのではないかと希望が見えた気がする。」とのご意見をいただいた。

3. 職員から「A事業所での生活を前向きに捉えられ、積極的になったように感じられた」等の回答を得られた。（アンケート：2022.5実施 回答率68.8%）

## VI 考察

本人の意向に寄り添い、可能な範囲で食の楽しみを提供することは、栄養改善に繋がると考えられる。今回の食事形態の改善は、多職種間の信頼関係や利用者を想う気持ち、多職種間での情報共有や現状確認等を行ったこと、食事中のA氏の見守りを徹底して誤嚥予防を行ったことが、困難な対応を可能にしたのではないかと考える。今後も、利用者の摂食嚥下状態に適した食事形態の見直しを行い、生きがいとなる食事でQOLの向上に寄与できることを願う。

### 【引用・参考文献】

- 1) 山下万紀子他, 食事摂取不良の高齢透析患者に対する栄養状態向上の試み, 特別養護老人ホームにおける食事提供量の減量と汁物の追加, 日本老年医学会雑誌, 55, 1, 2018, 90-97



|        |                                     |       |                    |
|--------|-------------------------------------|-------|--------------------|
| 題名     | リクライニング車椅子上でのバックサポート角度の違いによる体圧分散の違い |       |                    |
| 法人名    | 社会福祉法人緑愛会                           | 事業所名  | 特別養護老人ホーム オー・ド・エクラ |
| 発表者    | 赤城駿佑                                | 共同研究者 |                    |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                            |       |                    |

## I はじめに

寝たきり高齢者においては褥瘡予防の観点から離床の重要性が指摘されており、離床時にはリクライニング車椅子を用いることが多い。しかし離床中の具体的な褥瘡予防方法は確立されていないため、実際の利用者に対してリクライニング車椅子上でのバックサポート角度の違いによる体圧分散値の測定を行った。

## II 目的

リクライニング車椅子上でのバックサポート角度別の仙骨部と坐骨部の体圧分散値を明らかにする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年4月1日～2023年5月6日

### 2. 研究対象

車椅子を移動手段として使用している利用者13名（年齢70～90歳代、性別男：女=7：6名、身長152.22±10.65cm、体重45.54±8.12kg、BMI19.66±2.93）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

体圧測定機器には携帯型接触圧力測定器パームQ（CAPE社製）を使用し、仙骨部と坐骨部にパームQのセンサーパットを装着した。リクライニング車椅子（松永製作所製のFR-11R）上の姿勢は背もたれにもたれかかり、足部はフットサポートに置いた状態で安静にするよう指示した。リクライニング車椅子のバックサポート角度は10°、30°、60°の3条件とし角度変更時は背抜きをしないものとした。各角度における仙骨部と坐骨部の体圧の計測は、20秒、40秒、60秒の3回計測を行い、それらの平均値を記録した。仙骨部と坐骨部の各バックサポート角度の体圧値に対してFriedman検定で解析し、群間に有意差がみられた場合に多重比較法を用いて比較を行った。統計処理には、Kikuchi Tomio Software and Consulting MT

システム社の統計学総合ソフト（エクセルアドイン版）を使用し、有意水準は5%未満とした。

## IV 倫理的配慮

利用者や家族に対し、口頭にて説明し同意を得た。

## V 結果

仙骨部の体圧は10°で23.35±15.01、30°で20.44±37.86、60°で10.58±33.89であり、10°と60°間、30°と60°間で有意に減少した（ $p<0.05$ ）。坐骨部は10°で9.55±5.18、30°で52.91±27.45、60°で59.48±40.66であり、10°と30°間、10°と60°間で有意に増加した（ $p<0.05$ ）。

## VI 考察

仙骨部における体圧は10°、30°と比較し60°では減少傾向であった。一方で坐骨部の体圧は10°と比較し30°、60°で増加傾向であった。坂村らによるとバックサポート角度の増加に伴い、骨盤傾斜角度が減少すると報告している<sup>1)</sup>。また見木らは骨盤傾斜角度の減少に伴い、仙骨部の体圧は減少し、坐骨部の体圧は増加すると報告している<sup>2)</sup>。本研究においてもバックサポート角度増加に伴い骨盤傾斜角度が減少したことで、仙骨部の体圧は減少、坐骨部の体圧は増加したと考えられる。今回の研究結果からリクライニング車椅子のバックサポート角度の違いにより褥瘡好発部位が違う可能性が示唆された。

### 【引用・参考文献】

- 1) 坂村慶明, 車椅子座位時のリクライニング機能およびティルト機能の使用による骨盤帯アライメントの変化, 理学療法の臨床と研究, 25, 2016, 79-84
- 2) 木太郎, 座位姿勢の変化と臀部にかかる力の研究, 日本義肢装具学会誌, 29, 3, 2013, 168-174



|        |                     |       |                   |
|--------|---------------------|-------|-------------------|
| 題名     | デュアルタスクトレーニングを取り入れて |       |                   |
| 法人名    | 株式会社テイクオフ           | 事業所名  | 株式会社テイクオフ全通所介護事業所 |
| 発表者    | 佐々木香織               | 共同研究者 | 伊藤由佳 岡崎日和         |
| サービス種別 | 通所介護                |       |                   |

## I はじめに

昨年1事業所で認知症予防プログラムとしてデュアルタスクトレーニングを開始した。結果として、意欲や心身機能の向上に一定の効果が見られた。その結果を踏まえ、通所介護事業所全体で明確なルールを決め、水平展開する事で、運動機能と思考機能の意欲にどのような影響を及ぼすのかを取り組み、結果を報告する。

## II 目的

通所介護事業所全体で取り組み、明確な評価尺度を使用し、客観的な効果を検証する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年4月1日～2023年6月30日

### 2. 研究対象

A 法人通所介護事業所の利用者全員 234人

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) デュアルタスクトレーニングとはなにか通所介護2事業所、認知症対応型通所3事業所、地域密着型通所1事業所の6事業所に説明を行う。
- 2) 3月23日、6事業所に作成した動画を使用し、トレーニング方法の説明を行い、周知する。
- 3) LIFE評価項目 Vitality Index 意欲の指標にて3月末時点の全利用者の評価を実施する。(1) 自ら行う (2) 促されて出来る (3) 無関心の3段階評価。
- 4) 毎日の体操に50からカウントダウンをしながら同時に足踏みを利用者に付き添って行う。
- 5) 6月末、利用者家族にLIFE評価項目 Vitality Indexにてアンケートを行い、結果をもとに評価する。

## IV 倫理的配慮

本研究には個人を特定できる内容は含まれていないが利用者、家族に説明し同意を得た。

## V 結果

比較結果は以下の表1の通りであった。

表1 LIFE評価項目 Vitality Index 比較結果

|      |     | 通所介護    | 認知症対応型通所 | 地域密着型通所 |
|------|-----|---------|----------|---------|
| 意思疎通 | (1) | 23.30%  | -7.10%   | 2.20%   |
|      | (2) | -24.70% | 19.10%   | -2.20%  |
|      | (3) | 1.40%   | -12.00%  | 0.00%   |
| 起床   | (1) | 0.20%   | 4.90%    | 15.70%  |
|      | (2) | -0.90%  | 2.10%    | -9.10%  |
|      | (3) | 0.70%   | -7.00%   | -6.60%  |
| 食事   | (1) | -16.80% | 7.30%    | -19.50% |
|      | (2) | 16.80%  | 2.70%    | 19.50%  |
|      | (3) | 0.00%   | -10.00%  | 0.00%   |
| 排泄   | (1) | 13.40%  | 20.90%   | -4.50%  |
|      | (2) | -9.90%  | -11.60%  | 4.30%   |
|      | (3) | -3.50%  | -9.30%   | 0.20%   |
| リハビリ | (1) | 0.90%   | -4.10%   | 15.50%  |
|      | (2) | -2.70%  | 14.70%   | -19.20% |
|      | (3) | 1.80%   | -10.60%  | 3.70%   |

## VI 考察

全体的に意欲面において一定の向上が見られた。特に認知症対応型通所介護では無関心からの大幅な向上が見られている。毎日トレーニングを続ける事で脳への刺激が与えられ、意識的に運動機能と思考機能を働かせる効果があるという事が評価尺度の使用で、客観的に検証する事が出来た。

トレーニングを成功させる為には、一人ひとりに寄り添うケアを通しアプローチする事が重要である。これこそが意欲向上に繋がった要因と言える。今後も利用者の意欲に働きかけることで、出来る限り住み慣れた地域で生活ができるよう、通所介護事業所として在宅生活を支えていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) アンデッシュハンセン, 運動脳, サンマーク出版, 2022, 76-167





|        |  |       |                     |
|--------|--|-------|---------------------|
| 題名     | 認知機能低下と ADL の関連性—ユニットケアに入るリハビリ職員だから出来る事— |       |                     |
| 法人名    | 医療法人社団水澄み会                               | 事業所名  | 介護老人保健施設 松江センターアゼリア |
| 発表者    | 藤原菜津美                                    | 共同研究者 | 森山開人                |
| サービス種別 | 介護老人保健施設                                 |       |                     |

## I はじめに

当施設では1ユニットに一人リハビリ職員を配置しているが、日々の関わりの中で、認知機能の低下に伴い日常生活動作（以下、ADL）も低下していく利用者の介入に悩むことが多い。そこで、認知機能と ADL の関係性を明確にしたいと思い研究を行った。

## II 目的

当施設入所者の認知機能重症度と ADL の関係性を検証し、リハビリ職員がユニットケアに介入する際に根拠に基づいた関わりができるようになる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022 年 3 月 1 日～2023 年 5 月 31 日

### 2. 研究対象

研究期間に当施設に入所した利用者の内 HDS-R20 点以下であり、視覚に障害がない端坐位保持可能な利用者 64 名

### 3. 具体的方法

- 1) HDS-R を実施し、認知機能の重症度を分類。
- 2) 機能的自立度評価（以下、FIM）で ADL 評価。

### 4. 評価尺度

- 1) 認知機能重症度と FIM 運動 13 項目得点との関連性について Kruskal-Wallis 検定を実施。
- 2) 有意差が認められた項目について、Mann-Whitney 検定を用い 2 群間比較を行う。有意水準は 5%未満とする。

## IV 倫理的配慮

研究データは個人が特定できないように氏名を削除した上で分析した。

## V 結果

結果は以下表 1 の通り。3 群間比較で有意差があった項目に対して、2 群間比較を行った。

表 1 FIM 運動と Mann-Whitney 検定結果

|          | 項目    | 3群  | 2群       |          |
|----------|-------|-----|----------|----------|
|          |       |     | 重度群と中等度群 | 中等度群と軽度群 |
| セルフケア    | 食事    | NS  |          |          |
|          | 整容    | *** | *        | *        |
|          | 清拭    | *   | NS       | NS       |
|          | 更衣（上） | *** | *        | NS       |
|          | 更衣（下） | **  | *        | NS       |
|          | トイレ動作 | *   | *        | NS       |
| 排泄コントロール | 排尿管理  | *   | **       | NS       |
|          | 排便管理  | **  | **       | NS       |
| 移乗       | 3項目   | NS  |          |          |
| 移動       | 2項目   | NS  |          |          |

\*:p<0.05、\*\*:p<0.01、\*\*\*:p<0.001、NS:有意差なし

## VI 考察

ADL 動作は手続き記憶であり、「手続き記憶は認知症中等度まで保たれる」<sup>1)</sup>とされている。今回の結果からも、中等度までは ADL はある程度保たれていると考えられる。一方で、中等度群と重度群で有意差がみられたのは、認知機能低下が進行し動作手順や道具使用に障害がみられるようになったこと、手続き記憶が低下したこと、また、身なりへの関心や清潔概念の低下が要因と考えられる。本研究では、認知機能低下の進行にしたがって ADL は低下し、重度になると顕著になることが分かった。「具体的な手掛かりの提示や環境の調整によって、手続き記憶が呼び起こされる」<sup>2)</sup>とされており、軽度の時期から ADL 介入することが重要であると考えられる。今後は重症度に応じて、生活の中でできる関わり方や訓練を研究し共有していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 山口晴保, 認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント, 協同医書出版社, 2010, 72-74
- 2) 松下太, 認知症の人へのリハビリテーションアプローチによる生活行為 QOL の改善～作業療法を中心に～, 森ノ宮医療大学紀要紀, 11, 2017, 25-32





|        |                              |       |                     |
|--------|------------------------------|-------|---------------------|
| 題名     | 私たちの看取りケア ～より良い湯灌にむけて Part2～ |       |                     |
| 法人名    | 社会福祉法人草加福祉会                  | 事業所名  | 特別養護老人ホーム マナーハウス麻溝台 |
| 発表者    | 松田笑奈                         | 共同研究者 | 堀田愛 竹本江里子 太田友樹      |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                     |       |                     |

## I はじめに

昨年度、A施設が取り組んでいる湯灌について研究を行った結果、技量差、知識不足、未経験でイメージできない等課題が明確となった。研究結果を踏まえ、対策することでより良いケアに繋がると考えた。

## II 目的

現在行われている湯灌を含めたエンゼルケアの方法と職員の意識を調査し課題を明確化する。手順書を作成し、職員の意識向上とより良いケアを目指す。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年1月20日から2023年6月30日まで

### 2. 研究対象

A施設の介護/看護/機能訓練/支援課職員（96名）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

現在の湯灌を含めたエンゼルケアの方法、意識をアンケート調査し、具体的で根拠に基づいた手順書を作成した。作成した手順書を職員が読了した後、再度アンケート調査し、職員の意識を比較調査した。

## IV 倫理的配慮

本研究の調査結果は当研究発表のみに使用すること、アンケートの提出をもって同意を得たこととする旨を書面にて説明し調査を実施した。

## V 結果

手順書作成前：項目数14 自由記載3・質問回収率39%  
 手順書作成後：項目数17 自由記載6・質問回収率41%  
 手順書作成前の調査では、知識獲得先の設問に対し「先輩からの伝承」が最も多く、「全く知識がない」職員もいた。エンゼルケアの意義・目的について「説明できない」と答えた職員が約4割、知識不足による不安感があるとの自由記載も多く「手順書が欲しい」という意見があった。手順書作成後の調査では「手順書を読んで意識が変わったか」の設問に「変わった」

が約7割に達し、「積極的に参加したいか」の設問では「全くそう思わない」「そう思わない」の回答が未経験職員において4割から1割に減少した。自由記載には「学び直しに良い機会だった」と前向きな意見がある一方、「手順書を読むだけではピンとこない」という意見や経験不足から不安を感じている職員が多数いる事が判明した。

## VI 考察

調査の結果、意義や目的、手順やその根拠等を理解しないまま不安を抱えつつ業務に当たっていた実態が明らかとなった。手順書を整備した事により、特に未経験者の理解に繋がり積極性が向上したと考える。しかしながら、湯灌未経験ないしは経験値の低い職員の不安感払拭には、手順書のみならず丁寧な教育・指導が今後の更なる課題と考える。飯田氏らは「家族参加のケアは家族の満足感が得られ、喪失を受け入れる第一歩となり家族自身への癒しにも繋がっている<sup>1)</sup>」と述べている。また、宮田氏らが「入浴という方法が安らぎの感情と結びつき、遺族や同僚と思いを語り合う事でお別れの時間になる<sup>2)</sup>」と述べている通り、遺族や職員のグリーフケアにもつながると考える。高齢者人口の増加や人生会議の普及等により、施設での看取りはますます重要になる。多くの学びを与えてくださった利用者へ感謝の気持ちを込め、今後も大切にしていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 飯田雅代：家族参加による「死後処置」に対する家族心理調査-シャワー浴を取り入れて-, 日本看護学会論文集, 成人看護, 37, 2006, 377-379
- 2) 宮田澄子, 介護施設における湯灌（死後の入浴ケア）の意義-ターミナルケア態度との関連と経験した職員への調査からの考察-, 厚生指標, 64, 1, 2017, 12-14



|        |                                  |       |                |
|--------|----------------------------------|-------|----------------|
| 題名     | 回復期リハビリテーション病棟における、感染流行期の退院支援の課題 |       |                |
| 法人名    | 医療法人財団百葉の会                       | 事業所名  | 湖山リハビリテーション病院  |
| 発表者    | 大野蘭                              | 共同研究者 | 矢野卓弥 齊藤雅人 戸塚菜摘 |
| サービス種別 | 病院                               |       |                |

## I はじめに

2020年新型コロナウイルス感染流行（以下、流行）により、A病院回復期リハビリテーション病棟（以下、回リハ病棟）では患者家族への対面での退院支援ができなくなった。オンライン中心の支援方法に変化したことで、退院後に不安や困難を抱えるケースが増えているのではという疑問を抱いた。

## II 目的

回リハ病棟における感染流行期の退院支援の課題を分析し、今後の退院支援に繋げる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年10月～2022年9月

### 2. 研究対象

2019年6月～2021年10月にA病院回リハ病棟を退院した患者 692名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

A病院で独自で作成した「退院後の生活状況アンケート」（無記名）の結果を、以下の手順で分析した。

- 1) アンケート内の自由記述の文章をリスト化
- 2) 意味の似通ったカテゴリーごとに分類
- 3) ポジティブな内容、ネガティブな内容に分類
- 4) 感染流行前後のデータを比較

## IV 倫理的配慮

質問紙における調査結果は、書面で説明した上で、回答をもって調査への同意を得たとみなした。

## V 結果

### 1. 対象者の属性

流行前のアンケート発送数は225、回答数114、流行後は発送数467、回答数294であった。感染流行前後で性別、年齢、要介護度比率に大きな差異はなかった。

### 2. 選択式質問の回答

入院中の情報提供が役に立ったか、退院後当院に相談

したいことはあったか、それは当院に相談したかという3つの質問に対し、結果に大きな差異はなかった。

### 3. 自由記述の分析結果

自由記述の内容は12のカテゴリーに分類された。【入浴】【更衣】【家事】では流行前後共に不安や困難を訴えるような内容はなかった。【疾患、体調】【身体機能】では流行前後で内容に大きな差異はなかった。【運動、自主トレーニング】【食事、水分摂取】【排泄】【認知、コミュニケーション】【在宅サービス】では、流行後に「排泄の対処法がわからない」「認知症の対応がわからない」など介助方法に不安を訴える内容が目立った。【生活】では、流行前は「家屋調査で危険な所を教えてもらった」など回答内容が具体的であったのに対し、流行後は「入院中に得た情報を活用している」など具体性の低い内容に留まった。【要望】では、流行後は「面会禁止で入院中の様子がわからず不安だった」など面会制限に関する内容がみられた。

## VI 考察

患者自身の身体状況や生活動作に関する項目は、感染流行に影響を受けることは少ないが、家族の支援が必要な項目は、感染流行に影響を受けることが示唆された。対面での指導ができず、職員と患者家族間で患者の状態認識のずれや情報共有の不足が生じた結果、退院後に不安や困難を抱えるケースが出てきたと考えられる。A病院では現在、家屋調査など対面での退院支援が一部再開となっているが、今後の感染症流行にも備える必要がある。オンラインであっても、対面での退院支援の機能を補完できるような支援方法を模索していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 内田哲文, 新たな外出練習の取り組み—感染リスクの軽減に向けたリモート外出練習の実施—, リハビリナース, 14, 6, 2021. 11, 83-88



|               |                                    |              |                     |
|---------------|------------------------------------|--------------|---------------------|
| <b>題名</b>     | ポジショニングで拘縮を改善する ～利用者のつらい姿勢を何とかしたい～ |              |                     |
| <b>法人名</b>    | 社会福祉法人大和会                          | <b>事業所名</b>  | 特別養護老人ホーム和光園        |
| <b>発表者</b>    | 市川宏一 戸澤直行                          | <b>共同研究者</b> | 木本勉 海老沢雅之 山本誠二 林野美智 |
| <b>サービス種別</b> | 介護老人福祉施設                           |              |                     |

## I はじめに

A施設では、臥床時に姿勢が崩れ全身の筋肉が緊張し、拘縮が強くなっている利用者が多数いる。現状のポジショニングは除圧を意識したもので、拘縮予防になっておらず、対策方法も分からなかった。今回、拘縮に対する知識・ケア技術を身につけることで、姿勢が安定し筋の緊張が緩和した。拘縮も改善し生活の質が向上した取り組みを報告する。

## II 目的

姿勢が安定するポジショニングで利用者の拘縮を改善し生活の質が向上する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年10月1日～2023年6月10日

### 2. 研究対象

姿勢が不安定で中等度の拘縮がある利用者5名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 拘縮とポジショニングの勉強会実施。
- 2) 研究対象者ごとのポジショニング方法を動画と写真を用い職員全員への技術指導の実施。
- 3) 体位交換表を作成し、ポジショニングの実施。
- 4) 職員の技術チェック。
- 5) 写真による姿勢の評価。
- 6) 職員からのアンケート調査（開始前・終了時）。
- 7) 日本整形外科学会 関節可動域測定法にて関節可動域を3回測定・比較（機能訓練指導員・介護職員）
- 8) ポジショニング実施後の筋緊張を見るため、表情・姿勢の変化を写真により比較。

## IV 倫理的配慮

本研究の対象者とその家族に同意を得ている。

## V 結果

1. 4名に関節可動域の改善が見られた。

2. 写真で比較して以下の結果を得た。

表情が穏やかになった5名/5名中

肩、胸が開いている4名/5名中

上肢・指が楽な姿勢で保持できている4名/5名中

両膝がしっかり揃い力が抜けている3名/5名中

3. 安定した姿勢の取れるポジショニングを職員が理解し、拘縮予防に対する意識が向上した。

## VI 考察

対象者ごとにポジショニング方法を検討し、動画・写真を作成して可視化を行った。さらに緊張を高めない・クッションで体を支える・安定した姿勢を作ることをポイントとして研修・技術指導を実施した。これらを職員全員が理解し技術を習得したことで統一したケアを行えるようになった。それにより安定した姿勢を取れるようになり、筋がリラックスし拘縮が改善したと考えられる。さらに実践していく中で職員の技術や目線が変わり、日々の利用者の状態に合わせたポジショニングを行えるようになったことも改善につながった要因と考えた。また利用者の緊張が日ごとに和らいでいくことを実感できたことで、職員の拘縮予防に対する意識が向上したと思われる。

今取り組みでは基本的な生活動作が改善し、生活の質も向上した。生活の質が上がったことにより、介助者の負担軽減という点にもつながった。先行文献にもあるように「介護者の関わり方・ケアの仕方が利用者の身体及び生活の質に大きく影響する」<sup>1)</sup>ということを今回の取り組みで改めて認識することができた。今後も新たな視点で継続して支援をしていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 木林身江子 秋山みゆき, ポジショニングによる動きの支援の効果—特別養護老人ホームにおける事例研究—, 静岡県立大学短期大学部研究紀綱, 23, 2009
- 2) 田中義行, 写真でわかる拘縮ケア, ナツメ社, 2016



|        |                     |       |             |
|--------|---------------------|-------|-------------|
| 題名     | 抗菌性洗口剤をもちいた口腔内の細菌減少 |       |             |
| 法人名    | 医療法人社団日翔会           | 事業所名  | グループホーム華つばき |
| 発表者    | 田中幸太                | 共同研究者 | 山本宏幸 後藤祐晃   |
| サービス種別 | 認知症対応型共同生活介護        |       |             |

## I はじめに

利用者の健康維持の為、口腔体操・口腔ケアによる清潔保持に努めているが、認知・身体機能の低下もあり、現状の方法で十分であるか疑問を持った。歯科医に相談したところ、抗菌性洗口剤を使用したうがいが良いとアドバイスを受け、抗菌性洗口剤を用いたうがいによって口腔内細菌が減少した事を報告する。

## II 目的

抗菌性洗口剤を使用することで、口腔内細菌を減らす効果がある事を立証する。

## III 方法

1. 研究期間：2023年4月1日～2023年5月31日

2. 研究対象

- 1) うがいの指示が理解でき、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲbまでの方。
  - 2) 検査に使用する唾液の摂取が出来ること。
  - 3) 基礎疾患の状態が安定していること。
- 以上3点を条件とし15人を対象者とした。

3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 対象者の唾液を採取しRDテスト(ミュータンス菌、乳酸桿菌等の細菌数を簡易的に測定する色別シート 以下RDテストと記載する)にて細菌数の検査を行う。
- 2) 検査により判明した検査シートの色により、Low、Middle、Highにそれぞれグループ分けを行う。
- 3) 1日3回の口腔ケアの内、朝・夕2回抗菌性洗口剤20mlを用いたうがいを行う。
- 4) 対象者の口腔内細菌の変化を見る為に検査結果を1ヵ月毎に評価する。

## IV 倫理的配慮

研究目的、方法、倫理的配慮について、本人、家族へ書面と口頭で説明し同意を得た。

## V 結果

抗菌性洗口剤を用いたうがいにより、RDテストの検査結果から改善が見られた。(表1)

継続期間が長い程Lowの人数が増加し、Middle、Highの人数が減少していることが確認できた。

表1 RDテストによる人数の推移(人)

|        | 3/30 開始前 | 4/28 | 5/31 |
|--------|----------|------|------|
| Low    | 3        | 9    | 12   |
| Middle | 9        | 5    | 2    |
| High   | 3        | 1    | 1    |

## VI 考察

抗菌性洗口剤を用いたうがいにより、約8割の利用者に細菌減少の効果があつたことを確認できた。目的が達成できた要因として歯磨き後にうがいをするという簡単な方法であつたこと、使用した抗菌性洗口剤が低刺激で、抵抗がなかつたことが挙げられる。Highの1人については磨き残し部分を介助しようとする拒否がある為、細菌が残ったままであつたと推測できる。「口腔常在菌はさまざまな感染症の原因になると危惧されている。それゆえ誤嚥性肺炎だけでなく、口腔ケアは他の感染症に対しても重要な予防策になることが予想される。」<sup>2)</sup>と述べられていることもあり、今後も抗菌性洗口剤を使用し、重介護の方でも誤嚥性肺炎と感染症の予防に繋がれると考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 田中宏司, 各種洗口液のプラーク付着制御効果に関する研究, 走査型電子顕微鏡による観察, 日歯周誌, 30, 2, 1988, 383-398
- 2) 米山武義, 鴨田博司, 口腔ケアと誤嚥性肺炎予防, 老年歯学, 16, 1, 2001, 3-13





|        |  |       |                |
|--------|--|-------|----------------|
| 題名     | 新型コロナウイルスクラスター発生時、ゾーニングの工夫でADLの低下は防げたか |       |                |
| 法人名    | 医療法人財団百葉の会                             | 事業所名  | 介護老人保健施設 星のしずく |
| 発表者    | 縣寛樹 大塩みゆき                              | 共同研究者 | 築地夏生           |
| サービス種別 | 介護老人保健施設                               |       |                |

## I はじめに

2022年度、A施設では新型コロナ感染症によるクラスターが2回発生した。隔離対応により日常生活動作(Activity of Daily Living:以下ADLとする)低下のリスクが考えられたため、ADLの低下が最小限になるよう生活空間を分けるゾーニングを実施した。

## II 目的

生活空間を分けたゾーニングはADL低下を予防できたか明らかにする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年4月1日～2023年3月31日

### 2. 研究対象

クラスター発生時、陽性となった利用者41名

A群:ゾーニングの工夫で居室外でも生活できた25名

B群:居室隔離となった16名

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) A群、B群の生活範囲についてまとめる
- 2) ゾーニングの方法についてまとめる
- 3) ADL変化をクラスター前後で集計し比較する

科学的介護推進に関する評価のADL、8項目を使用

1:食事 2:椅子とベッド間の移乗 3:整容 4:トイレ動作 5:入浴 6:平地歩行 7:階段昇降 8:更衣

## IV 倫理的配慮

調査した個人情報個人が特定されないよう配慮

## V 結果

### 1. A群、B群の生活範囲について

表1 群別、主な日常生活

|   | 行動  | 食事          | 排泄   | 入浴 |
|---|-----|-------------|------|----|
| A | フリー | 離床          | トイレ  | 清拭 |
| B | 居室内 | ベッド上 or 車椅子 | ベッド上 | 清拭 |

### 2. ゾーニングの方法について

- 1) 陽性者と非陽性者を分け居室移動の実施、症状が

強く出た利用者は簡易陰圧装置を設置し居室隔離。

- 2) ビニールカーテンを使用し生活空間を分けた

(1) ゾーニング内トイレを1つ以上確保した

(2) テーブル等設置できるスペースを確保した

### 3. ADLの変化について

表2 ADL項目別変化割合 単位:%

| ADL項目 |   | 1    | 2    | 3    | 4    | 5    | 6    | 7    | 8    |
|-------|---|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 低下    | A | 8.0  | 12.0 | 12.0 | 16.0 | 12.0 | 16.0 | 8.0  | 16.0 |
|       | B | 37.5 | 37.5 | 37.5 | 31.3 | 25.0 | 31.3 | 12.5 | 25.0 |
| 維持    | A | 92.0 | 80.0 | 84.0 | 80.0 | 84.0 | 84.0 | 84.0 | 84.0 |
|       | B | 62.5 | 62.5 | 50.0 | 68.8 | 68.0 | 68.8 | 87.5 | 75.0 |

中央値 低下 A群12%、B群31.3%

維持 A群84%、B群68.4%

## VI 考察

健康長寿ネットADL低下のケア予防では「身体機能、認知機能の低下予防には、～中略～日常生活の遂行そのものが予防となります。」「活動性を維持する介入がADLの低下予防へとつながるのです」<sup>1)</sup>とある。A群B群のADL変化結果より、A群はゾーニングの工夫をし、自由に動ける場所を確保され、日常生活の遂行が維持できたことでADL低下の予防につながったと考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 公益財団法人長寿科学振興財団, ADL低下(日常生活動作), 健康長寿ネット, 2016年7月25日, 参照2023年5月25日, <https://www.tyojyu.or.jp/net/byouki/rounensei/adl.html>

|        |                              |       |                    |
|--------|------------------------------|-------|--------------------|
| 題名     | エコマップを用いた地域交流の実情把握と今後の支援の在り方 |       |                    |
| 法人名    | 株式会社テイクオフ                    | 事業所名  | 小規模多機能型居宅介護事業所全事業所 |
| 発表者    | 小関麻理                         | 共同研究者 | 豊島由紀 須藤織乃 吉田玲子     |
| サービス種別 | 小規模多機能型居宅介護                  |       |                    |

## I はじめに

高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるために地域包括ケアシステムが推進されてきた。小規模多機能型居宅介護事業所は、利用者と地域との懸け橋になるという役割がある。コロナ禍となった現在、小規模多機能型居宅介護事業所を利用している方は、地域とどのような関わりがあるのかと疑問を持った。社会福祉の実践用に考案された、利用者を中心に関わる人物を線で繋ぎ、線の太さで関係性を示せるエコマップを活用し、その方の交流実態を把握する。

## II 目的

利用者が地域とどのように繋がっているかを知り、今後の地域交流支援の在り方を考える。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年3月20日～2023年5月31日

### 2. 研究対象

小規模多機能型居宅介護事業所全利用者 524名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 26事業所の計画作成担当者に趣旨説明・依頼
- 2) 事業所管理者にエコマップの研修会を実施し、各事業所で内部研修後エコマップ作成
- 3) 集まったエコマップを介護度別、項目別で分析
- 4) 全職員にエコマップ作成してみたのアンケートの依頼・実施
- 5) 6月のケアマネ会議にて結果の報告

## IV 倫理的配慮

今回の研究において各事業所の利用者に不利益がない事を説明し同意を得ている

## V 結果

小規模多機能型居宅介護事業所利用者 524名のうち地域と繋がりのある方は 232名で 44.2%だった。介護度別と項目別での結果は図1、図2の通りである。介

護度が軽い要介護1、2は交流があるも、線が途切れてしまった方も多かった。介護度が高い方は交流の数は少ないが、深い関係性が見えた。地域資源別では近所との関係性は数も多く線も濃かった。

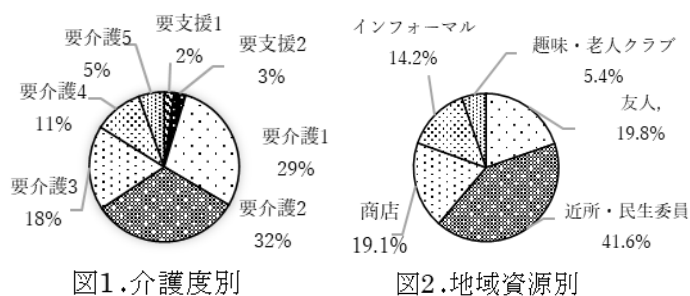


図1.介護度別

図2.地域資源別

## VI 考察

「人と人」「人と社会」との繋がりで地域包括ケアシステムは構築されると言われている。高齢者の心の健康、心の豊かさを守る為には地域交流支援は必要である。外出の自粛により人との関わりが薄くなったのは事実である。しかし、今回の結果で、地域との関わりは途切れず残っていたことが分かった。介護度が高い方にとって地域との交流がある事は在宅生活を継続する希望にも繋がっていく。認知症カフェ等を通して、その地域の特性を理解し、高齢者が地域で暮らし続けるための架け橋となり支援していく事が私達の役割である。職員アンケートからも利用者をより知る事が出来、意識の向上に繋がったとの回答があった。今後も情報共有のツールとしてエコマップを活用し、在宅生活が継続できる様支援していく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 小林奈美, 家族アセスメントジェノグラム・エコマップの書き方と使い方, 医歯薬出版株式会社, 2009,1
- 2) 寺本紀子他, アセスメント力向上 book, メディカ出版, 2019,2



A series of 20 horizontal dashed lines spanning the width of the page, providing a template for handwriting practice.

# 研究発表会

《ROOM 2》

抄録

9月11日(月)



## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 2 】

| 発表時間                 | 法人          | 題名   | 発表者         | ページ |
|----------------------|-------------|--|-------------|-----|
| 1<br>10:00<br>10:15  | 社会福祉法人カメラア会 | バケツ洗濯機を通した生活・心理的支援                           | 鈴木亜里沙       | 33  |
| 2<br>10:15<br>10:30  | 株式会社ライフアシスト | 時計を読めるようになろう!                                | 白木恵子        | 34  |
| 3<br>10:30<br>10:45  | 医療法人社団平成会   | 私たちの仕事とは<br>～カンフォータブル・ケアを通して見つめ直す～           | 杉原翔         | 35  |
| 4<br>10:45<br>11:00  | 社会福祉法人カメラア会 | 新人研修に自己探索ツールを使用した取り組み                        | 久木元香須美      | 36  |
| 11:00<br>11:10       | 講評 (10分)    |  |             |     |
| 11:10<br>11:20       | 休憩 (10分)    |  |             |     |
| 5<br>11:20<br>11:35  | 社会福祉法人湖成会   | 安心できる居場所づくり ～みんながいるから寂しくない～                  | 大石ふづき 鈴木萌   | 37  |
| 6<br>11:35<br>11:50  | 株式会社健康倶楽部   | 「俺は帰る!!」～帰宅願望のある方に対する支援～                     | 生瀬友晴 和田遥佳   | 38  |
| 7<br>11:50<br>12:05  | 社会福祉法人白山福祉会 | 動画を用いた記録共有の意義<br>～30歳代の高次脳機能障害利用者支援を通して～     | 横田未咲        | 39  |
| 8<br>12:05<br>12:20  | 社会福祉法人苗場福祉会 | 認知症の見当識障害へのアプローチ<br>～時間がわかるとできることが増える～       | 内川建         | 40  |
| 12:20<br>12:30       | 講評 (10分)    |  |             |     |
| 12:30<br>13:30       | 休憩(1時間)     |  |             |     |
| 9<br>13:30<br>13:45  | 社会福祉法人苗場福祉会 | あなたにもらった15日間<br>～ACPを活かした看取りケアの軌跡～           | 風巻美德        | 41  |
| 10<br>13:45<br>14:00 | 医療法人社団日翔会   | 施設を超えた多職種協働<br>～ICTを活用して褥瘡改善に取り組んだ事例～        | 上田直美        | 42  |
| 11<br>14:00<br>14:15 | 社会福祉法人湖成会   | 熱海伊豆海の郷を選んでよかった<br>～稼働向上は利用者の満足から～           | 金子美花        | 43  |
| 12<br>14:15<br>14:30 | 社会福祉法人苗場福祉会 | 入浴支援ロボットの導入                                  | 志村光祐        | 44  |
| 14:30<br>14:40       | 講評 (10分)    |  |             |     |
| 14:40<br>14:50       | 休憩 (10分)    |  |             |     |
| 13<br>14:50<br>15:05 | 社会福祉法人苗場福祉会 | トイレで失敗したくない～排泄支援の見直し～                        | 井口祐喜子 渡邊千恵子 | 45  |
| 14<br>15:05<br>15:20 | 株式会社ライフアシスト | トイレでの排泄ができる取り組み                              | 下込智也        | 46  |
| 15<br>15:20<br>15:35 | 社会福祉法人苗場福祉会 | ラクチュロース介入による腸閉塞の既往がある方の苦痛軽減<br>に向けての排便コントロール | 初山紅林        | 47  |
| 15:35<br>15:45       | 講評 (10分)    |  |             |     |
| 15:45<br>15:55       | 休憩 (10分)    |  |             |     |
| 16<br>15:55<br>16:10 | 社会福祉法人草加福祉会 | ショートステイ利用時の忘れ物を減らしたい<br>～忘れ物0を目指して～          | 高梨大輔        | 48  |
| 17<br>16:10<br>16:25 | 医療法人社団平成会   | 申し送りノートの見直し～「知らなかった」からの気づき～                  | 南あかり        | 49  |
| 18<br>16:25<br>16:40 | 社会福祉法人カメラア会 | 選ばれるショートステイを目指して<br>-稼働率の向上に向けた取り組み-         | 中道龍太        | 50  |
| 16:40<br>16:50       | 講評 (10分)    |  |             |     |

|               |                    |              |         |
|---------------|--------------------|--------------|---------|
| <b>題名</b>     | バケツ洗濯機を通した生活・心理的支援 |              |         |
| <b>法人名</b>    | 社会福祉法人カメラア会        | <b>事業所名</b>  | ヒルズすえなが |
| <b>発表者</b>    | 鈴木亜里沙              | <b>共同研究者</b> | 中鉢勝広    |
| <b>サービス種別</b> | 母子生活支援施設           |              |         |

## I はじめに

今回の研究は、対象児童において心理面接場面でバケツ洗濯機を導入し、衛生観念を身に着けて行けるよう支援した報告である。

不衛生状態の家庭では、親が子供と向き合う余裕がない場合があり、基本的な知識や常識を身に着けないまま大人になってしまう子どもも出てきてしまう可能性があり、支援をさせていただくことで少しでもその後の成長の一助になればという思いから、取り組みを進めた。

## II 目的

バケツ洗濯機の活用からスモールステップを重ね、「きれいにする」ことについて対象児童が理解すること。到達目標は自分で家庭用洗濯機を活用して洗濯ができること。衛生観念を高めること。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年9月3日～2022年12月10日

### 2. 研究対象

A君 小学校中学年（当該利用者）

1週間同じ洋服を着て学校から指摘される

### 3. 具体的方法

- 1) 心理面談の中で片付いている状況を理解する
- 2) バケツ洗濯機を実際に動かす
- 3) 家庭用洗濯機を自身で動かし家庭での洗濯を実践

## IV 倫理的配慮

対象となる利用者に、今回の担当からの支援について研究発表を行いたいという意向、及び趣旨等を説明し、その上で本人様に写真の使用、及び対応のプロセスの発表の許諾を得た。

## V 結果

取り組み前：

「衛生観念の明らかな不足、家庭用洗濯機を使えない状態」

取り組み後：「衛生観念の向上、家庭用洗濯機を使える状態」

となることができた。

衛生への概念を少しずつ持てるようになり、片付けを具体的にどのようにすればいいかの理解が進んだ。

また、自身が使っていたものを自身の手で洗濯することで、積極的に洗濯の行動が増えた。

洗うことのみではなく、洗剤はどれくらい入れるのかということや、どのように干したら皺になりづらいのか等理解に広がりが見られた。

## VI 考察

バケツ洗濯機から洗濯機に移行したことで、自身の着ていた衣服の汚れがどれくらいあるのかを目視できたことが非常に大切だったのではないかと感じる。

その結果、「こんなに汚かった」「あれを洗ってみたい」と本人なりの発見や意欲的に清潔にすることを学んだのではないかと思う。また、“キレイにすることは良いことである”という社会通念の理解が進んだのではないかと考察する。

大人がやっている“何だか難しそうなこと”を実際に体験することが出来き、自信がついたことや、日常的な支援に繋げていく機会になったと感じている。

本研究は一事例研究であったため、他のケースにて応用していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 山口由紀子, 子どもが一生困らない片付け・そうじのコツ, 青春出版社, 2020



|        |               |       |              |
|--------|---------------|-------|--------------|
| 題名     | 時計を読めるようになろう！ |       |              |
| 法人名    | 株式会社ライフアシスト   | 事業所名  | ライフ大門        |
| 発表者    | 白木恵子          | 共同研究者 | 門田麗子 林咲良 山浦綾 |
| サービス種別 | 放課後等デイサービス    |       |              |

## I はじめに

保護者様より、「以前、学校の宿題で「時計の読み方」に取り組んでいたがまだ定着していない。出かける予定時刻の1時間前から玄関で待っている姿がある。時計が読めるようになったら時間になるまで部屋で自分のしたいことができるのに…」とお話があった。日頃、Aさんは就労に向けた作業に集中して取り組むことができているので、「時計読み」の練習にも集中し、コツコツ継続した取り組みができるのではないだろうかと考えた。

## II 目的

時計を見て行動できるようになるために、アナログ時計が読めるようになる。

## III 方法

1. 研究期間：2022年2月2日～2022年10月31日

日

2. 研究対象：Aさん、男児、中学生、週4回利用、視力1.0以上。文字・数字の読み書きは出来る。

3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 「時計読み」について、Aさんの現状を把握する。
- 2) 来所時に、「時計読み」の練習時間を設ける。
- 3) 3ヶ月ごとに習熟度を評価し、検証を行う。必要な支援教材を作成し直す。正答率80%以上で「時計読み」が定着していると評価する。

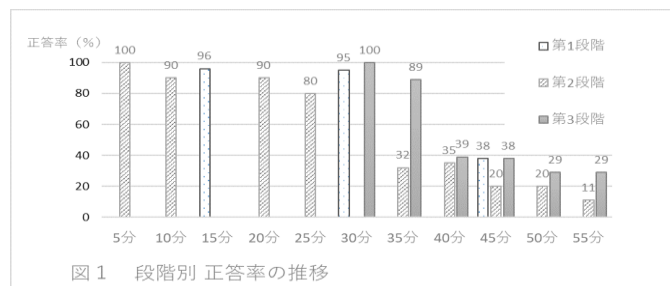
## IV 倫理的配慮

本児は未成年の為、目的を本児・保護者へ説明し写真掲載及び研究参加についても書面にて同意を得た。また、いつでも取りやめることができ、何ら不利益を被ることがない旨を説明した。

## V 結果

研究スタート時、1時、2時などの長針が12を指す時間を正確に読むことができていた。第一段階では、長針が「15分読み読み」の練習を行った。結果45分読

みだけが38%と低かったが、15分と30分読みの正答率は80%以上だった。第二段階では、長針が「5分読み読み」の練習を行った。結果「5分～30分読み」は正答率が80%を越えたが、「35分～55分読み」については40%に満たなかった。第三段階では、正答率の低かった「35分～55分読み」を重点的に行った。結果3ヶ月間の練習で、30分読みは95%から100%へ、35分読みは32%から89%へと正答率が上がった。「40分～55分読み」については、第二段階、第三段階通して練習を行ってきたが、正答率は40%に満たず、読み方の定着を図ることが難しかった。



## VI 考察

長針を正確に読む力は練習を通して定着することができた。今回3ヶ月で区切り、支援方法についてPDCAサイクルを行ったことで「Aさんが理解しやすい読み方への配慮」や「やる気になるような言葉がけの工夫」について指導員間で気づきを共有することができた。また、課題を捉えて次への支援方法を導き出すことができた。今後も、家庭や学校と連携を図り、Aさんが生活の中で時計をみながら行動できるようになる日に向けて、練習に取り組んでいきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 細木玉恵, 石岡由紀, 発達遅れのある子どもへの時計の読み指導に関する教材研究, 神戸親和女子大学教育研究センター紀要, 4, 2008, 55-60
- 2) 佐々木正美, TEEACCHプログラムによる日本の自閉症療育, 学研, 2008



|        |                                 |       |           |
|--------|---------------------------------|-------|-----------|
| 題名     | 私たちの仕事とは ～カンフォータブル・ケアを通して見つめ直す～ |       |           |
| 法人名    | 医療法人社団平成会                       | 事業所名  | 健康倶楽部家鶴成館 |
| 発表者    | 杉原翔                             | 共同研究者 | 中島ゆう紀     |
| サービス種別 | 小規模多機能型居宅介護                     |       |           |

## I はじめに

認知症状の対応に苦慮し、それに伴い接遇の質、モラルの低下が職員間で伝播しているように見受けられた為、周辺症状への対応力向上と接遇の質、モラルの向上が必要であると考えた。

## II 目的

利用者のその方らしい生活を支え、生き生きとした生活が送れるように支援し、利用者やそのご家族に笑顔と安心を提供できるように、認知症状への対応力を向上し、また接遇の質やモラルを高める。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年5月1日～2023年6月30日

### 2. 研究対象

当事業所看護介護職員 10名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 職員に対して認知症介護肯定感尺度 21 項目を用いて認知症介護に前向きに取り組んでいるか、認知症介護への意識の程度や負担感を評価する。

2) 快刺激を提供することで認知症者の周辺症状を軽減でき、職員のケアの質の向上やモチベーションの向上などが期待できるカンフォータブル・ケア<sup>1)</sup> 10 項目を、私が資料を用いて各職員に指導し、またミーティング時に唱和を行うことで意識付けをする。

3) カンフォータブル・ケアを実践後に再度職員に対して認知症介護肯定感尺度 21 項目を用いて評価する。

## IV 倫理的配慮

個人を特定するようなものは無いが、職員に対して口頭で説明し、同意を得た。

## V 結果

大幅な点数の増加や職員の意識改革には至らなかったが、モラル向上に必要である他者理解と他者の尊重、認知症状への対応力や接遇の質が評価できる 1～16

項目の点数が 5 月に比べて 6 月の方がわずかではあるが上昇した職員が 10 名中 7 名となった。

表 1.認知症介護肯定感尺度 21 項目版(満 84 点)<sup>2)</sup>

|     | 5月    | 6月    |
|-----|-------|-------|
| 職員A | 60点   | 50点   |
| 職員B | 74点   | 78点   |
| 職員C | 60点   | 57点   |
| 職員D | 56点   | 62点   |
| 職員E | 35点   | 39点   |
| 職員F | 49点   | 74点   |
| 職員G | 59点   | 59点   |
| 職員H | 49点   | 54点   |
| 職員I | 48点   | 59点   |
| 職員J | 68点   | 71点   |
|     | 計558点 | 計603点 |

## VI 考察

2 カ月という短い研究期間ではあったが、合計点が 5 月に比べて 6 月が +45 点であったことから、全体的な点数から見ると職員の接遇やモラルなどへの意識は上がったと思われる。カンフォータブル・ケア 10 項目を当たり前な事だと感じる人もいるかもしれないが、ただこの当たり前を実践し続ける事は案外難しい事であり、また慣れや経験年数を重ねる事で接遇の質やモラルが知らぬ間に低下してしまっている職員が存在するのも事実である。今後は職員全体でカンフォータブル・ケアを実践できるように勉強会の開催や現場での実践を継続し、また同時に認知症者が生き生きとした生活を取り戻していく効果が期待できるアクティビティ・ケアも取り入れ、質の高いケアが継続して提供できるように努めていく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 南敦司, カンフォータブル・ケアで変わる認知症看護, 精神看護出版, 2018年9月29日
- 2) 認知症介護肯定感尺度21項目版, 認知症介護情報ネットワーク, 認知症介護研究・研修センター, 参照 2023年4月30日,  
[https://www.dcnnet.gr.jp/support/bpsd/material/4\\_scale21.php](https://www.dcnnet.gr.jp/support/bpsd/material/4_scale21.php)



|        |                       |       |         |
|--------|-----------------------|-------|---------|
| 題名     | 新人研修に自己探索ツールを使用した取り組み |       |         |
| 法人名    | 社会福祉法人カメラア会           | 事業所名  | ヒルズすえなが |
| 発表者    | 久木元香須美                | 共同研究者 | 中鉢勝広    |
| サービス種別 | 母子生活支援施設              |       |         |

## I はじめに

自分らしさを一言で表せるようになると感情の動く理由が分かるので腑に落ちる。過去を肯定し、未来に向けて進んでいくための指標となる。

こういった体験が仕事のやりがいにつながることを自身が体感したため、新入職員の定着率向上につながると考えたことが研究のきっかけとなった。

2020年度からJCDA(特定非営利活動法人 日本キャリア開発協会)発案「人生すごろく金の糸」という自分らしさをすごろくで発見するワークショップを3回体験した。「金の糸」とは人生における無数の経験と経験とをつなぐ糸のようなものである。

## II 目的

「人生すごろく金の糸」ワークショップを行い、人生を振り返り(経験)自分らしさ(金の糸)に気がつくこと。その結果、仕事をする上で困難を回避しやりがいを見つけることで定着率向上につなげること。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年4月13日～2023年7月29日

### 2. 研究対象

2023年度の新人職員 30名

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

1) 2022年度人事部の職員数名「人生すごろく金の糸」を体験(JCDAよりワークショップは参加人数により、その場の進行役と会員以外は体験が必要とされた)。2022年4月14日と2023年4月13日にカメラア会の新人職員研修で「人生すごろく金の糸」を実施。人事部の協力を得て離職者の人数や理由を調査した。

2) 2023年度7月13日時点での定着率の状況

3) アンケート(2023年4月13日)

## IV 倫理的配慮

新入職員研修の1つであり個人情報は一切出さない

形でアンケート集計を行った。

## V 結果

### 1. 新卒定着率の推移

カメラア会新卒職員の各年7月13日時点での離職は

2023年：30人中0人

2022年：30人中3人

2021年：45人中1人(金の糸研修未実施)

となっている。

新卒の離職が2023年7月時点で発生しておらず直近では定着率向上に繋がっている。

### 2. 2023年度研修結果

表1「気づき」の詳細

| 気づき           | 内容          | 人数 | %    |
|---------------|-------------|----|------|
| 自分らしさ         | 分析・友情・表現等   | 16 | 53.3 |
| 個性            | 行動力・楽しい・中立等 | 14 | 46.7 |
| どちらとも<br>いえない |             | 0  | 0    |
| あまりない         |             | 0  | 0    |
| ない            |             | 0  | 0    |
| 合計            | 30          | 30 | 100  |

## VI 考察

2021年度・2022年度カメラア会の離職者の離職理由は人間関係とやりたいことができない(残り1名は原因不明)である。自分らしさ(金の糸)を認識すると大切にしているもの・やりたいことが明確になるため職場で働く意味を見出せ、挑戦する気持ちも沸いてくる。その結果、人間関係不満の回避や、やりたい仕事に近づける努力が可能になると思われる。7月以降も人事部の協力を得て調査は継続する。

### 【引用・参考文献】

- 1) 日本キャリア開発協会, 人生すごろく「金の糸を活かそう」(1)「そもそもこれ、何ですか?」, JCDA ジャーナル, 81, 2021, 14-15





|        |                             |       |            |
|--------|-----------------------------|-------|------------|
| 題名     | 安心できる居場所づくり ～みんながいるから寂しくない～ |       |            |
| 法人名    | 社会福祉法人湖成会                   | 事業所名  | 多機能ホームあった家 |
| 発表者    | 大石ふづき 鈴木萌                   | 共同研究者 | 加藤雄太 渡邊満江  |
| サービス種別 | 認知症対応型共同生活介護                |       |            |

## I はじめに

2023年2月より当事業所に入居されているA氏、入居前、ご家族が事業所見学に来られた際に「母に穏やかに安心して過ごしてもらいたい」「今は別の施設に入居しているが毎日自室に閉じこもってしまっている」「家族として毎日がつらい」とのお話を頂く。そこで私たちは、A氏にA氏らしく安心して毎日を過ごし、A氏に「ここにきてよかった」そう感じて頂ける為に、チームで取り組んだ事例を発表する。

## II 目的

A氏が毎日に役割を持ち、他の利用者と楽しみながら安心して過ごす事ができる環境を職員やご家族、他の利用者とチームとなり作り出していく。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年2月12日～2023年7月31日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 女性 介護度1

既往歴：アルツハイマー型認知症 高血圧 高脂血症 逆流性食道炎 うつ症状

生活歴：B市に生まれ7人兄弟の末子

20歳で就職の為にC市に転居され、洋服の販売員として勤務される。結婚後、2人の子どもの恵まれる。ガーデニングが趣味で華道師範の資格を取得される。

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) ケアの方向性についての検討
- 2) 毎日継続してA氏と散歩に出かける為の業務の見直し
- 3) 併設の小規模多機能型居宅介護と協働した楽しみが持てる環境作り
- 4) A氏の趣味を反映させた企画と日々の役割作り
- 5) 他の利用者との関係性構築の為の意図的な職員介入

6) ご家族との情報共有とご家族からのアプローチ

## IV 倫理的配慮

A氏、ご家族へ研究発表の趣旨、個人情報保護等について口頭にて説明し了承を頂く。

## V 結果

入居前カンファレンスを行い、A氏へのケアの方向性について話ある事によって、グループホームだけではなく併設の小規模多機能型居宅介護も協働し事業所としてA氏のケアを考える事ができた。入所当初に聞かれた身体の痒みの訴えや、居室にて過ごされる時間も、職員との馴染みの関係を築く事や他の利用者との関わりの中で減少傾向がみられた。

A氏の気持ちの変化を分析すると、職員が意図的に関わる事が出来ていない、他の利用者との時間を共有できていない時間帯であり、A氏より苛立ちの表情や痒みの訴えが聞かれた際には、A氏の「寂しさ」が背景にあり、職員やご家族、他の利用者との関わりの中でA氏が居場所と感じられる環境が「安心感」に繋がった。

## VI 考察

A氏と関わる中で、A氏の苛立ちや居室にこもる要因になっているのが「寂しさ」だったのではないかと。

A氏にとって当事業所が「安心できる場所になってほしい」「ここにきて良かったと感じてほしい」その想いを実現する為に、ご家族や他の利用者やチームとなり取り組む事でA氏が安心して過ごす事ができる時間が増加したと考察される。

A氏が抱く「寂しさ」を軽減できるのはA氏を一人にさせない、誰かが傍にいるという安心感である。利用者に「ここにきて良かった」と感じて頂けるケアをこれからもチームで実践していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 高口光子, 認知症の人の心に届く、声のかけ方・接し方, 中央法規出版株式会社, 2023



|        |                          |       |             |
|--------|--------------------------|-------|-------------|
| 題名     | 「俺は帰る!!」～帰宅願望のある方に対する支援～ |       |             |
| 法人名    | 株式会社健康倶楽部                | 事業所名  | デイサービスセンター壽 |
| 発表者    | 生瀬友晴 和田遙佳                | 共同研究者 | 吉田由香        |
| サービス種別 | 地域密着型通所介護                |       |             |

## I はじめに

「腰が痛いから帰る」とデイサービス来所後すぐに帰宅を訴え始めるA氏。職員の声掛けや説明に納得できず、職員を振り切り玄関へ向かうことも多く、離施設の危険性があった。また、帰宅の訴えがエスカレートし声掛けや説明が耳に入らず職員に対し手をあげそうになることもあった。職員一同、A氏に対する声掛けやかかわり方に頭を悩ませていた。

帰宅願望がある方に対する支援についてチームで考え、取り組んだ事例を報告する。

## II 目的

A氏の帰宅願望の背景にある思いに耳を傾け、安心して楽しくデイサービスを利用していただけるよう課題解決に取り組む。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年6月1日～2023年1月31日

### 2. 研究対象

A氏 男性 80歳代 要介護2

- ・アルツハイマー型認知症（2009年～）
- ・混合性難聴（障害者手帳第1種3級）

### 3. 具体的方法

- 1) A氏への聞き取りを行なう。
- 2) 帰宅願望の要因の分析と改善策の考案
  - (1) 腰痛緩和の方法の検討
  - (2) 他者と交流できる環境づくり
  - (3) 手持無沙汰にならないよう時間活用の検討
  - (4) 職員の対応の見直し
- 3) 具体的方法の実践

評価尺度：腰痛の軽減と利用の過ごし方の変化

## IV 倫理的配慮

対象者とそのご家族には研究の説明を口頭にて行い、承諾得ている。

## V 結果

A氏への聞き取りの結果、「腰痛が辛いこと」「他者との交流が少ないこと」が帰宅の訴えに繋がっていることが分かった。このことからデイサービス利用時の目標として“腰痛を和らげ、他者との会話や交流を楽しみ、活動的に過ごす”とし、様々な観点からA氏のデイサービスでの過ごし方を見直すことを始めた。

腰痛に対しては受診歴や服薬状況の確認を行い、デイサービス利用時に痛み止めを持参するよう働きかけた。また、座席替えを実施したことで顔馴染みの方ができ、トランプや集団レクに参加し、楽しく過ごせる時間が増えた。手先が器用な一面を生かし、周囲の方々に手作りの折紙コマを披露しプレゼントして交流を図る場面も見られた。A氏の再アセスメントを実施し、全職員に対してA氏の気持ちに寄り添った声掛けや臨機応変な対応の統一化を図った。

以上の取り組みを通して他者との交流が増え顔馴染みの方ができ、A氏が笑顔で過ごせる時間が増えた。それと同時に腰痛の訴えが減少した。

## VI 考察

様々な取り組みの結果を踏まえ、帰宅願望の一番の要因は腰痛ではなくデイサービスでの過ごし方にあると考察した。デイサービスでの過ごし方を見直したことで、デイサービスに対する印象の変化があり、帰宅の訴えも減ったと考えられる。

今回の研究を通して、利用者が快適に楽しく過ごしていただけるようひとりひとりと向き合い、その方に合った過ごし方をチームで考え、実践していくことの重要性を学んだ。

### 【引用・参考文献】

- 1) 認知症ねっと 帰宅願望の原因と対応・対策、参照 2022年6月10日、  
<https://info.ninchisho.net/symptom/s150>



|        |                                      |       |              |
|--------|--------------------------------------|-------|--------------|
| 題名     | 動画を用いた記録共有の意義～30歳代の高次脳機能障害利用者支援を通して～ |       |              |
| 法人名    | 社会福祉法人白山福祉会                          | 事業所名  | 特別養護老人ホーム桜の丘 |
| 発表者    | 横田未咲                                 | 共同研究者 |              |
| サービス種別 | 短期入所(障害者)                            |       |              |

## I はじめに

障がい者向けの短期入所とは、18歳以上64歳以下の障がいがある人が利用できる施設だ。グループホームでの生活を目指す前の練習として、短期間泊まりの体験をしている。また、入所施設が決まるまで、家族の介護疲れ軽減のために利用するケースもある。中には、高次脳機能障害のある利用者もいる。

高次脳機能障害は、脳に損傷を受けたことで、様々な障害が生じた状態のことをいう。怒りっぽさや、暴力が見られることもあり「家族の身体的・精神的負担が大きい」<sup>1)</sup>ことから、医療機関と連携した支援の必要性が高い。A氏(30歳代女性)は、両親の介護負担が大きいため、家族の休息目的に利用が開始された。当初より、興奮状態も多く、適切な薬物治療等、医療機関の支援が不可欠であったが、文章のみの記録だと、A氏の日中の様子が家族に伝わりにくく、病院受診がされないままであった。そこで、動画や写真を掲載できる介護記録アプリを使用し、動画を活用した情報共有を行うことが必要だと考えた。

## II 目的

介護記録方法として動画を用いることで、情報共有に動画を活用することの効果を明らかにする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年1月～2023年5月

### 2. 研究対象

A氏、30歳代、女性、高次脳機能障害

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) 動画や写真を載せた記録を家族と共有する。
- 2) 他機関とのカンファレンス時に、記録内容を提示して共有する。
- 3) 動画使用前後の支援状況を比較する。評価尺度に、家族や他機関の言動、支援内容の変化を用いる。

## IV 倫理的配慮

契約時、A氏と家族に、A氏の情報使用に関する説明をし、同意を得ている。

## V 結果

1. 「風船バレーを上手にやっていた動画に触発され、わが家でも(風船がなかったので)キャッチボールをやってみました。トレーニングもやってみたくて、やる気が出てきたので、足踏みマシーンも、退院後初めて挑戦してくれました」とのコメントと共に、家族から動画がアプリ上に届き、自宅の様子を職員が知ることが出来た。
2. 他機関とのカンファレンス時、動画を提示して実際の様子を共有したことで、早く医療機関に繋がったほうがいいとの方針が決まった。その後相談員から受診を促し、医療機関に結びつけることができた。受診時に記録を主治医に見せることで、精神科との相談の際にすごく助かっていると家族からの連絡もあった。

## VI 考察

動画を用いた情報共有が行え、医療機関受診という支援方針を他機関と定めることができた。また、受診に役立っているとの実際の声から、動画の活用は、関係者にA氏の詳しい状態を共有し易く支援に有効であったと考えられる。

しかし、今回はご両親がスマートフォンの操作に抵抗が無かったため、動画の活用が行えた。両親が高齢等、デジタルに慣れていない場合は活用が難しい為、今後別手段の検討も必要だ。

### 【引用・参考文献】

- 1) 白山靖彦, 高次脳機能障害者家族の介護負担に関する諸相～社会的行動障害の影響についての量的検討～, 社会福祉学, 51, 1, 2010, 6





|        |                                    |       |                 |
|--------|------------------------------------|-------|-----------------|
| 題名     | 認知症の見当識障害へのアプローチ～時間がわかるとできることが増える～ |       |                 |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会                        | 事業所名  | 小規模多機能型居宅介護マロニエ |
| 発表者    | 内川建                                | 共同研究者 | 高橋舞子            |
| サービス種別 | 小規模多機能型居宅介護                        |       |                 |

## I はじめに

A氏は自宅での独り暮らしをしているが2022年の春頃より自分で行っていた洗濯や買い物をすることが少なくなり不安や心配事から施設や他利用者に電話をすることが増えてきた。電話では「私は何すればいいのだろう」等の不安な言葉も聞かれていた。A氏は現在何が出来て、何に支援が必要なのかをチームで見極め、A氏の不安の一つでも解消し、少しでも長く自宅での生活を送れるように考えてケアを実践した。

## II 目的

A氏の必要な支援をチームで見極め、不安を解消し、少しでも長く自宅での生活を送ることができる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年10月21日～2022年11月25日

### 2. 研究対象

A氏 70歳代 女性 要介護1

日常生活自立度：A1 認知症自立度：IIb

認知症の原因疾患名：アルツハイマー型認知症

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 対象者の出来る事、出来るようになるかもしれない事を、センター方式D-1シートを使用し、通い時、送迎時、訪問時にアセスメント、評価、課題の振り分けを行っていく。
- 2) 併せてD-2シートも使用し分からない事を探ることで出来ないこととの関係性も見っていく。
- 3) 振り分け後IADLを中心に出来ることを継続して行い、支援の必要な所は支援の下行う。A氏の変化や言動もケース記録に落としてもらうことで評価にも活用する。

(評価尺度)・不安による電話の回数と内容の変化  
・できることの継続と不安の増減

## IV 倫理的配慮

本研究目的と個人情報の保護、発表に対してA氏・家族に説明し書面にて同意を得ている。

## V 結果

1. 自宅のデジタル時計が読めていないことがわかった。洗濯や買い物はできなくなったのではなく、手伝えができることを確認した。時間がわからないことで夕食を2回食べていることがわかった。
2. 通いの時間を夕食付き18時から16時に変更、自ら行く様子が無かった買い物を同行支援した。洗濯は帰宅後訪問で見守りにて実施した。
3. 買い物同行にて食べ物が無い事による不安が減少した。洗濯を促し自分で行える家事が増えたことで在宅時間が増え、夕食を2回食えることがなくなった。また、デジタル時計文字盤の日付と時間をメモで識別することで日付・時間の把握が出来るようになり「訪問・通い」の判別もできた。朝に毎日5回以上あった電話は1週目3日、2週目0日、3週目1日、4週目2日になり、電話内容は「何をしたらよいかわからない」から「元気です。今日は行く日ですよ」と変化した。

## VI 考察

認知症の見当識は本人の能力に見合った形で表示することで、わかることができることへ変わる。今回の実践結果で得た成果は、見当識障害と短期記憶障害があり、その日その日が不安なA氏に対して時間と日にちを明確にし、自ら行くことが少なくなった買い物、洗濯などのIADLを一緒に行うことで日々の不安が軽減できたことである。

### 【参考文献】

- 1) 認知症介護研究・研修東京センター, 四訂 認知症の人のためのケアマネジメント センター方式の使い方・活かし方, 中央法規出版, 2019



|        |                                 |       |               |
|--------|---------------------------------|-------|---------------|
| 題名     | あなたにもらった15日間 ～ACPを活かした看取りケアの軌跡～ |       |               |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会                     | 事業所名  | 特別養護老人ホームみさと苑 |
| 発表者    | 風巻美穂                            | 共同研究者 | 風巻美穂 関谷智英里    |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                        |       |               |

## I はじめに

A氏は肝硬変末期という状態ゆえにいくつもの施設から申し込みを断られた末、2022年7月4日に縁あってA施設に入所された。最期に大切な人と顔を合わせてお話したい、というA氏の願いを叶える為、残された日々をA氏らしく過ごせるよう考え対応する中で、アドバンス・ケア・プランニング(以下ACPとする)を深く学ばせていただいた事例を紹介する。

## II 目的

A氏が最期の時まで悔いのないよう過ごせること。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年7月4日～2022年7月19日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 女性 要介護5

日常生活自立度A2 認知症自立度IIa

(既往歴) 肝硬変、腎不全、貧血、心不全、急性腸炎、リウマチ、右白内障

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) ミーティングにてA氏の身体状態、意向を申し送り、職員間で共有する。状態の変化に合わせて生活環境を変え、苦痛軽減を図る。
- 2) 居室もしくは静養室にて、息子などA氏が会いたい方と交流できる環境を整える。

### 4. 評価尺度

希望に添った生活をお手伝いし、最期の日までA氏らしく過ごせること。

## IV 倫理的配慮

本研究の説明を家族に口頭と書面で行い同意を得た。

## V 結果

1. 入所当初はユニットに居室を設けたが、7月11日に身体の痛みが強まり静養室へ移られた。痛みの訴えが聞かれた際はギャジアップや背中をなでるこ

とで苦痛の緩和を行った。また食欲が低下する中でA氏の希望を伺い、食事の時は息子が初めて作った自家製のトマトや、お菓子やパンなど食べたいものを召し上がっていた。

2. A氏は思い出話に花を咲かせ、一緒に遺影や着物を確認し、悲観されることなく着々と旅立ちの準備をされ、友人と顔を合わせた際には涙ぐまれ、遠方にお住いの家族と面会された後は肩の荷が下りた様子だった。残してゆく相手に別れを告げ、母親の仕事を全うし、7月19日17時39分、A氏は息を引き取られた。

## VI 考察

終末期のケアを行う際はその方の生活・人生に焦点をおき、地域で暮らす生活者として捉えることが重要<sup>1)</sup>と考えられている。A氏の事例は、前例のない中で職員の戸惑いも少なくなかったが、本人や家族の「大切な人と過ごす」という願いに重点を置き、こまめなケアでなく環境を整え見守るケアを行ったことで、家族から「幸せな良い人生だった」と手紙を頂き、A氏の生き様にACPの重要性を強く体感した。今回の看取りケアを通し、「最期までこの方らしく過ごせる為にできる限りのことをしたい」という職員の原動力となっている。今回A氏から学び得たことを、今後も利用者の意思決定を支援するケアに繋げていく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 田村恵子, 新体系 看護学全書, 経過別成人看護学, 終末期看護: エンド・オブ・ライフ・ケア第1版, メヂカルフレンド社, 2017



|        |                                   |       |                  |
|--------|-----------------------------------|-------|------------------|
| 題名     | 施設を超えた多職種協働～ICTを活用して褥瘡改善に取り組んだ事例～ |       |                  |
| 法人名    | 医療法人社団日翔会                         | 事業所名  | 小規模多機能ホーム おいでんせえ |
| 発表者    | 上田直美                              | 共同研究者 | 細谷明美 榎太一         |
| サービス種別 | 小規模多機能型居宅介護                       |       |                  |

## I はじめに

当施設は中山間地域に位置する小規模な事業所で近隣に関係専門機関は少ない。ポケットを伴う褥瘡のケースに対し、褥瘡改善に向けて法人の専門職との協働体制を構築し ICT を活用した取り組みを報告する。

## II 目的

褥瘡を改善するため、施設を超えた多職種協働体制を構築する。

## III 方法

### 1. 研究期間：

2022年12月1日～2023年1月13日

### 2. 研究対象：A氏 90歳代 男性 要介護4

主現病歴 アルツハイマー型認知症 糖尿病  
障害高齢者自立度 B1 認知症高齢者自立度 IIIa  
背骨突出

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 法人内他施設専門職との協働体制の構築し、ICTを活用する。
- 2) 褥瘡ケアを実践する。
- 3) 褥瘡の状態を褥瘡評価スケール DESIGN-R®2020 にて評価する。

## IV 倫理的配慮

研究対象者に研究の目的や、研究参加は自由であり途中でやめられることも自由であることとプライバシー保護を説明し、研究参加の同意をいただいた。

## V 結果

1. 法人内の看護師、作業療法士、福祉用具専門相談員、管理栄養士（以下専門職チーム）を交え、オンライン会議やケア記録システムを活用した情報共有により、褥瘡の状態や進捗状況の確認、評価、助言指導が定期的にかつ必要に応じて実施できた。
2. 専門職チームの助言指導の下、事業所スタッフは処置方法、ポジショニング方法、食事形態の見直しや

栄養改善等の専門的な実践を行うことができた。

3. DESIGN-R®2020 を使用した評価では、アテローム切開時と最終評価時点で肉芽組織以外の評価項目に改善が見られた。

表1 褥瘡評価スケール DESIGN-R®2020

|       | 深さ | 滲出液 | 大きさ | 炎症 | 肉芽組織 | 壊死組織 | ポケット |
|-------|----|-----|-----|----|------|------|------|
| 12月1日 | 3  | 6   | 6   | 3C | 3    | 6    | 9    |
| 1月6日  | 5  | 3   | 3   | 1  | 3    | 3    | 6    |

## VI 考察

処置を開始してから約1ヵ月にて登録解除となったが褥瘡は改善傾向にあった。また ICT を活用した協働体制の構築により、遠隔地においても専門的な実践を不安なく行え、知識や技術の向上にもつながった。このことから施設を超えた多職種協働体制の構築は成功したとも考えられる。また当法人内には同じような環境の施設が多数あり、本事例の取り組みを展開していくことで、様々な事例や課題へ柔軟に対応でき、法人全体のケアの質の底上げに対し効果が期待できるものと考えられる。さらに ICT 活用を進め、法人内外問わず、医師等の医療関係者やインフォーマルサービス等の利用者を支える担当者との協働体制へと発展させることができれば、住居地を問わず利用者の住み慣れた地域でその人らしい生活を支えるサービス提供が可能となるのではないかと考えており、今後の ICT の活用と可能性の模索を継続していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 有賀洋文, 改定 DESIGN-R®2020 コンセンサス・ドキュメント, 日本情報経営学会誌, 37, 1, 2017, 8-24
- 2) 島田達巳, 地域包括ケアシステムと ICT, 情報セキュリティ大学院大学, 日本情報経営学会誌, 37, 2017, 8-24



|        |                                 |       |                   |
|--------|---------------------------------|-------|-------------------|
| 題名     | 熱海伊豆海の郷を選んでよかった ～稼働向上は利用者の満足から～ |       |                   |
| 法人名    | 社会福祉法人湖成会                       | 事業所名  | デイサービスセンター熱海伊豆海の郷 |
| 発表者    | 金子美花                            | 共同研究者 | 鉄地河原未優            |
| サービス種別 | 通所介護                            |       |                   |

## I はじめに

当事業所の課題であった稼働率低迷を分析した結果、過去2年間の新規契約数は2020年度が10件、2021年度は16件に留まった。2022年度の新規契約件数は前年度比32件増の48件の実績となった。

この結果を踏まえ、2022年度、顧客確保の為に新たに実践した取り組みを振り返り、増加の要因について考察した結果を報告する。

## II 目的

2022年度、当事業所にて実践した取組みの成果と、新規契約数が増加した要因との背景を明確にする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年4月～2023年3月

### 2. 研究対象

2020年、2021年度実績と2022年度の新規契約数

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 登録者名簿の見直し
- 2) 広報活動の強化
  - (1) ケアマネジャーに対し利用日空き状況・利用者へのサービス内容を記載した広報誌
  - (2) 利用者自身や家族に対し利用の様子を記載した広報誌発行。
- 3) 1日体験利用のご案内
- 4) 魅力あるサービスの提供
  - ①利用者に聞き取りし、その方のやりたいレクリエーションを選択。

## IV 倫理的配慮

対象者・家族に研究発表に使用する旨を説明し、承諾を得る。

また、写真等の掲載許可も得ている。

## V 結果

登録者名簿の調整を行い、新規受け入れ数の把握し態

勢を整えた。

ケアマネジャーに対し、利用空き情報とレクリエーション活動等のサービス内容を掲載した広報誌を発行した。広報誌には利用者のレクリエーション風景や、浴室やフロア内の写真を載せコロナウイルス禍で見学ができない中でもデイサービスのことを知ってもらえるような広報活動を行ってきた結果、新規の問い合わせ件数が増え体験デイサービスの利用者増加がみられた。また利用者用の広報誌に作品を載せることで、利用者自身の意欲向上がみられた。

「個別レク」「集団レク」などレクリエーション数を増加し、利用者がやりたいものを選択してもらえるようになり、デイサービスに来る目的や役割を利用者と一緒に作ることができた。

## VI 考察

一般財団法人日本総合研究所<sup>1)</sup>、老人福祉施設の地域展開の手法についての調査報告書では、全国の特養4,000か所を実施したアンケートでは、地域から施設へ施設から地域にどのような関わりを実践しているかの問いで、56.6%の半数以上が施設の広報誌、情報紙を地域へ配布を実施しているとの報告がある。

今回、居宅向けと利用者・家族へ向けた2種類の広報誌の作成を行った。空き状況、サービス内容や活動の様子を掲載することで、読み手の求めている情報とこちらが伝えたい内容が合致し、体験利用、新規契約、追加利用に繋がったと考える。また、コロナ禍であった研究期間においては、更に、この手法を取らざるを得ない状況であり、効果はより上がっているのではないかと考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 老人福祉施設の地域展開の手法についての調査研究事業報告書, 2017, 12, 一般財団法人日本総合研究所 62\_nihonnsoukenn.pdf (mhlw.go.jp)





|        |             |       |               |
|--------|-------------|-------|---------------|
| 題名     | 入浴支援ロボットの導入 |       |               |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会 | 事業所名  | 特別養護老人ホームさくら館 |
| 発表者    | 志村光祐        | 共同研究者 | 和田和義          |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設    |       |               |

## I はじめに

2018年3月の移転時には、個別浴槽にリフトを設置していなかったが、2022年3月に入浴用リフト(以下リフトとする)を導入した。導入までに至る経緯および導入後の効果について報告する。

## II 目的

リフトを導入することにより、利用者にとって安楽な入浴になるとともに、職員の介護負担軽減を図る。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年6月～2023年6月

### 2. 研究対象

職員および入所利用者

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) 特養会議における導入の検討
- 2) 他施設への導入の状況確認
- 3) 導入にあたっての補助金申請
- 4) 導入後の職員アンケート

## IV 倫理的配慮

事前に利用者及び家族や関係者に研究する旨を口頭と書面にて説明し同意を得ている。

## V 結果

介護職員(33名)のアンケート結果からリフトを5台導入したことで様々な効果を得ることが出来た。

### 1) 職員の負担軽減

移転から4年経過し、機能低下により個浴で入浴することが難しくなってきた利用者も安全に入浴することが出来ている。浴槽からの引き上げを負担に感じていた女性職員が特に多かったが、負担が軽減されたと感じている。また、指導にあっても入浴時の移乗介助が簡素化されたことにより、以前より入浴介助がより安全に出来るようになってきている。

既に導入していた寝台浴、車イス浴と併用することで、

導入後は腰痛に伴う休職者は0名である。

### 2) 入所者への影響

導入前に車イス浴で対応していた利用者は28名だったが、2023年6月で11名となり、その分リフト利用し対応をしている。その結果、ユニットを離れることなく、利用者の見守りを行なうことができ、事故予防にもつながっている。

2023年6月現在、定員100名に対し、リフト浴対象者は42名となっている。

### 3) 導入にあたっての補助金申請

リフトは1台約150万円のため、「千葉県介護ロボット導入事業費補助金」を利用することにした。その結果、リフト5台導入するにあたり、購入金額の約33%助成があったため、負担は抑えられている。

### 4) 導入後の職員アンケート結果について

アンケートの結果(全33名)から全員導入して良かったと思うとの回答が得られた。導入当初は「新しいものなのでどういう方に使ったらいいのかわからない」「使い方が不安に思った」という意見があったが、動画で使い方の手順をいつでも見られるようにしたことで、今ではスムーズに運用することが出来ている。

## VI 考察

今回の取り組みにより、目的を果たすことが出来た。今後、利用者が重度化していくため、利用者および職員が安心して入浴対応出来るように、業務効率化を図り新たな機器の導入も検討していくことで働きやすい職場環境となるようにつなげていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 厚生労働省, 介護ロボットの開発・普及の促進, 参照 2021年7月14日, 2023年6月15日,  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000209634.html>



|        |                       |       |                     |
|--------|-----------------------|-------|---------------------|
| 題名     | トイレで失敗したくない～排泄支援の見直し～ |       |                     |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会           | 事業所名  | 健康倶楽部中子の森グループホーム深雪  |
| 発表者    | 井口祐喜子 渡邊千恵子           | 共同研究者 | グループホーム深雪つむぎ庵ユニット職員 |
| サービス種別 | 認知症対応型共同生活介護          |       |                     |

## I はじめに

A氏は入所間もなくから、排泄場所の間違いや不潔行為等の排泄上のトラブルが多くなり、落ち込み時々泣いてしまう事があった。これらの原因を探り、A氏が安心してトイレで排泄する事が習慣化するよう支援の見直し・検討が必要と考えてケアを実践した。

## II 目的

排泄がうまくできない要因を明確にし、支援を統一する事で、A氏が落ち込まず安心して過ごせる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年10月31日から11月20日

2023年4月25日から5月1日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 女性 要介護3

日常生活自立度：A2 認知症自立度：Ⅲa

既往歴：アルツハイマー型認知症 高血圧  
急速進行性腎炎症候群 鉄欠乏性貧血

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) トイレでの排泄・汚染回数の推移やA氏の言動の1週間毎の変化について24時間生活変化シートを活用しアセスメントを実施する。

2) 1週目（2022年11月1日～6日）、排泄誘導を声掛けのみで実施し、その後ケアの見直しを検討する。2週目（2022年11月7日～20日）、居室とトイレの動線をテープで廊下の床に示す。排便時に綺麗な物との交換を勧める声掛け、排泄動作に迷ったタイミングで促しの声掛けを実施する。表情が暗い時は余暇活動の参加を促し関りを増やす。その後も支援を継続する。

3) 2023年4月25日～5月1日に24時間生活変化シートでアセスメントを実施する。

4) 評価尺度：排泄・汚染の回数の推移、A氏の言動の変化、半年後のケアの有効性の有無を評価する。

## IV 倫理的配慮

A氏と家族に本研究の説明を行い書面にて同意を得た。

## V 結果

1. 排泄での失敗や不潔行為の回数が減少した。

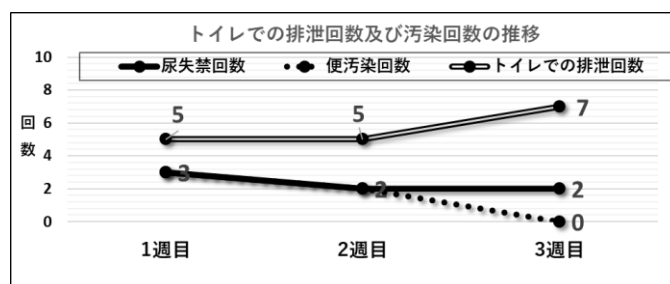


図1 トイレでの排泄回数及び汚染回数の推移

2. A氏の言動の変化について、当初は不安で泣いてしまう言動がみられたが、羞恥心に配慮した声掛けと付き添いにより、A氏から「いつもお世話になって悪いね」と穏やかな言葉が聞かれ、トイレの場所が認識できた。排泄以外でも、職員と余暇活動に参加し楽しめるようになり、表情が和らぎ笑顔が増えた。

3. 半年後のアセスメントの結果、排泄動作や認識の状態に変化はなく、支援の継続によりトイレで排泄できる事が増え、排泄時に不安な様子はほぼ見られなくなった。以上から、支援の継続は有効とした。

## VI 考察

排泄の事は羞恥心から、なんとか自分で行う・隠す・聞けないに気持ちになりがちである。気持ちに寄り添った支援を受けた事で、A氏は大きな安心感に繋がったと推測する。誰も状態は心身共に日々変化していく。今後も認知症ケアを理解し羞恥心や自尊心を大切にしながら、チーム全体で気持ちに寄り添った支援を継続していく必要があると考える。

### 【引用・参考文献】

1) 釜土禮子, 認知症高齢者の排泄とそのケアの重要性について 介護の関わりより学ぶ, 日本認知症ケア学会誌, 5, 3, 2006, 520-526





|        |                 |       |                      |
|--------|-----------------|-------|----------------------|
| 題名     | トイレでの排泄ができる取り組み |       |                      |
| 法人名    | 株式会社ライフアシスト     | 事業所名  | 介護付有料老人ホームアーバンリビング今宿 |
| 発表者    | 下込智也            | 共同研究者 | 長谷川安里                |
| サービス種別 | 特定施設入居者生活介護     |       |                      |

## I はじめに

A氏は介護老人保健施設で生活されていたが、認知症の進行に伴い、粗暴行為、易怒的になることがあり病院へ入院。その後も入退院を繰り返したのち、易怒的になることが減り、A施設へ入居される。入居時より、屋内歩行は独歩、トイレ動作は自立していたが、トイレの場所がわからず、廊下で排尿されることが多かった。トイレへ案内しようとするも「ほっとけ。」と言われ、案内できないこともあった。入居後、環境にも慣れ、職員とのコミュニケーションが円滑にできるようになった時に、「トイレがわからんから困つとんや。」と話されるようになる。

## II 目的

「トイレがわからない」というA氏の不安を解消するため、トイレの場所を覚えていただき、適切な場所で排泄をしていただけるようにすること。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年12月20日～2023年6月20日

### 2. 研究対象

A氏 年齢：70歳代 男性

既往歴：混合型認知症（アルツハイマー型、血管性）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 職員との信頼関係を築く。：日常生活の中で会話する時間を作り、職員のことを覚えていただく。
- 2) トイレに行きたいという思いを職員が気付けるようにする。：排泄の訴えの時間帯を把握、どのような行動をするかを記録し、情報をまとめ共有する。
- 3) トイレの場所を覚える。：居室・教養トイレへ繰り返し誘導することで、場所を覚える。トイレの扉に「お手洗い（イラスト付き）」のステッカーを貼る。

## IV 倫理的配慮

今回の研究に関する目的、取り組み内容をA氏、A氏

のご家族様に説明し、同意を得ている。

## V 結果

入居当初は職員との会話もうまくできず、自分の想いを伝えることができていなかった。方法1)より職員のことを覚え職員へ想いを伝えることも増えた。方法2)より職員が利用者のわずかな変化に気づけるようになった。またトイレへ行きたいというサイン「ズボンをおろそうとする動作」があることを把握し、トイレへ案内することができた。方法3)よりトイレの場所を探して歩かれていることが多いが、居室トイレの場所を覚え、一人でトイレへ行かれることもある。共用トイレの場所はステッカーを貼り、トイレの場所を覚えやすくしたが、覚えることはできていないよう。結果としてはトイレ以外での排尿回数が減少した。

## VI 考察

認知症による見当識障害があり、トイレの場所がわからなかったため、トイレ以外の場所で排泄していたと考える。また職員との関係性もできていないことや認知症の進行による易怒性<sup>1)</sup>があり、トイレへ案内しようとしても「なんで行かなあかんのや。」と怒り、誘導できなかった。日々の生活の中でコミュニケーションを取り、職員や周囲の環境に慣れることで自身の思いを少しでも伝えることができ、トイレへの案内ができるようになった。また職員がA氏の排泄に行きたいタイミングやその時の行動を把握することによってトイレまで案内することができた。普段は居室のトイレへ案内することが多く、繰り返し学習することで居室トイレの場所を覚えることができたと考え。共用トイレは目印をつけたが場所を覚えることができなかつたと考え。トイレ誘導が可能となり、トイレ以外での排泄回数が減少したと考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 竹内孝仁, 介護基礎学, 医歯薬出版株式会社, 2017



|        |  |       |                       |
|--------|--|-------|-----------------------|
| 題名     | ラクチュロース介入による腸閉塞の既往がある方の苦痛軽減に向けての排便コントロール |       |                       |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会                              | 事業所名  | 特別養護老人ホームシンフォニー       |
| 発表者    | 萩山紅林                                     | 共同研究者 | 栄養科職員 3F 零ユニット職員 看護職員 |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                                 |       |                       |

## I はじめに

A氏は既往症に腸閉塞があり、医師から下剤による排便コントロールが必要と指示を受け、下剤を使用すると腹痛、水様便と排便時に不快感を示し、拒薬の訴えがみられる。「ミルクオリゴ糖ラクチュロースを摂取することで腸内細菌叢のバランスの改善と難消化性であるため大腸内の浸透圧を高める作用」<sup>1)</sup>を活用しミルクオリゴ糖ラクチュロースの介入効果を報告する。

## II 目的

オリゴ糖ラクチュロースの摂取を摂取することで、排便状況や便性状に与える影響を検証する。

## III 方法

1. 研究期間：2023年4月5日～2023年5月31日

2. 研究対象：A氏 90歳代 男性 要介護4

既往歴：腸閉塞、高血圧、糖尿病(1型か2型は不明)

排泄状況：排便-2日から-3日でマグネット内服をしているが、排便の状態によって内服の回数が増え、水様便になってしまい内服の調整が難しい。また、それに伴う不快感と拒薬がみられる。

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

1) A施設の担当往診医に報告し了承を得て、栄養ケア計画書、食事箋を作成。家族への説明と同意を頂いてからの開始とする。

2) ミルクオリゴ糖ラクチュロース 50%含有シロップ 1日 15ml を麦茶又はコーヒーに混ぜ、毎日 15時に飲用し 8週間飲用 (介護)。

3) 排便チェックシートを用いて、日付、時間、 Bristol便性状スケール、ケア関連情報、備考を記入する (介護・栄養科)。

4) 介護用ソフトへ排便の処置の記録 (看護)。

## IV 倫理的配慮

対象者及び家族に本研究の説明を口頭で行い同意を

得た。

## V 結果

1. 下剤・座薬による便処置回数で、2週間毎の合計回数から、投与前の2週間は3回、投与後の1週～8週を問わず摂取後下剤・座薬による便処置回数が、平均1.5回へ減少した。

2. 拒薬の回数は、投与前2回、投与後、投薬と併用であったが0回であった。

3. Bristol便性状スケールを用いた結果から、泥状・水様便の回数は、4月5日～12日まで泥状便3回、水様便1回、4月13日～5月31日まで水様便・泥状便は0回であった。ラクチュロースを摂取して1週間ほど経過した頃から便の性状が普通便・やややわらか便へ効果を実感するようになり、それと同時に拒薬の訴え、排便による不快、腹痛がなかった。

## VI 考察

ラクチュロースは、ヒトの胃酸や消化酵素では分解されない難消化性オリゴ糖である。小腸で吸収されることなくそのまま大腸に到達することができ、ビフィズス菌のエサとして利用されることからビフィズス菌の増殖を促し、腸内細菌叢のバランス改善すること<sup>2)</sup>で排便時の苦痛が軽減されたと考える

今後は、下剤による人工排便から、ラクチュロースによる腸内細菌叢の改善も考慮した排便コントロールを推奨していく。

### 【引用・参考文献】

1) 丸山道生他, 経腸栄養患者の慢性便秘症に対するラクチュロース介入効果～排便状態と腸内細菌叢に及ぼす影響, 日本静脈経腸栄養学会雑誌, 33, supplement, 2018, 309

2) ミルクオリゴ糖とは?, 株式会社クリニコ, [https://www.clinico.co.jp/medical/pdf/products\\_item74\\_lactulose\\_medical.pdf](https://www.clinico.co.jp/medical/pdf/products_item74_lactulose_medical.pdf), 参照2023年7月



|        |                                  |       |                   |
|--------|----------------------------------|-------|-------------------|
| 題名     | ショートステイ利用時の忘れ物を減らしたい ～忘れ物0を目指して～ |       |                   |
| 法人名    | 社会福祉法人草加福祉会                      | 事業所名  | マナーハウス横山台 ショートステイ |
| 発表者    | 高梨大輔                             | 共同研究者 | 葛西真由美             |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                         |       |                   |

## I はじめに

ショートステイ業務における悩みの一つに物品管理がある。様々なしくみで物品管理をしているものの忘れ物が発生してしまう現状がある。発生要因には保管場所が数か所あること、入退所が重なり時間的・精神的余裕が不足すること、職員間での物品管理に対する意識差など様々である。利用時の忘れ物減少に向けた取り組み結果を報告する。

## II 目的

ショートステイ利用最終日における荷物返却時の忘れ物件数を減らす。

## III 方法

1. 研究期間 2022年4月1日～2023年7月28日
2. 研究対象 ショートステイ職員9名
3. 具体的方法（評価尺度を含む）
  - 1) 持ち物チェック表の見直し(2022年4月)
  - 2) リネン交換時間の変更(通常の15分前実施)
  - 3) 家族に持ち込み物品への記名依頼
  - 4) ユニット別図面に忘れ物発生場所を表示  
(図面内に忘れ物があった場所にシールを貼る)
  - 5) 忘れ物発生に関与した介護職員との面談指導

## IV 倫理的配慮

職員が特定されないよう配慮した上で実施した。

## V 結果

1. 持ち物チェック表に確認場所チェックボックスを追加し保管場所見落とし減少につながった。
2. リネン交換時間の前倒しにより帰宅前にベッド周辺の忘れ物に気付けた事例もあった。
3. 家族による記名、また記名漏れ発見時には家族了承のもと職員が記名にて、洗濯後等の返却先不明物品が減少した。
4. ユニット別忘れ物発生場所を掲示したことで、ユニット別発生件数も明確となった。

5. 職員指導実施件数：7回(4名)

6. 忘れ物件数推移

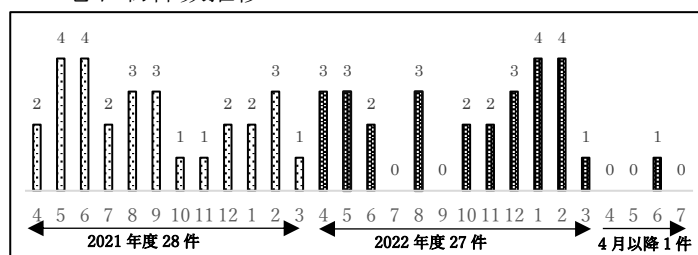


図1. 忘れ物発生件数(年別比較)

2022年度27件(上期11件、下期16件)であった。2023年4月以降は1件で経過中。利用者状況としては定期利用減少、新規利用増加の傾向であった。忘れ物発生日と人員配置との関連では、人員充足日にむしろ忘れ物発生件数が多い傾向であった。

## VI 考察

忘れ物発生の一要因には、新規利用者が増えたことによる不慣れな物品管理に難渋したことがある。また人員不足時には、業務中の緊張感を保ち注意できていたことも、人員が充足すると緊張感の緩みや人任せ感から集中力や責任感が欠如することでの確認漏れが忘れ物発生の一要因とも推察される。持ち物チェック表改訂版やリネン交換時間の変更策が功を成すためには、物品管理への責任意識が要となる。追加対策のユニット別発生場所の可視化や職員面談の仕組みが忘れ物抑制に対する強い意識を持つきっかけとなり、職員同士の連帯感が生まれ、忘れ物0意識を向上させたものと思われる。また忘れ物減少で相談員の負担軽減効果もあったが、家族からの信頼獲得や定期利用の定着化も期待でき、今後も物品管理への責任意識の維持に努めていく。

## 【参考文献】

- 1) ショートステイの忘れ物対策5選!紛失しやすいものは要注意, カイゴジョブ, 2021.8.29, 参照 2022年5月10日, <https://tanoshii-kaigo.com/gg0497/>



|        |                             |       |                 |
|--------|-----------------------------|-------|-----------------|
| 題名     | 申し送りノートの見直し～「知らなかった」からの気づき～ |       |                 |
| 法人名    | 医療法人社団平成会                   | 事業所名  | 介護老人保健施設ファンコート泉 |
| 発表者    | 南あかり                        | 共同研究者 | 弓田遥華            |
| サービス種別 | 介護老人保健施設                    |       |                 |

## I はじめに

一階のユニットはショートステイと長期入所の利用者がいらっしやり、情報を分けて記入する為に用途別に3冊のノートを使用していた。しかし、記入漏れや確認漏れが多く発生し、職員からの「知らなかった」という言葉が増えている事に気が付き、申し送りノートの改善に取り組んだ。

## II 目的

今までの申し送りノートの改善すべき点について一階職員に聞き取りを行い、意見を反映させた新たな申し送りノートを作り、運用し、申し送り漏れ、確認漏れを防ぐ。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年9月20日～2022年10月17日

### 2. 研究対象

一階ユニット職員(8名)

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

1) 職員全員に現在使用している申し送りノートについて改善欲しい点、なぜ記入漏れ、確認漏れが発生すると思うか聞き取りを行う。

2) 聞き取りの結果、①書く際も確認する際も、そのページを見つけるのが面倒。3冊ある為確認するのに時間が掛かってしまう。②何を書くべきなのか把握できていない。③せっかく記入しても、他の職員がきちんと確認しているのか分からない。

という大きく分けて3つの意見が挙がった為、それぞれについて改善していく。

3) 2週間後、再度職員に聞き取りを行い、改善点があれば反映させていく。

## IV 倫理的配慮

研究対象であるユニット職員に対し、アンケートや聞き取り結果の使用用途を説明し、同意を得ている。

## V 結果

聞き取りの結果出た①～③の意見についてそれぞれ改善した。①については、ノートを1冊にまとめ、見やすいようにページをレイアウトし項目を分けた。②については、書くべきことをユニット会議で確認し、ノートの最初のページに示す事で書くべきことを「見える化」した。③については、確認したらチェックを付ける事ができるように、個人の記名がしてあるチェック欄を各ページに付けた。

運用して二週間後、再度聞き取りを行うとユニット職員全員が、記入する癖が少しずつついてきたこと、休み明けでも申し送りの確認漏れが無くなったことを実感していた。また、業務中の職員同士の会話から「知らなかった」という言葉が少なくなった。

## VI 考察

使いやすい申し送りノートにするためには、「申し送りノートに関する職員の認識や使い方のズレについては、記述する内容や記述の仕方を統一し、職員が共有する必要がある」<sup>1)</sup>という記述からもわかる様に、実際に運用する職員の声を聞き、それを共有し活かす事が重要なのだと分かった。また、自分たちで考案したツールを使用しているためか、今までよりも申し送りそのものに対する意識も向上し、他部署との情報共有も研究前よりスムーズになったことから、今回の研究の目的は達成できたと言える。

見やすくなったことで、記入の頻度が多い職員と少ない職員の差が見えた為、今後はノート記入への意識についての改善にも取り組んでいく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 中島正人他, 介護施設における情報共有—申し送りの送り手の意図と受け手の理解に関する質的分析—, 人間工学, 51,4,2015,103-114





|        |                                 |       |                     |
|--------|---------------------------------|-------|---------------------|
| 題名     | 選ばれるショートステイを目指して・稼働率の向上に向けた取り組み |       |                     |
| 法人名    | 社会福祉法人カメラア会                     | 事業所名  | 特別養護老人ホームカメラア藤沢 SST |
| 発表者    | 中道龍太                            | 共同研究者 | 鈴木愛 平原玲子            |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                        |       |                     |

## I はじめに

2020年6月よりコロナウイルスの影響により通常ショートステイの受け入れが中止となった。2021年6月より通常ショートステイの受け入れを再開したが、2022年は施設内でコロナウイルスクラスターが2度発生、ショートステイの稼働についてはコロナウイルスの影響で難しい状況があった。しかし2023年5月からはコロナウイルスは第5類となり以前の日常を取り戻しつつある。その中でより多くの方に選んで頂けるような、コロナ禍とは異なる取り組みを行っていく必要があると考え今回のテーマ設定となった。

## II 目的

2022年1年を通して目標稼働率である97%の未達の月が7回と多くあり、安定したショートステイの運営が行えていなかった。2023年はショートステイの目標稼働率である97%以上を安定して維持する事を目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年6月1日～2023年5月31日

### 2. 研究対象

ショートステイの営業活動

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

具体的方法

- 1) ショートステイへのニーズを把握。
- 2) 新規居宅介護支援事業所への訪問営業。
- 3) 多職種での訪問営業を実施。

評価尺度

訪問営業実施前後の稼働率や問い合わせ件数の比較を行い効果の検証を実施。

## IV 倫理的配慮

本研究に置いてショートステイ利用者、居宅介護支援事業所が特定されないよう配慮する。

## V 結果

問い合わせ件数が昨年は月平均27件であったが今年に入ってから月平均50件と多くなっている。居宅介護支援事業所からのショートステイご利用の依頼も昨年月平均22事業所から今年に入ってから月平均40件と多くなっている。稼働率についても2023年4月以降97%以上を維持しており6月以降については予測ではあるが100%を超える予測となった。

## VI 考察

訪問営業を行ってから問い合わせ件数が増えており、多職種が実際に居宅介護支援事業所のケアマネジャーに取り組みを伝える事で、カメラア藤沢 SST のショートステイに興味を持って頂く事が出来ている。新規含め、紹介頂く居宅介護支援事業所も増えており、今まで電話やFAXでの営業が中心だった為、顔の見えない不安感があった事が考えられる。今後については営業後に新規利用の方が増えている為、訪問営業は継続していく必要があり、施設の魅力を居宅介護支援事業所へ伝える活動を行っていかねばならない。併せて時代と共に変化するニーズを把握し、多職種へ共有し施設全体で選ばれる施設を目指していかねばならないと考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 藤原智浩,ゼロから始める!法人営業 ずっと勝ち続ける新規開拓営業の新常識,産業能率大学出版部,2023



# 研究発表会

《ROOM 3》

抄録

9月11日(月)



## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 3 】

| 発表時間           |                | 法人            | 題名   | 発表者        | ページ |
|----------------|----------------|---------------|--|------------|-----|
| 1              | 10:00<br>10:15 | 社会福祉法人苗場福祉会   | 色々と迷惑をかけると思いますがよろしくお願ひします<br>～安心できる環境を作る為に～  | 中島剛広       | 53  |
| 2              | 10:15<br>10:30 | 社会福祉法人湖星会     | トイレに行きたい!～希望を叶える関りと QOL の変化～                 | 吉田明日香      | 54  |
| 3              | 10:30<br>10:45 | 医療法人財団百葉の会    | 夢プロを通じて変化のあった一症例<br>～本当にやってみたい趣味活動～          | 増田しずく      | 55  |
| 4              | 10:45<br>11:00 | 医療法人社団緑愛会     | メディエーションの効果～人と人をつなぐ相談員の役割～                   | 石田あゆみ      | 56  |
| 11:00<br>11:10 |                | 講評 (10分)      |  |            |     |
| 11:10<br>11:20 |                | 休憩 (10分)      |  |            |     |
| 5              | 11:20<br>11:35 | 株式会社日本ライフデザイン | 今までの暮らしに戻りたい<br>—当たり前と思っていたことが一変—            | 金丸人巳       | 57  |
| 6              | 11:35<br>11:50 | 医療法人北辰会       | 「地域でつながる・見守る・支えあう」<br>～認知症高齢者夫婦の支援と今後の課題～    | 遠山正希       | 58  |
| 7              | 11:50<br>12:05 | 社会福祉法人湖成会     | 第二の我が家～安心できる毎日～                              | 木村梨乃 日吉真沙彦 | 59  |
| 8              | 12:05<br>12:20 | 社会福祉法人湖星会     | 音楽がもたらす効果 ～フォークソングで気分上々～                     | 武井夕紀       | 60  |
| 12:20<br>12:30 |                | 講評 (10分)      |  |            |     |
| 12:30<br>13:30 |                | 休憩(1時間)       |  |            |     |
| 9              | 13:30<br>13:45 | 医療法人社団平成会     | ～高齢者の在宅を支える～『以前のように動かしたい』                    | 小椋寛幸       | 61  |
| 10             | 13:45<br>14:00 | 社会福祉法人ひがしの会   | 安全なトイレ動作獲得を目指して                              | 植松廉        | 62  |
| 11             | 14:00<br>14:15 | 医療法人社団緑愛会     | トイレでの排泄が心身にもたらす効果                            | 石井智世       | 63  |
| 12             | 14:15<br>14:30 | 医療法人社団平成会     | アイスマッサージ～最期まで安全に食事を摂るために～                    | 鈴木てるみ      | 64  |
| 14:30<br>14:40 |                | 講評 (10分)      |  |            |     |
| 14:40<br>14:50 |                | 休憩 (10分)      |  |            |     |
| 13             | 14:50<br>15:05 | 医療法人社団緑愛会     | 地域との新たな交流に向けて                                | 高橋恵美子      | 65  |
| 14             | 15:05<br>15:20 | 医療法人財団百葉の会    | 人の繋がりが心身の健康に及ぼす影響<br>～地域課題解決に向けたいきいきプラザの挑戦～  | 古水禎        | 66  |
| 15             | 15:20<br>15:35 | 医療法人社団藤友五幸会   | 水分を緑茶から変更することによる利用者の認知機能、健康<br>状態の改善を目指す     | 赤堀愁弥       | 67  |
| 15:35<br>15:45 |                | 講評 (10分)      |  |            |     |
| 15:45<br>15:55 |                | 休憩 (10分)      |  |            |     |
| 16             | 15:55<br>16:10 | 社会福祉法人狭山公樹会   | 食形態変更シートを活用したチームアプローチ<br>～最期まで食べたい物を食べられる為に～ | 野口敦司       | 68  |
| 17             | 16:10<br>16:25 | 社会福祉法人苗場福祉会   | 新型コロナウイルス施設内感染 0 を目指して                       | 鈴木博之       | 69  |
| 18             | 16:25<br>16:40 | 社会福祉法人苗場福祉会   | レクリエーションの充実化                                 | 仲尾次孝輝      | 70  |
| 16:40<br>16:50 |                | 講評 (10分)      |  |            |     |

|        |  |       |                   |
|--------|--|-------|-------------------|
| 題名     | 色々と迷惑をかけると思いますがよろしくお願ひします ～安心できる環境を作る為に～ |       |                   |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会                              | 事業所名  | 特別養護老人ホーム健康倶楽部つどい |
| 発表者    | 中島剛広                                     | 共同研究者 | 福井華代 片山郷未         |
| サービス種別 | 地域密着型介護老人福祉施設                            |       |                   |

## I はじめに

2023年2月5日に入居されたA氏は以前までは在宅サービスを利用して自宅で過ごされていた。入居して1カ月経った頃、A氏の帰宅要求が強くなり、職員に対して暴言や暴力が見られるようになった。昼夜問わず不安が強く、その不安からか食事の摂取が出来ない日が続いた。そこでA氏が安心して過ごせるようにどうしたらいいかとチームで話し合い、取り組んだ事例を報告する。

## II 目的

A施設がA氏にとって安心して過ごせる場所になる

## III 方法

1. 研究期間：2023年3月9日～2023年5月31日

2. 研究対象：A氏 70歳代 女性 要介護4

日常生活度：B1 認知症自立度：IIb

既往歴：レビー小体型認知症 ウェルニッケ脳症  
パーキンソン病 抑うつ 偽性アルドステロン症

3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 居室環境を整備する
- 2) 家族に生活面の支援を依頼する
- 3) BPSD+Qによる前後評価を実施する

## IV 倫理的配慮

本研究の対象者及び家族、職員に個人情報と写真掲載の取り扱いについて口答と書面にて説明し同意を得た。

## V 結果

1. 居室環境の変更を2回行った。2回目に在宅時の居室環境に変更したことで不穏・帰宅要求の回数が大きく減少した。結果は図1に示す通りであった。

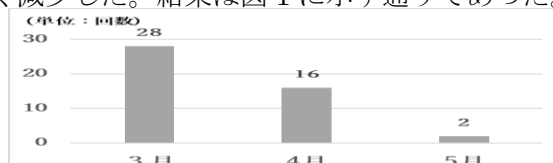


図1：不穏・帰宅要求の回数

2. 週2回の交流(電話と窓越し面会)や定期的な差し入れなど、家族からの支援もあり、食事摂取量が増加した。食事は図2に示す通りであった。

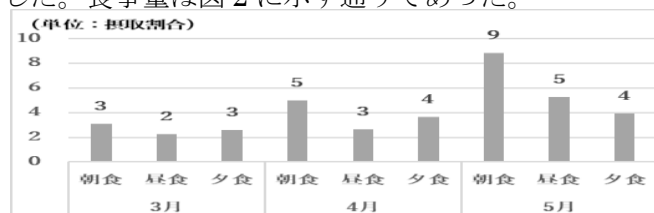


図2：食事の平均摂取量

3. BPSD+Qは重症度52点、負担度49点から重症度、負担度共に5点へと改善があった。

## VI 考察

今回の結果から、A施設がA氏にとって安心して過ごせる場所になるという目的は達成できた。Webサイトのウチシルベによると「新しい環境になると自分の場所を見つけにくく、それがストレスになる為、『自分だけの場所、落ち着ける場所、テリトリーを作ることが大切』<sup>1)</sup>と明言されているように、在宅時の居室環境へ近づけたことで自分の居場所だと認識出来たのではないかと考えられる。この取り組みを通じてA氏に「ここでの生活はどうですか？」と聞くと「色々と迷惑かけるとありますがよろしくお願ひします」という言葉が聞かれた。A氏の安全ばかりを考え、居室環境を変更したことがA氏にとって居心地が悪く、また危険な場所になっていたと思われる。環境の大切さをチームで共有し、今後もより良い暮らしの援助をしていく。

## 【引用・参考文献】

- 1) ウチシルベ, リロケーションダメージを予防, 対処するには, 2016年6月8日, 参照2023年6月5日  
<https://www.osumai-soudan.jp/column/column1296.html>



|               |                              |              |                 |
|---------------|------------------------------|--------------|-----------------|
| <b>題名</b>     | トイレに行きたい！～希望を叶える関りと QOL の変化～ |              |                 |
| <b>法人名</b>    | 社会福祉法人湖星会                    | <b>事業所名</b>  | 特別養護老人ホーム ラスール泉 |
| <b>発表者</b>    | 吉田明日香                        | <b>共同研究者</b> | 根本紗希 佐々木朋美 熊崎由衣 |
| <b>サービス種別</b> | 介護老人福祉施設                     |              |                 |

## I はじめに

骨折により身体機能や活動意欲の低下がみられている認知症の利用者に対し、トイレに行きたいという希望に沿った排泄援助を行う事で身体的精神的な変化が現れるのではないと考えた。そこで他職種と連携し、排泄援助に取り組んだ結果を報告する。

## II 目的

利用者の希望をかなえる関りを行い、生活の質 (Quality of life: 以下 QOL とする) にどのような変化をもたらしたか研究する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年11月～2023年1月

### 2. 研究対象

A氏 (100歳代 女性 要介護5)  
既往歴) 認知症 過活動膀胱 骨折歴あり  
B氏 (90歳代 女性 要介護4)  
既往歴) 認知症 双極性障害 骨折歴あり

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) 機能訓練指導員による生活リハビリの考案、指導
- 2) 介護職員による生活リハビリの実施
- 3) 機能訓練指導員による集団リハビリの実施
- 4) 多職種によるトイレ介助の方法の検討と実施
- 5) 他職種による介入前後での日常生活の変化を観察

## IV 倫理的配慮

この研究に関する目的、取り組み内容を本人及び家族へ説明し同意を得ている

## V 結果

A氏は離床訓練と移乗訓練を取り入れ、約4ヶ月で安定した移乗動作が出来るようになった。トイレでの排泄開始時は、5回/日程度だった失禁が、現在は1回/日程度まで減少している。また、離床時には、職員や他入所者と関わる時間をもち、徐々に他利用者との会

話や笑顔が増えた。さらに、介入前と比べ離床時間が0時間から8時間まで増加し、食事の自己摂取量が49.7%増加した。

B氏は移乗訓練を行い、手すりを使用した軽介助での移乗動作と立位保持が出来るようになった。排泄の訴えがあった際は、自走など自らできることを増やしていき、5ヶ月で失禁率は45%減少した。介入前は易怒的で攻撃性が強かったが、現在は怒りを向けることがほとんど無くなった。他利用者と談笑する時間や歌の会への参加なども増え、一日を通して穏やかに過ごせるようになった。

## VI 考察

排泄行動を維持することは、自尊心を守る上で大切な事柄である。また、認知症の周辺症状は日常生活に大きな影響を与える。遠藤らは、「認知症になったとしても、日常生活の不安を解消できれば、不満→不信→不穏に進行することを食い止めることが出来る」<sup>(1)</sup>と述べている。トイレに行けないという不安を解消することで、認知症の周辺症状が軽減し、QOLに変化をもたらしたと考える。特別養護老人ホームでは日常生活動作の維持と低下の防止が主となり、改善や向上への関りが難しい。しかし、今回の結果から、限られた環境の中でも、利用者が自分らしく過ごせる環境を整え、ケア介入を行っていくことが重要であることを改めて学んだ。今後は、利用者から訴えの多い帰宅願望や不眠に対して、24シートを基にニーズや不安感などを早期に分析していく。また、自己実現欲求を満たすケア介入が出来るよう、アセスメントに関する勉強会を開催しスタッフの育成を行いたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 川畑智, マンガでわかる! 認知症の人が見ている世界, 文響社, 2022, 72



|        |                                 |       |                  |
|--------|---------------------------------|-------|------------------|
| 題名     | 夢プロを通じて変化のあった一症例～本当にやってみたい趣味活動～ |       |                  |
| 法人名    | 医療法人財団百葉の会                      | 事業所名  | デイサービスセンターアルクそてつ |
| 発表者    | 増田しずく                           | 共同研究者 | 柏木佑太             |
| サービス種別 | 通所介護                            |       |                  |

## I はじめに

現在、我が国は「介護予防」が重要視されている。<sup>1)</sup> 堀らは趣味活動が日常生活動作(Activity of Daily Living:以下 ADL とする)や、手段の日常生活動作(Instrumental Activity of Daily Living:以下 IADL とする)に良好な影響が得られる<sup>2)</sup>と発表している。A 施設では「実施をあきらめてしまっている趣味活動」の聞き取りと実施・サポートを行った。この夢プロジェクト活動(以下夢プロと称す)を通じ、意欲が向上され、介護度が改善された B 氏の実例を報告する。

## II 目的

1. 利用者の希望や意向に沿った活動を行い利用者の ADL の向上を目指す。
2. 一症例を通じ、活動を振り返る機会を作る。

## III 方法

1. 研究期間：2022年1月～2023年3月
2. 研究対象：施設利用者 B 氏 80歳代 女性 要介護3 既往歴 腰椎圧迫骨折 生活拠点 娘宅 コミュニケーションに問題がなく、受傷後間もない、夢プロの活動に積極的である B 氏を研究対象とした。

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) 本当にやりたい趣味活動の聴取
- 2) 趣味活動の実施
- 3) 機能的自立度評価法 (Functional Independence Measure : 以下 FIM とする) と介護度の推移
- 4) その他生活の変化の推移

## IV 倫理的配慮

本研究の対象の利用者に、個人情報の取り扱いと発表の主旨を説明し同意を得た。

## V 結果

1. 畑、園芸、工作、手芸に興味がある事が分かった。
2. 畑、園芸、工作、手芸の活動に多く参加して頂いた。(ご利用時毎回 週3回程度)

### 3. 表1 実施前後の FIM と介護度の変化の推移

|     | 実施前(2022年5月) | 実施後(2023年3月) |
|-----|--------------|--------------|
| FIM | 97           | 113          |
| 介護度 | 要介護3         | 要支援1         |

運動項目：セルフケアや移乗動作、移動が向上。

認知項目：社会的認知項目で問題解決が向上。

### 4. その他生活の変化の推移

自ら自宅の花を摘んで押し花にする等のデイサービス以外での活動の幅が広がった。

生活拠点を娘様宅から自宅へ戻る事も達成した。

## VI 考察

夢プロに参加したことにより体力・バランス能力が向上し、ADL 向上、介護度改善に繋がったのではないかと考える。ADL 向上により、本人・家族の不安が軽減したことで生活拠点を娘様宅から自宅へ戻る事も達成することが出来たと考察した。今回の結果より「本当にやってみたい趣味活動」の実施は、介護予防・ADL の向上に効果的ではないかと考えた。

今後の課題は認知症や高次脳機能障害等の利用者や、表出に消極的な利用者に対しての実施である。興味関心チェックシートだけでは「本当にやりたい事」の聞き取りは不十分であり、コミュニケーションに問題のない利用者でも趣味活動について詳細な聞き取りアンケートを要した。表出の難しい利用者には本人への聞き取りだけではなく、家族等の聞き取り、経歴から推測し、利用者全員の「本当にやりたい事」に応え、趣味活動を通じて生きがい作りや活動意欲向上に繋がっていききたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 厚生労働省, 介護保険制度の概要, 2021
- 2) 堀敦志, 介護予防を目的とした高齢者の住環境と ADL・QOL に関する調査研究, 日本建築学会計画系論文集, 620, 2007, 1-7



|        |                            |       |        |
|--------|----------------------------|-------|--------|
| 題名     | メディエーションの効果～人と人をつなぐ相談員の役割～ |       |        |
| 法人名    | 医療法人社団緑愛会                  | 事業所名  | 川西湖山病院 |
| 発表者    | 石田あゆみ                      | 共同研究者 | 川越幸子   |
| サービス種別 | 病院                         |       |        |

## I はじめに

利用者が安心して療養できるように、病院職員と利用者家族は良好な関係性を築くことが重要である。多様な家族がいる中で、常軌を逸した要求をされたり威圧的な態度に戸惑う場面もある。今回、家族との関係性構築に苦慮した事例において、関係改善に大きな効果が得られたメディエーション活用の取り組みについて報告する。

## II 目的

関係性構築に苦慮する家族との対応にメディエーションを活用し、関係性再構築の有効な手段となるよう他の職種職員に水平展開する。

## III 方法

1. 研究期間：2021年8月1日～2023年6月2日

2. 研究対象：病棟職員（15名）

利用者A氏の家族B氏

3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 家族の特徴・来院日時・要望内容を情報収集
- 2) 対応時チェックポイントの可視化
- 3) 病棟職員と連携し家族対応
- 4) リフレーミングを活用
- 5) 病棟職員へのアンケート
- 6) 家族B氏の満足度確認（聞き取り調査）

## IV 倫理的配慮

研究対象家族には、研究目的、個人情報保護について口頭で説明し同意を得た。

## V 結果

1)～4)については、家族の特徴・要望を情報収集し、チェックポイントを確認してから対応するようになった。相談員が一緒に対応することで、職員・家族の安心感につながった。リフレーミングを活用した事で、家族に対する職員の印象も少し変化した。

## 5) 表1 病棟職員へのアンケート

|                   |                  |                   |            |           |
|-------------------|------------------|-------------------|------------|-----------|
| 1. 相談員同席で安心感はあるか？ | はい               | 100%              | いいえ        | 0%        |
| 2. 家族と話しやすくなったか？  | はい               | 100%              | いいえ        | 0%        |
| 3. ポイントが分かりやすいか？  | はい               | 87%               | いいえ        | 13%       |
| 4. 家族の印象は改善したか？   | 良い<br>変化なし<br>不明 | 13%<br>33%<br>20% | 少し改善<br>悪化 | 34%<br>0% |
| 5. 家族との関係性は改善したか？ | はい<br>不明         | 46%<br>47%        | いいえ        | 7%        |

## 6) 家族B氏の満足度確認

「相談員が関わり助かっている。ただ洗濯物の受渡しをするだけでなく、話しやすくなった。クレームとして捉えるか意見として捉えるかの違いだと思う」

## VI 考察

相談員が意識・関わり方・伝え方を変えることで、職員や家族の受け止め方・行動にも変化が生じた。この事から、困難ケースの関係性構築にはメディエーションが有効であったと考える。関係性構築のためには、家族が繰り返し訴える要望は最重要課題であることを認識し、職員で情報共有し、ポイントを把握した上で家族対応することは不可欠である。また、困難ケースは一人ではなく、複数で連携対応することが大事である。取り組みの結果、病棟職員も事前準備をしたことで安心して対応できるようになり、家族の満足度・信頼度も高まった。この事例を通して、怖く苦手な家族に関わり、家族や病棟職員双方の思いを引き出し、理解した上で対応することは大変であったが、相談員としての役割を再認識することが出来た。家族によっては、対応者によって態度が変わることもあるため、個別の対策が必要になる場合もある。これからもケースに真摯に向き合い、メディエーションを活用し関係性構築が確かなものになるよう取り組んでいきたい。

## 【引用・参考文献】

- 1) 外岡潤, 介護トラブル相談必携, 民事法研究会, 2015, 60-100
- 2) 荒神裕之, 和田仁孝, 医療メディエーション, 日本内科学会雑誌, 101, 8, 2012, 2360-2366





|        |                               |       |                |
|--------|-------------------------------|-------|----------------|
| 題名     | 今までのくらしに戻りたい ー当たり前とっていたことが一変ー |       |                |
| 法人名    | 株式会社日本ライフデザイン                 | 事業所名  | ナナーラレンタルステーション |
| 発表者    | 金丸人巳                          | 共同研究者 | 荒木慶子           |
| サービス種別 | 福祉用具                          |       |                |

## I はじめに

40歳代に交通事故にあい、手と足に障害が残った。定年退職後はほぼ外出はせず自宅で生活していた。両手の拘縮や歩行が不自由で室内での移動も壁伝いに行っていたが70歳代の時にリビングで転倒し大腿部頸部骨折し自宅療養となる。現在リビングでほとんどの時間を過ごし昼夜とも寝起き動作、トイレは奥様に木製いすを押しもらい移動するなど、ご本人・ご家族とも大変苦勞をされている。

福祉用具で少しでも生活改善のお手伝いをしたい。

## II 目的

安全・安楽に移動ができること。

ご自身で行動ができ自信を回復させる。

常態化しているご家族の介護負担を軽減する。

自宅での生活を以前のように復帰させる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年11月～2023年7月

### 2. 研究対象

利用者：A氏（70歳代 男性）

要介護4 障害者4級

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 就寝：特殊寝台、特殊寝台付属品の使用

⇒起居動作が安全・安楽に行えるか。

2) 移動：歩行器、車いす、手すりの導入

⇒移動が安全・安楽に行えるか。

3) 排泄：トイレ内手すり配置

ポータブルトイレ利用。

⇒自身で排泄が行えるか。

以上によりご家族の負担も軽減・改善ができるか。

## IV 倫理的配慮

ご家族にチームケア学会で研究事例発表としてのみ使用する旨を説明して許可をいただく。

## V 結果

1. 就寝については特殊寝台及び特殊寝台付属品を活用して寝起きが安楽に行えるようになった。
2. 移動については通院やデイケア等外出時は送迎のサービスを受けながら車いす、スロープを用いて行えるようになった。また室内での移動はレンタルの手すりやご本人の意向で以前通り木製いすを滑らせながら行っていたが、徐々に患部が改善してきており今年に入ってから僅かな距離であれば伝い歩きができるようになり、4月に住宅改修で廊下に手すりを設置してご自身で行えるようになった。
3. 排泄についてはポータブルトイレはご本人の拒否が強くご家族も否定的だった為方法から除外。トイレを使用する事とした。誘導されて立ち座りの際にトイレ内手すりを当初、レンタルで利用されていたがこちらも住宅改修で手すりを設置した。

これらを通してご本人も精神的にも肉体的にも回復傾向にあり、またご家族も心労・肉体的負担が軽減された。

## VI 考察

ご本人やその関係者（主に家族）の住環境や意向を充分傾聴・考慮して、ケアマネジャー以下各種専門職担当者と連携のうえ最終的にこのような結果が得られた。これからも実践経験と用具の知識を積み重ねて利用者とその関係者を少しでも支えていけるようになりたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 福祉用具専門相談員研修テキスト, 中央法規出版株式会社, 2015





|        |                                       |       |               |
|--------|---------------------------------------|-------|---------------|
| 題名     | 「地域でつながる・見守る・支えあう」～認知症高齢者夫婦の支援と今後の課題～ |       |               |
| 法人名    | 医療法人北辰会                               | 事業所名  | 居宅介護支援事業所みらいあ |
| 発表者    | 遠山正希                                  | 共同研究者 | 上江洲弓恵 市川美代子   |
| サービス種別 | 居宅介護支援                                |       |               |

## I はじめに

近年高齢化が進み、独居・老々・認々・8050・孤立等、見守りや支援が必要な世帯が増加している。今回、以前から訴えが多く対応に苦慮していた高齢者夫婦の事例について、ケアマネジャー2人体制で介入し在宅・地域・施設で連携を図った取り組みを振り返り今後の課題について検討した。

## II 目的

認知症の方の支援について学ぶことでケアマネジメントの質の向上を図り、今後更に増えていく認知症の事例にも適切な支援を行い実践に活かすことを目的とした。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年10月1日～2023年4月30日

### 2. 研究対象

妻：80歳代 要介護1 サービス利用なし

[疾患] 認知症疑、不安神経症、高血圧症

認知症高齢者の日常生活自立度：IIa

夫：80歳代 要介護2

通所介護、訪問看護利用

[疾患] 2型糖尿病、パーキンソン症候群

認知症高齢者の日常生活自立度：IIa

家族構成：夫婦2人暮らし

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) ケアマネジャー2人体制（2022年10月～）

2) 毎月事業所内で認知症勉強会・事例検討

3) 多職種カンファレンス実施、地域ケア会議開催

評価尺度：研究前後の利用者の状態、生活状況を比較

## IV 倫理的配慮

本研究の実施にあたって、法人倫理委員会の審査・承認を得た。

## V 結果

1. 1人対応時は、集中的な電話等にかなり時間をとられたが、2人体制では業務や精神的負担が半分に減った。また、医療系・福祉系各々の強みや経験スキルを活かし、受診同行・不隠時の対応等分担し、無理強ひせず上手く促しと傾聴を行った。

2. 認知症勉強会では動画で様々な場面の対応を学び、事例検討では適切なケアマネジメント手法を活用しアセスメント・ケアプラン見直しを行った。

3. 入所前後の多職種カンファレンスでは事業所間の情報共有、方向性の確認、対応方法の統一を行なった。施設カンファレンスへ参加し、施設が安心できる居場所になるよう努めた。妻が退所し独居となった時には地域ケア会議で役割分担や、市内で使用している電子@連絡帳システムで安否確認・見守り体制を整えた。入所を機に車を廃車し、施設生活を体験し、結果的に退所から訪問看護利用につながった。気分には波があり訪問看護の拒否もあったが、4月現在、法人内外・地域で関わりながら夫婦で訪問看護、夫は通所介護、配食を利用し在宅生活を送っている。

## VI 考察

大橋らは、「職員の認知症に関する知識や対応の仕方も重要であり、対応方法を多職種間で共有していくことが重要である」と考える<sup>1)</sup>と述べられている。2人体制や地域ケア会議等、多職種から地域へつながり広い視野をもって関わることで安心してチームで見守ることができた。今後の課題として、認知症の困難事例では迅速に多職種で連携をとり適切な機関へつなげて関わるような支援体制作りが重要となる。

### 【引用・参考文献】

1) 大橋珠紀, 佐藤一二美, くり返し訴えのある認知症高齢者への対応, 日本看護学会論文集 老年看護, 40, 2010, 57-59



|        |                 |       |                |
|--------|-----------------|-------|----------------|
| 題名     | 第二の我が家～安心できる毎日～ |       |                |
| 法人名    | 社会福祉法人湖成会       | 事業所名  | 多機能ホーム橙        |
| 発表者    | 木村梨乃 日吉真沙彦      | 共同研究者 | 上野聡 小林千治 青崎麻里亜 |
| サービス種別 | 認知症対応型共同生活介護    |       |                |

## I はじめに

我が国の認知症者は2025年に700万人になると予想されている。認知症による行方不明者は年々増加し、17,656人にまで達している。だが、この人数は警察に行方不明者届が出された人に限り、実際はもっと多くの方が行方不明者になっていると考えられる。

A氏は自宅にいたころから行方不明になることがあり、都度警察に保護をされていた。このことを不安に思った家族の思いで2023年2月にB施設へ入居となる。しかし、同年4月に施設より行方が分からなくなり3時間後に自宅で発見される。翌日、職員会議にてケアの見直しを行い取り組んだことを報告する。

## II 目的

新たな住まいとして居心地の良い環境、生きがいのある生活。「B施設で安心して暮らせる」と思っていたことを目指す。又、職員が一人の利用者に対しチームとして何ができ、何をすべきなのかを検証、考察していく。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年4月4日～2023年6月30日

### 2. 研究対象

A氏 70歳代男性 要介護1  
アルツハイマー型認知症 壮健

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) キーパーソン以外へのご家族へのアセスメントを実施。
- 2) 帰りたいと訴えがあった時の対応の検討。
- 3) ケアマッピングという手法を用いて職員の関りを見直す
- 4) できることできないことの把握。本人のB施設での役割を日課に位置付ける。

## IV 倫理的配慮

ご家族には、本研究の目的の趣旨を説明し個人情報や写真の使用の同意をいただいている。

## V 結果

1. アセスメントより自宅に近い居室の環境づくりや自宅によく読まれていた本をご家族にもってきていただいた。
2. 帰りたいという訴えがあった時にご本人が何を不安に感じ、何をしたいのかがより明確になった。
3. 散歩や草取りを午前の日課とした結果、帰りたいという訴えから外への関心が変わった。
4. 無関心と思っていた家事仕事も他の利用者とコミュニケーションを取りながら、モップ掛けや洗濯物干しなどを行う事を日課として取り入れた。

## VI 考察

私たちは、離設の事故をきっかけに個別の関わりが薄いことやA氏に対して、職員が苦手意識を持っていることが明白になった。「家に帰りたい」という言葉がただ自宅に帰るという意味だけではなく、家族と会えない寂しさや庭いじりができないことの喪失感から来る想いということを知り関わり方の見直しが行えた。今後の課題として、他利用者に対しても生活の中での楽しみや役割、生きがいをチームで考える為、アセスメントシートの改善、再アセスメントの実施、ケアマッピングという手法を用いて関わり方の見直しを行い、おひとりお一人に合わせたオーダーケアを実践していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 地方独立行政法人東京健康長寿医療センター研究所, 認知症による行方不明—いのちを守るために必要なこと—, 東京都健康長寿医療センター研究所, 参照 2023年5月21日,  
[https://www.tmghig.jp/research/publication/yu\\_kuefumei/](https://www.tmghig.jp/research/publication/yu_kuefumei/)



|        |                          |       |           |
|--------|--------------------------|-------|-----------|
| 題名     | 音楽がもたらす効果 ～フォークソングで気分上々～ |       |           |
| 法人名    | 社会福祉法人湖星会                | 事業所名  | ラスール苗穂    |
| 発表者    | 武井夕紀                     | 共同研究者 | 古川正浩 山上梨乃 |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                 |       |           |

## I はじめに

若年性認知症であるA氏は日常生活の中のいろいろなことができなくなっていた。その中でも特に入浴は拒否が強く「お風呂」というワードを聞くだけで不機嫌となり、スタッフのストレスにもなっていた。そこで職員も本人もストレスなく入浴することはできないかと考え、音楽を利用することで限られた時間の中でも清潔の保持だけでなく、リラックスして入浴自体を楽しむことができるようになった。

## II 目的

若年性認知症で拒否の強い入居者が拒否なく楽しんで入浴ができるようになる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年10月1日～2023年4月15日

2. 研究対象 A氏 70歳代 男性 要介護4 認知症自立度 III b

既往歴：若年性アルツハイマー型認知症

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 家族の協力を得て本人の好きなフォークソングを用意してもらう。
- 2) 「お風呂」というワードは使わない。
- 3) 浴室から音楽を流す。
- 4) 「カラオケに行きましょう」と誘う。
- 5) 音楽をかける前後で入浴ができた回数を比較する。

## IV 倫理的配慮

家族には本研究の目的の趣旨を説明し個人情報や写真の使用の同意を得ている。利益相反に値する企業などはなし。

## V 結果

何とか入浴させようと男性の介護職員が、やや強引に入浴していた頃は拒否が強く、うまく入浴ができて、すぐ上がってしまいその後も不快な思いだけが強く

残っていた。しかし、お風呂からフォークソングを流し「カラオケに行こう」と誘導することでスムーズに入浴することができ、今では湯船につかり、一緒に歌を歌うまでになった。入浴後も「気持ちよかった」という快の経験が残っていることが表情からくみ取ることができた。

## VI 考察

好きだった曲を流すことは、リラクゼーション効果・回想の隆起（音楽を聴くことで楽しかった時代の気分に入る）音楽に没頭することでドーパミンが分泌されることに繋がり「音楽とお風呂でリフレッシュから引用」楽しさが得られたのではないかと。入浴を単に清潔を保持する機会とするだけでなく音楽をかけることで限られた時間の中でもリラックスすることができ「気持ちよかった」という気分が上がることができ、「また入りたい」という気持ちにつながったのではないかと。また、今回の成功体験が他の人にもやってみたいという職員の意欲にも繋がり、それまで入浴に誘うと「今日はいいや」とやんわりと拒絶していた他の入居者からも「いつ入れるの」「また風呂入れてくれ」という言葉が聞かれるようになっている。今後は音楽にとどまらず、テレビを見ながら、本を読みながらなど『ながら入浴』を取り入れることで、職員にも入居者にも笑顔をもたらすことができるのではないかと考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 若年性認知症とは, フランスベッドメディカル営業推進部, 参照 2023年8月,  
[https://medical.francebed.co.jp/special/column/24\\_dementia09.php](https://medical.francebed.co.jp/special/column/24_dementia09.php)



|        |                           |       |                    |
|--------|---------------------------|-------|--------------------|
| 題名     | ～高齢者の在宅を支える～『以前のように動かしたい』 |       |                    |
| 法人名    | 医療法人社団平成会                 | 事業所名  | 小規模多機能型居宅介護アルコート並木 |
| 発表者    | 小椋寛幸                      | 共同研究者 | 高橋悟                |
| サービス種別 | 小規模多機能型居宅介護               |       |                    |

## I はじめに

A氏は、2021年の7月頃に脳出血にて左上下肢麻痺となる。B施設の利用を開始した中でA氏から「麻痺した側を自分の意志で動かせるようになりたい。」との意欲が聞かれ、ご家族からも「老健からはこれ以上の改善は見込めないと言われたが、本人のやりたい事を尊重したい」とお話しがあり、A氏とご家族の想いを叶えたいとの思いから取り組みを始める。

## II 目的

A氏のActivities of Daily Living(以下ADL)の維持もしくは、現在より向上する事。

在宅生活を継続する上でのご家族の負担軽減を図る。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年2月1日～2023年6月末日

### 2. 研究対象

A氏(女性)80歳代 要介護度5

被殻出血による左片麻痺。

障害高齢者の日常生活自立度 B1

認知症高齢者の日常生活自立度 IIIa

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) の歩行訓練により、利用開始当初から6月の歩行距離を評価する。(1回/日)
- 2) A氏の体調に合わせて階段の昇り降りや膝から先を上げる筋トレを行い階段昇降の段数を評価する。(1回/日)
- 3) 【サービスの調整】  
専門職のリハビリも受けもつと以前のように動かしたいとの思いもあり、訪問リハビリを調整し利用開始。6月中旬～開始。

## IV 倫理的配慮

本研究において、個人情報利用に関する同意を双方に説明し了承を得ている。

## V 結果

訓練に積極的に参加された事により、当初の歩行状態は右足、左足で筋力の差や麻痺の影響から、ふらつきや膝折れも見られる時あったが、利用当初より筋力も上がり歩行状態も安定している。歩行距離と階段昇降の状態については表1に示す。

表1 歩行距離と階段昇降の状態

|              | 歩行距離              | 階段昇降                |
|--------------|-------------------|---------------------|
| 利用当初<br>(2月) | 5m程<br>ふらつき、膝折れ多い | 1段<br>突っ掛かりあり       |
| 6月           | 30m程<br>安定し行えている  | 5段<br>突っ掛かりなく行えている。 |

ADL向上に繋がり、ご家族から「車への乗り降りがスムーズに行けて喜んでいました。今後も宜しくお願いします。」とのお言葉を頂いた。

## VI 考察

小規模多機能では生活をする場の為、リハビリに特化している訳ではないが、A氏の強い思いにご家族、職員全体が寄り添い、出来ることを取り組んだ結果がADLの向上に繋がった事と言える。また、出来ることが増えた事や訪問リハビリの利用が6月より開始となることになり、更にA氏の意欲に繋がっている。今後も出来ることは限られており、A氏は装具を外し一人でも歩くことが目標だが、老健からもこれ以上の改善は見込めないとされたことを勘案し、A氏の自尊心に配慮しながら出来ないという固定概念にとらわれず、利用者の思いに寄り添える施設を目指していく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 川平和美他,脳卒中片痺患者への麻痺回復と運動再学習を促進するリハビリテーション,バイオメカニズム学会誌, 31, 4, 2007, 201-205





|        |                 |       |              |
|--------|-----------------|-------|--------------|
| 題名     | 安全なトイレ動作獲得を目指して |       |              |
| 法人名    | 社会福祉法人ひがしの会     | 事業所名  | 特別養護老人ホームみゆき |
| 発表者    | 植松廉             | 共同研究者 | 西野浩二         |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設        |       |              |

## I はじめに

当施設を利用しているA氏は、2022年11月まで歩行器を使用して生活していたが、2022年12月に体調を崩し下肢筋力が低下し車椅子生活となった。

現在トイレ動作は軽介助だが、立位が安定せず膝折れする事も時にみられる。

その為、安全なトイレ動作獲得を目指す必要があった。

## II 目的

A氏の立位を安定させ安全なトイレ動作獲得を目指す為に本研究を行った。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年5月1日～6月30日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 女性 要介護4

コロナウイルス陽性、肺炎（2022年12月発症）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

機能訓練指導員による週1回の個別機能訓練と、週1回の集団体操、介護職員による週1回の歩行器を使用した歩行訓練（本人様の下肢の状態等によっては起立訓練等に内容を変更し実施）を当初の訓練計画として立てた。

5月半ばより左の外反母趾に加えて、左母趾の爪に白癬が発生。治療の為靴からスリッパ対応となる。

左母趾に痛みもみられた為、歩行訓練は左母趾の治療が終わるまでは中止とし、起立訓練中心の内容に変更を行った。

## IV 倫理的配慮

対象となったA氏とご家族には本研究の説明を口頭と書面にて行い、同意を得た。

## V 結果

### 1. 下肢筋力（徒手筋力検査で実施）

表1 徒手筋力検査結果

| 大腿四頭筋筋力    | 右 | 左 |
|------------|---|---|
| 2023年5月2日  | 3 | 3 |
| 2023年6月16日 | 4 | 3 |

### 2. 立位保持時間（両上肢把持で実施）

2023年5月2日時点：最大10秒

2023年6月16日時点：最大15秒

### 3. FIM（機能的自立度評価法）

2023年5月2日時点：

トイレ動作 2点（最大介助）

移乗動作 3点（中等度介助）

2023年6月16日時点：

トイレ動作 2点（最大介助）

移乗動作 3点（中等度介助）

### 4. 膝折れ

2023年6月16日時点でもトイレでの立位保持の場面で時にみられる。

## VI 考察

2023年6月16日時点でも時に膝折れがみられているが、右下肢筋力の向上と立位保持時間の延長がみられ、下肢筋力は向上している。

安全なトイレ動作獲得を目指すという事については、FIMの点数から変化がみられていない事から、能力向上には至っていない。

A氏が外反母趾と白癬の治療が必要となった為、歩行訓練の実施が十分出来なかった事が能力向上を妨げる一因になったのではないと思われる。

A氏の下肢筋力の維持、向上、安全なトイレ動作獲得の為、今後も訓練継続は必要である。

### 【引用・参考文献】

- 1) 滝音美里他,高齢者における排泄動作の自立度と下肢筋力の関係性,目白大学健康科学研究,4,2011,9-14



|        |                   |       |                |
|--------|-------------------|-------|----------------|
| 題名     | トイレでの排泄が心身にもたらす効果 |       |                |
| 法人名    | 医療法人社団緑愛会         | 事業所名  | 介護老人保健施設かがやきの丘 |
| 発表者    | 石井智世              | 共同研究者 | 木村沙智           |
| サービス種別 | 介護老人保健施設          |       |                |

## I はじめに

B施設 C棟は認知症専門棟であるが、最期までトイレで排泄する事を大切にしている部署である。

A氏は2022年9月21日に入所された。尿閉があり、尿道カテーテルが留置されている。入所時より強い介護抵抗やオムツいじり等の不潔行為が続いていた。

「トイレに行きたい」とA氏が訴えたことからトイレ誘導を実施し、生活の質(Quality Of Life:以下QOL)向上に繋がった事例を報告する。

## II 目的

「トイレで排泄がしたい」という希望を叶え、A氏のQOLが向上できる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年9月27日～2023年5月31日

### 2. 研究対象

氏名:A氏(100歳代 女性) 要介護5

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) 定時・訴え時にトイレ誘導実施と排泄状況の確認
- 2) 日常生活動作(Activities of Daily Living:以下ADL) 評価の変化(Barthel Index:以下BIを用いる)
- 3) QOLの変化(認知症高齢者の健康関連QOL評価短縮版:以下short QOL-Dを用いる)

## IV 倫理的配慮

ご家族に研究目的と個人情報保護、研究によって不利益や負担が生じない事を口頭にて説明し、同意を得た。

## V 結果

### 1. 表1 トイレ誘導開始前と現在の比較(1カ月の平均)

|          | 2022年9月   | 2023年5月   |
|----------|-----------|-----------|
| オムツいじり回数 | 2回/日      | 0回/日      |
| 衣類を汚す回数  | 10回以上/月   | 0~1回/月    |
| 便性状      | 軟便 少量     | 普通便 中等量   |
| 尿量       | 1,100CC/日 | 1,900CC/日 |

トイレの定時誘導について立位の不安定さがあるも、2人介助でのトイレ誘導を実施。誘導開始2日後から定時誘導時に自排便あり。1カ月後には自ら便意を訴えトイレにて排便できるようになった。

2. 排泄はトイレにて可能となり、食事は自力摂取が可能となった。入浴の介護抵抗がなくなった。以上の事から、ADLの向上が図られたと考えられる。

表2 ADLの評価の変化

|    | 2022年9月 | 2023年5月 |
|----|---------|---------|
| BI | 10点     | 25点     |

3. 夜間良眠となり居室で眠れるようになった。余暇活動も顔なじみの方と談話する等、QOL向上が図られたと考えられる。

表3 QOLの変化

|               | 2022年9月 | 2023年5月 |
|---------------|---------|---------|
| short QOL - D | 15点     | 30点     |

## VI 考察

近年、排泄機能障害に対する治療の進歩により、適切に治療すれば改善できる排泄障害が多くなっており、ケアが必要なものは適切にケアすることで、排泄障害が改善され高齢者のQOLが高まることが期待できると言われている。今回A氏に対し適切なケアについて考え、取り組んだ事で結果としてQOLの向上に繋げる事ができた。「尿道カテーテルが留置されているから…」と決めつけケアを行うのではなく、今後も個別ケアを大切に、その方にとってどのようなケアが適しているのかを考えながらチーム一丸となり取り組んでいきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 高植幸子, 林智世, 金原弘幸, 吉田和枝, 三重県における高齢者の排泄ケアの実態調査, 三重看護学誌 9, 3, 2007, 111-112





|        |                           |       |              |
|--------|---------------------------|-------|--------------|
| 題名     | アイスマッサージ～最期まで安全に食事を摂るために～ |       |              |
| 法人名    | 医療法人社団平成会                 | 事業所名  | グループホーム「希の家」 |
| 発表者    | 鈴木てるみ                     | 共同研究者 | Aユニット職員      |
| サービス種別 | 認知症対応型共同生活介護              |       |              |

## I はじめに

A氏は入所されてから17年目となった。入所当時は初期の認知症であったが、現在は寝たきりの状態で、末期の認知症である。A氏は閉眼していることがほとんどで、食事の際は口の中に溜め込んだまま飲み込めないことや、むせることが増えており、誤嚥や窒息の危険があった。A氏が安全に食事を摂ることができ、最期まで自事業所で過ごしていただくために、私たちに出来ることはないかと考えるきっかけとなった。

## II 目的

食事前にアイスマッサージを実施することで、食事摂取時にしっかりと覚醒することができ、誤嚥や窒息することなく食事を安全に摂ることができる。

## III 方法

### 1. 研究期間

令和5年6月8日～令和5年6月21日

### 2. 研究対象

A氏 女性 80歳代 要介護5

既往歴：アルツハイマー型認知症、高血圧、白内障

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 食事チェック表の実施。

毎食時の覚醒状態・飲み込み・むせ込み有無について、チェック表を作成し食事の状況を確認する。

2) アイスマッサージの施行。

食前に凍らせたガーゼで口腔内のアイスマッサージを実施し、食事摂取時の、覚醒状態・飲み込み・むせ込み有無を確認する。アイスマッサージの有無で比較することで、取り組みの効果を評価する。

## IV 倫理的配慮

写真を掲載するにあたり、利用者ご本人、御家族様より了承を得ている。

## V 結果

数値に大きな変化はないが、実施時ははっきりと覚

醒される様子が見られた。マッサージ後、以前は見られることはなかった舌で唇を舐める動作や口を大きく開ける動作が見られた。口の中に溜め込むことが減り飲み込みがスムーズな様子も見られた。むせ込みの頻度は変化が見られなかった。

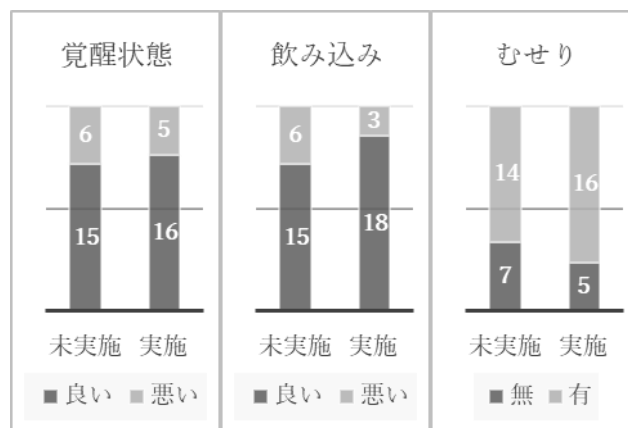


図1 アイスマッサージ実施の比較(食事21回)

## VI 考察

アイスマッサージにてしっかりと覚醒することができ、窒息のリスクは軽減されたと考えられる。マッサージが刺激となり、口の動きが良くなり飲み込みがスムーズになったと考えられる。むせ込みの頻度はほとんど変化が見られなかった為、覚醒状態以外でむせ込みの要因があると考えられる。基本的な食事の姿勢や食事形態など再度見直し、安全に食事を摂ることができるよう継続して取り組んでいきたい。

### 【引用・参考文献】

1) 野原幹司, 認知症患者さんの病態別食支援—安全に最期まで食べられるための道標, メディカ出版, 2018, 128-138

2) Web ページ: ケア・対処・訓練法 Q21 のどのアイスマッサージとは? | 日医工株式会社 (nichiiko.co.jp), 閲覧日参照 2023年6月1日, <https://www.nichiiko.co.jp/medicine/swallow/swallow21.php>



|        |               |       |            |
|--------|---------------|-------|------------|
| 題名     | 地域との新たな交流に向けて |       |            |
| 法人名    | 医療法人社団緑愛会     | 事業所名  | グループホームゆらり |
| 発表者    | 高橋恵美子         | 共同研究者 | 須田敬        |
| サービス種別 | 認知症対応型共同生活介護  |       |            |

## I はじめに

当施設は開設当初より地域交流が盛んで、年間行事に地域住民の参加はもちろん、地域防災なども相互に連携できる関係性が施設の特徴の一つとなっていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の為、2020年から地域交流の機会が失われていた。グループホームとして「地域共生」という役割も踏まえ、感染症対策を行いながら、新たな地域交流の形を検討、実施した。失われた「地域交流」の再開を目指した取り組みを報告する。

## II 目的

新型コロナウイルス感染対策を行いながら、地域と施設、住民と利用者の交流の再開を目指す。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年10月22日～2023年6月19日

### 2. 研究対象

当施設利用者 18名

A市立B中学校 美術部員 11名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 地域活動推進委員会会議、各ユニット会議にて「物を介した交流方法」を検討する。

2) B中学校とのメールによる情報交換により、相互の要望を確認し、交流方法の具体案の検討を行う。

3) 計画を立案し、当施設、B中学校にて作成を行う。

## IV 倫理的配慮・利益相反

倫理的配慮について対象者へ口頭と書面にて説明し、同意を得た。チームケア学会利益相反開示について、演題発表に関連し、発表者全員について開示すべき利益相反関係にある企業等はなし。

## V 結果

1) 2) 「物を介した交流」として、当施設・B中学校でそれぞれ役に立つものは何かの視点で検討し、施

設からは雑巾を寄付し、中学校からは塗り絵の下絵を提供頂くことに決定した。

3) 雑巾は、10月までに100枚の寄付を目標とし、利用者一人が一月に10枚作成できるよう取り組みを開始し、6月19日現在、合計54枚作成した。毎日、雑巾を縫うことが利用者の楽しみ・日課となり、生活意欲の向上に繋がっている。B中学校美術部員による塗り絵の下絵を利用者が色付けすることで、共同作品が完成し、中学生から施設や認知症についての質問を受けることが増え、高齢者福祉に対する興味理解へのきっかけとなった。

## VI 考察

今回の取り組みを通し、人と人との直接的な交流に限らない「物を介した交流」という地域交流の新しい形を築くことができた。コロナ禍以降、高齢者施設においては、地域交流が低迷し、オンライン交流等新たな形も確立されてきているが、今回の物を介した交流だからこそ、作品から伝わる温かみや、自分の作った作品がどのように使用されるのかという創造力、長期的な生きがいや楽しみといった多くの効果が期待できることが分かった。今後、作品が完成した際には、A市の交流スペースへの展示を検討しており、地域や若い世代へ向けての認知症の理解や、高齢者福祉への興味を持って頂くきっかけ作りに繋がりたいと考えている。また、中学校だけでなく、地域の幼児施設等、さらに対象を広げる事でまた新たな地域交流に発展できるよう取り組みを継続していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 林邦彦他, 認知症グループホームにおける地域貢献評価尺度・地域交流評価尺度の信頼性と妥当性, 認知症ケア研究誌, 3, 2019, 73-74



|        |  |       |              |
|--------|--|-------|--------------|
| 題名     | 人の繋がりが心身の健康に及ぼす影響 ～地域課題解決に向けたいきいきプラザの挑戦～ |       |              |
| 法人名    | 医療法人財団百葉の会                               | 事業所名  | 港区立三田いきいきプラザ |
| 発表者    | 古水 禎                                     | 共同研究者 | 菊地智洋 徳永有光子   |
| サービス種別 | いきいきプラザ                                  |       |              |

## I はじめに

いきいきプラザは、高齢者の学習活動・介護予防・健康づくり・交流の場を提供する公共施設である。近年のコロナ禍の影響から、高齢者の社会参加減少が顕著に現れているが、社会参加減少と心身の機能低下の関連性について「社会との繋がりを失うことがフレイルの最初の入り口だ」と飯島らは指摘している<sup>1)</sup>。このことから、高齢者の社会参加減少を地域課題と捉え、課題改善に向け各部署の専門性を活用し多様な事業を実施した。これをテーマとして研究を行い、その過程と結果をここに報告する。

## II 目的

高齢者が、社会参加の助長、自主的な活動の推進、心身の健康促進等に繋がる事業に参加したことで、心身機能にどのような変化が現れたか考察する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年10月～2023年3月

### 2. 研究対象

A 事業所の利用者 100名・B 地区在住の高齢者 30名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

地域課題改善に向けて、以下内容の事業を実施した。

1) 社会参加の助長となる、趣味・教養・学び等がテーマの各種事業を開催し、参加者に心身の健康状態に関するアンケート調査を実施した。

2) 男性高齢者の他者との交流増加と栄養改善を目的とした、自主活動料理グループの立ち上げ、及び活動のサポートを実施した。

3) 体力低下等が原因で施設に来館できない高齢者を対象に、地域社会資源と協働しフレイル改善出前講座を開催し、参加者を対象に心身機能変化に関する実態調査を実施した。

## IV 倫理的配慮

写真、及びアンケート結果は、個人が特定されないことを口頭にて説明し、同意を得て使用している。

## V 結果

1. 調査によると、コロナ禍による社会参加活動自粛時の心境について「人との交流が減少し寂しかった」という回答が全体の5割で、最も多かった。活動再開後に各種事業に参加したことで「人との交流機会が生まれた喜び」についての回答が全体の4割となった。

2. 自主活動グループが発足され、活動を通じ「料理を上手に作れた」という成功体験が得られた。これにより自己効力感が高まり、社会参加への意欲向上から新たな交流が生まれ、栄養改善と合わせて心身の健康への繋がりが見られた。

3. コロナ禍に実施した調査では、対象の30名全員が、他者との交流が減少し体力や気力の低下を実感していると答えた。また、全員が事業に参加することで上述した点の改善があったと答えた。

## VI 考察

今回の研究結果から、人や社会との繋がりと、心身機能の変化は深い関わりがあり、低下した場合は大きな地域課題となることがわかった。この課題を地域と共に解決に至ることが当施設の役割の一つである。そのためには、地域高齢者が人や社会との繋がりを持ち続け、社会的孤立を生まない環境づくりが重要だと考える。今後も時代のニーズを見極め、QOL向上や自主的な活動の推進、心身機能の向上を図る事業を法人内各事業所や外部社会資源と連携を図り、職員が一体となり創出していく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 公益財団法人長寿科学振興財団, フレイルと社会参加, 2021年10月29日, 参照2023年3月1日, <https://www.tyojyu.or.jp/net/byouki/frailty/koreisha-shakaisanka-kenkochoju.html>



|        |                                      |       |                |
|--------|--------------------------------------|-------|----------------|
| 題名     | 水分を緑茶から変更することによる利用者の認知機能、健康状態の改善を目指す |       |                |
| 法人名    | 医療法人社団藤友五幸会                          | 事業所名  | 介護老人保健施設五洋の里   |
| 発表者    | 赤堀愁弥                                 | 共同研究者 | 森下光 瀧川ひとみ 児玉紗奈 |
| サービス種別 | 介護老人保健施設                             |       |                |

## I はじめに

当施設において新型コロナウイルスのクラスターが発生し、3階の利用者においてクラスター前には出来ていた動作や意思疎通が困難になってきた現状がある。オレンジジュースとコーヒーには、血圧調整や便秘解消といった健康状態への影響や、認知症予防に効果があるとの報告があり、実際に利用者の認知機能改善に繋がるのか取り組みを行ってみることとした。

## II 目的

オレンジジュースとコーヒーの摂取が、認知機能改善及び血圧調整や便秘解消といった健康状態に影響しているのかを明らかにすることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2023年3月13日～2023年5月31日

### 2. 研究対象

3階入所フロア A様～K様 11名  
(オレンジジュース 6名、コーヒー 5名)

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) リハビリ職員より、長谷川式簡易知能評価スケール (以下、長谷川式とする) の指導を受ける。
- 2) 対象者全員に長谷川式の実施。
- 3) 毎日15時にオレンジジュースかコーヒー (150cc) を提供。
- 4) 長谷川式は月初めに実施し集計する。
- 5) 血圧・排泄・夜間の睡眠状態は、毎日記録し把握する。

## IV 倫理的配慮

研究対象者に研究の趣旨、研究参加は任意であること、得た情報は研究以外で使用せず、個人情報漏洩しない様十分注意することについて口頭及び書面で説明し、同意を得た。

## V 結果

職員1名に対して長谷川式の指導を実施した。各対象者別にオレンジジュースとコーヒーを提供した結果、長谷川式については、オレンジジュースは6人中5名、コーヒーは5人中3人に点数の向上がみられた。健康状態の中では、数値に個人差はあるものの、血圧においてオレンジジュースの方がコーヒーより概ね安定した数値を確認することができたが、排泄においては、コーヒーで1名の変化の確認にとどまり、睡眠状況においては大きな変化を確認することができない結果となった。

## VI 考察

オレンジジュースに含まれる葉酸、コーヒーに含まれるクロロゲン酸には認知症予防に効果があるとされ、今研究の結果からも一定の効果があると思われる。竹田は「ビタミンCには神経伝達物質の生成に関係して血圧を整える等の効果がある」<sup>1)</sup>と述べており、オレンジジュースの方が血圧の安定に効果があったと思われるが、コーヒーの方にも血圧安定がみられた方がおり、どちらにも含まれる強い抗酸化作用が影響をした可能性もあると思われる。ただ研究期間が短いこともあり、排便や睡眠への影響を確認することはほぼ出来なかったと考えられる。最後に今研究においては、お茶を継続して提供している方との比較がないこと、感染対応の緩和が徐々に始まった時期と重なったことがあり、オレンジジュースとコーヒーの飲水の結果だけと言うことが難しいところに研究の限界を感じた。

### 【引用・参考文献】

- 1) 竹田義彦, 不老のサプリメント, 講談社, 2013, 71
- 2) 医療情報科学研究所, レビューブック管理栄養士 2021, メディックメディア, 2020, 586





|        |  |       |                |
|--------|--|-------|----------------|
| 題名     | 食形態変更シートを活用したチームアプローチ～最期まで食べたい物を食べられる為に～ |       |                |
| 法人名    | 社会福祉法人狭山公樹会                              | 事業所名  | 特別養護老人ホームひろせの杜 |
| 発表者    | 野口敦司                                     | 共同研究者 | 田邊麻里 高沼智子 高橋直美 |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設                                 |       |                |

## I はじめに

開設以来、食形態変更については「食形態・主食の量の変更についての取組みシート」を作成し、多職種が関わり、一定の成果は得られていた。昨年度より新たな専門職の体制に代わった事もあり、今回、これまでの取組みを振り返り、新たな食形態変更シート開発を通し専門性を生かした多職種連携の関係強化、食事変更の仕組みの再構築を行った。

## II 目的

利用者が今以上に「最期まで食べたいものが食べられる」を実践できる様食形態変更シートの再開発とチームケアの強化と仕組みの構築を行う。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年6月1日～2023年5月31日

### 2. 研究対象

介護職・看護職・専門職の施設職員 77名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 「食形態・主食の量の変更についての取り決めシート」の発行件数、ポジショニング依頼件数、歯科往診医への嚥下評価依頼件数、インシデント・アクシデント件数の比較を行う。
- 2) 「食形態変更シート」の再開発を行う。
- 3) 他の職員にも興味をもってもらいやすい多職種連携のチーム名と新しいシート名を決める。
- 4) 職員に 1. 現在の食形態について 2.1年前と現在との食形態変更の対応について 3.その他検討、改善すべき事に関するアンケートを実施する。

## IV 倫理的配慮・利益相反

個人が特定できないよう十分な倫理的配慮を行った。また、発表にあたり所属施設の長の承認を得た。演題発表に関連し、発表者全員について開示すべき COI 関係にある企業などはない。

## V 結果

1. 研究期間と前年同期間の食事に関する数値比較
  - 1) 「食形態・主食の量の変更についての取り決めシート」の発行件数（18件→41件）
  - 2) ポジショニング依頼数（79件→228件）
  - 3) 歯科往診医への嚥下評価依頼数（13件→12件）
  - 4) インシデント件数（113件→153件）  
アクシデント件数（4件→1件）
2. 「食形態・主食の量の変更についての取組みシート」の名称を「ひまわりシート」に変更し前シートよりもより PDCA サイクルに則ったシートを開発した。
3. 食に関するチーム名はひまわりチームに決定した。
4. 職員アンケートは 77名中 55名が回答し、結果「情報の共有」「問題点やニーズが明確になる評価方法」等が不足しているとの回答を得た。

## VI 考察

開設時より食事形態変更に関して取り組みは行ってきたが、今回、改めて研究期間と前年同期間の食事変更に関する数値を比較、職員アンケートの実施したことで食形態変更に関する多職種のチームとしての関わりと食形態変更シートの再開発などの仕組み構築に一定の成果と評価を得る事が出来た。安藤広大は「仕組みがあるから、人は動き、部署を超えてつながるのです。」<sup>1)</sup>と述べている。今後も「最期まで食べたいものを食べられる」を多職種連携のチームアプローチと仕組みの進化を続けることで支えていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 安藤広大, とにかく仕組化一人の上に立ち続けるための思考法, ダイヤモンド社, 2023, 94
- 2) 岩井俊憲, みんなちがう。それでも、チームで仕事を進めるために大切なこと, ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2022





|        |                      |       |                   |
|--------|----------------------|-------|-------------------|
| 題名     | 新型コロナウイルス施設内感染0を目指して |       |                   |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会          | 事業所名  | 特別養護老人ホームまほろばの里川治 |
| 発表者    | 鈴木博之                 | 共同研究者 | 中村孝               |
| サービス種別 | 介護老人福祉施設             |       |                   |

## I はじめに

2020年国内初の新型コロナウイルス（以下コロナ）発症例が認められて以降、2021年3月末に特別養護老人ホーム（以下特養）の職員の家族が陽性となり初めてユニット内のゾーニングを行った。しかし、自施設で実施できる感染対策の仕組みがなく、体制が整うまでに時間を要し、危機感を覚えた。職員が混乱せず、利用者が安心して過ごせるよう取り組んだ感染予防について報告する。

## II 目的

コロナ感染対策マニュアルに沿って感染対策を実施し、施設内感染を0名に抑える。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年3月29日～2023年5月7日

### 2. 研究対象

職員約95名、利用者定員（特養70名・短期入所生活介護20名・通所介護30名）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) コロナ感染症の対策手順書作成。
- 2) 隔離により指示系統が混雑していた為、指示系統を見直し情報伝達体制の整備。
- 3) 手順書について、毎月の感染対策委員会にて更新。
- 4) 感染対策用品を使用しやすいよう整理。
- 5) クラスタ認定の目安とされる発症人数5人を基準として評価。

## IV 倫理的配慮・利益相反

本研究に於いて、個人情報の使用が無い為なし。  
本研究に於いて、発表者全員について開示すべきCOI関連にある企業等はなし。

## V 結果

1. 2021年3月末の感染対応をまとめ、手順書を作

したことで、統一した対応ができるようになった。

2. 各部署からの報告ルート、感染対策本部からの報告ルートを定めたことで、情報の重複が無くなり、情報周知がスムーズになった。
3. 職員が自主的に意見を出し合うことで現場や現状に適した手順書の更新ができた。
4. 感染対策用品を所定の場所で管理することにより、数が把握しやすくなり、どの職員でも迅速にゾーニングできるようになった。
5. 職員の感染数は施設全体で14名であったが、施設内感染については、クラスタ認定の目安である5人を下回る特養の利用者1名のみであった。

## VI 考察

法人マニュアルに加え、施設職員が現場目線で手順書を考えることで、感染予防に対する意識の強化につながる。また、環境整備、情報共有ツールの活用が適切な初期対応に繋がったと考えられる。厚生労働省介護現場における感染対策の手引きでは、マニュアルの配慮点について、「記載内容は、読みやすく、分かりやすいよう工夫し、現場で使いやすくすること。」<sup>1)</sup>とある。また、「これらのことを感染者が発生した際に、円滑に対応ができるよう、『2.介護サービスにおける新型コロナウイルス感染症対策』にある感染対策を介護職員等が実施できるようにするとともに、(1)感染者発生時の入院等に備えた対応が重要です。」<sup>1)</sup>ともある。今後も職員一同感染対策の意識を高く持ち、利用者に安心して生活、ご利用頂けるよう努めていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 介護現場における感染対策の手引き第2版, 厚生労働省, 48, 115  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000814179.pdf>



|        |              |       |                         |
|--------|--------------|-------|-------------------------|
| 題名     | レクリエーションの充実化 |       |                         |
| 法人名    | 社会福祉法人苗場福祉会  | 事業所名  | 特別養護老人ホームケアカレッジ短期入所生活介護 |
| 発表者    | 仲尾次孝輝        | 共同研究者 | 森菜摘                     |
| サービス種別 | 短期入所生活介護     |       |                         |

## I はじめに

短期入所生活介護では、他事業所との差別化の為に塗り絵や音楽回想法などのレクから、利用者が希望する創作レクや昼食・おやつレク、体操などを取り入れ看護課と連携し、稼働向上に繋げた事例を報告する。

## II 目的

利用者へ日常的にレクリエーションを楽しんで頂き、満足度を上げ、クラスター発生後の稼働率の向上につなげる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年3月1日～2022年9月30日

### 2. 研対象

研究期間中に利用された利用者延べ3,668名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

#### 1) レクリエーション

##### (1) 創作レクの充実化

①工程毎に利用者の身体状況に合わせた役割を決め、利用者同士で協力しながらレクを行い成果物はユニット内に装飾した。

②個別に作品を作り、ユニット内に装飾することで会話のきっかけを作る。

##### (2) おやつレク、昼食レクの実施

①利用者へレクにて希望する品を聞き取り、反映させる。

②季節感のあるおやつ作りを実施する。

#### 2) 体操

##### (1) 職員考案の体操の実施

毎日2回、機能訓練を兼ねた体操を行う。

##### (2) リズムや歌に合わせた体操の実施

利用者の好きな歌や、リズムに合わせた口腔体操を実施する。

#### 3) お便りにてご家族に発信

利用者がレクを行っている写真をまとめた物を1ヶ月一回手紙として家族へ郵送する。

## IV 倫理的配慮

本研究の利用者及び家族に研究目的と方法、個人情報の取り扱いについて口頭で説明し同意を得た。

## V 結果

利用者が昔どのようなものを作ったか、また季節の旬のものや希望する品を聞き取り、月に3～4回レクリエーションを実施した。特に創作レクでは、利用者同士で協力して取り組まれ、成果物を装飾すると、「やっとなできたね」など達成感が見受けられた。顧客満足度アンケートでは「利用するのを楽しみにしている様子が見られます。」とのご意見を頂いた。稼働率については表1に示す。

表1 2021年度平均稼働率と2022年度上期稼働率

| 2021年度<br>上期平均 | 2021年度<br>下期平均 | 2022年4月 | 5月    |
|----------------|----------------|---------|-------|
| 88.2%          | 84.9%          | 86.8%   | 82.9% |
| 6月             | 7月             | 8月      | 9月    |
| 88.2%          | 92.9%          | 89.2%   | 83.2% |

## VI 考察

利用者同士で作品を作る際には、役割分担を行い、全利用者に参加して頂けるように声掛けを行った事で、利用者同士や職員同士で創作レクを待ち望むようなり、会話のきっかけや、笑顔につながったと考えられる。また、利用を楽しみにして頂いた事や居宅からの新規獲得もでき、クラスター発生前の稼働率に近づくなど稼働の向上に繋がった為、今後も継続して取り組みを行っていく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 小池寛子, かんたん、楽しい！高齢者と一緒につくる壁面かざり, ナツメ社, 2015



## 2023年度 チームケア学会 第2日目 プログラム

開催日：令和5年9月12日（火）

| 時間    | プログラム   |
|-------|---|
| 14:40 | 開会<br>司会 中谷日出（元NHK解説委員、東京国際工科専門職大学教授・京都大学大学院特任教授、湖山医療福祉グループ 顧問）<br>墨屋那津子（元NHKアナウンサー）  |
| 14:45 | パネリスト紹介<br><br>パネリスト<br>湖山泰成（湖山医療福祉グループ 代表）<br>山口武兼（元公益財団法人東京都保健医療公社 理事長、社会福祉法人カメラア会 千代田区いきいきプラザ一番町 施設長）<br>小松順子（湖山医療福祉グループ 感染対策本部長、一般社団法人チームケア学会 代表理事）<br>小笠原泰（明治大学 国際日本学部 教授、一般社団法人チームケア学会 学会長）<br>安藤桃子（映画監督） |
| 14:55 | 「超高齢化社会に向けた医療と福祉の連携」～未来に向けての取り組み～<br>それぞれの立場から発表<br>フリーディスカッション   |
| 16:35 | 閉会の挨拶   |
| 16:40 | 事務連絡<br>～全行程終了～   |

《 シンポジウム 》

「超高齢化社会に向けた医療と福祉の連携」

～未来に向けての取り組み～

## 司会紹介

○中谷日出（元 NHK 解説委員、東京国際工科専門職大学教授・京都大学大学院特任教授、湖山医療福祉グループ顧問）

○墨屋那津子（元 NHK アナウンサー）

## パネリスト紹介

○湖山泰成（湖山医療福祉グループ 代表）

○山口武兼（元公益財団法人東京都保健医療公社 理事長、社会福祉法人カメラア会 千代田区いきいきプラザ一番町 施設長）

○小松順子（湖山医療福祉グループ 感染対策本部長、一般社団法人チームケア学会 代表理事）

○小笠原泰（明治大学 国際日本学部 教授、一般社団法人チームケア学会 学会長）

○安藤桃子（映画監督）



A series of 24 horizontal dashed lines spanning the width of the page, providing a template for writing.

## 2023 チームケア学会

### あとがき

皆さんの生活までも変えた新型コロナウイルス感染症もようやく落ち着き、新たな課題に日々挑戦されていることと思います。今年度は自らが手を挙げ、それぞれの研究の成果や実践を発表して頂きました。

1日目はWebによる53演題の発表、2日目は湖山医療福祉グループの40周年記念と合わせ「医療と福祉の連携」をテーマに様々な立場の方からグループの歩みとともにご意見を頂きました。発表では査読員の方々よりご協力を頂き、さらに研究らしく成果を発表して頂くよう点検・修正をお願いしました。なかでも研究としての事例が17事例あり、久保明先生に査読をして頂きました。この場を借りましてお礼申し上げます。演題は、感染症、看取り、教育、食事・栄養、業務改善、リハビリテーション、認知症ケアなど多岐に渡る発表となりました。毎日の業務に追われながら研究をまとめることは大変なことですが皆さんのご協力のもと、確実に一歩ずつ実りある学会となっています。

2日目のシンポジウムにおきましては変化していく医療の役割と福祉の役割をどのように融合し、またすみ分けしていくのか、湖山医療福祉グループだからこそ語れる内容が出てきます。皆さん、ご期待ください。

今後も学会は、100年を生きるためにチームとして何を目指し、何を支援し、何を大切にするか、学会のテーマとして問い続け、考えていきたいと思えます。たくさんの方のご協力があったからこそ、この学会が行われていることに深く感謝致します。外国から来られております技能実習生などの方々からも多くの参加と発表があり「ケア」を世界的に語るような機会になりますことを願い、あとがきとさせていただきます。

チームケア学会 代表理事 小松 順子

多摩成人病研究所（以下、研究所と略）は1967年設立、今年で55年の歴史を有する研究機関です。一昨年（2021年）のチームケア学会より後援しています。今年度の第8回チームケア学会は「人生100年生きるためのリテラシー」～医療と福祉の連携～というテーマをもとに数多くの発表がされました。

現代の高齢者はただ長寿を迎えるだけでなく、質の高い人生を送るために、自己成長や社会参加、健康的な生活を実現するスキルを磨くことを求められる傾向があります。その中で高齢者個人のリテラシーの向上は個人の枠にとどまらず、地域社会全体の健康と幸福に寄与することとなります。そして、それらを達成するためには、医療介護従事者一人ひとりの協力が不可欠で、ひいては現場職員の高齢者へ寄り添う想いが鍵となるのではないのでしょうか。今年度の発表ではそういった数多くの想いに触れることができたと感じております。

これからの長寿社会ではチームケアの実践が健康と幸福の基盤を築くうえでますます重要な要素となります。本冊子が、読者の皆様にとって有益な知識と気づきを提供し、より充実した人生の実現に寄与することを願っております。

多摩成人病研究所 所長 湖山 泰成

## 2023 年度チームケア学会運営スタッフ

### 《こやまケア運営委員会》

#### ○執行部

|              |         |                 |         |
|--------------|---------|-----------------|---------|
| 株式会社 テイクオフ   | 戸 田 茜   | 社会福祉法人 カメリア会    | 佐 藤 信 一 |
| 株式会社 テイクオフ   | 内 田 かつみ | 社会福祉法人 カメリア会    | 池 村 正 樹 |
| 医療法人財団 百葉の会  | 上 野 忍   | 医療法人社団 ひがしの会    | 神 原 良 治 |
| 医療法人社団 藤友五幸会 | 梅 村 典 義 | 株式会社 スマイルパートナーズ | 桑 原 美 香 |
| 社会福祉法人 狭山公樹会 | 佐々木 啓介  | 医療法人社団 湖聖会(東京)  | 大 野 公 士 |

#### ○エリア代表

|                 |         |                      |         |
|-----------------|---------|----------------------|---------|
| (東北) 医療法人社団 緑愛会 | 鈴 木 亜 紀 | (首都圏) 株式会社 日本ライフデザイン | 淡 路 拓 也 |
| (中部) 社会福祉法人 湖成会 | 赤 池 俊 真 | (西日本) 医療法人社団 日翔会     | 山 中 智 宏 |

#### ○運営スタッフ

|                |           |                |           |
|----------------|-----------|----------------|-----------|
| 社会福祉法人 草加福祉会   | 宮 崎 智 和   | 医療法人 北辰会       | 今 村 真 澄   |
| 株式会社 ライフアシスト   | 恵 木 芳 恵   | 医療法人社団 平成会     | 田 部 光 行   |
| 医療法人社団 平成会     | 小 林 弘 美   | 社会福祉法人 平成会     | 大 堀 智 弘   |
| 社会福祉法人 平成会     | 高 橋 い ず み | 医療法人社団 湖聖会(宮城) | 千 葉 宏 志   |
| 医療法人社団 湖聖会(宮城) | 熊 谷 洋 輔   | 社会福祉法人 湖星会     | 井 澤 優     |
| 社会福祉法人 湖星会     | 半 沢 真 由 美 | 社会福祉法人 緑愛会     | 齋 田 龍 貴   |
| 社会福祉法人 緑愛会     | 木 村 将     | 医療法人社団 緑愛会     | 金 子 知 樹   |
| 株式会社 テイクオフ     | 岩 崎 慶 一   | 株式会社 健康倶楽部     | 三 浦 七 恵   |
| 株式会社 健康倶楽部     | 山 中 麻 里   | 株式会社 健康倶楽部     | 磯 貝 美 雪   |
| 社会福祉法人 苗場福祉会   | 田 中 勝 人   | 社会福祉法人 苗場福祉会   | 沼 崎 正 次   |
| 社会福祉法人 草加福祉会   | 畑 井 田 美 幸 | 社会福祉法人 草加福祉会   | 橋 本 駿     |
| 社会福祉法人 草加福祉会   | 池 田 健 吾   | 社会福祉法人 白山福祉会   | 山 根 健 治   |
| 社会福祉法人 白山福祉会   | 野 崎 み は る | 社会福祉法人 白山福祉会   | 矢 萩 利 文   |
| 社会福祉法人 狭山公樹会   | 有 松 蘭     | 社会福祉法人 大和会     | 講 井 淳 子   |
| 社会福祉法人 大和会     | 三 浦 吾 郎   | 社会福祉法人 カメリア会   | 早 坂 守 弘   |
| 株式会社 日本ライフデザイン | 穴 倉 健 一   | 株式会社 日本ライフデザイン | 大 谷 拓 也   |
| 医療法人財団 百葉の会    | 萩 原 大 介   | 医療法人財団 百葉の会    | 谷 田 沢 力 也 |
| 医療法人財団 百葉の会    | 山 本 真 美 子 | 医療法人社団 藤友五幸会   | 開 田 恭 介   |
| 社会福祉法人 湖成会     | 萩 野 伸 子   | 社会福祉法人 湖成会     | 伊 藤 真 人   |
| 医療法人 北辰会       | 平 野 尋 美   | 医療法人 北辰会       | 青 山 博 昭   |
| 医療法人 北辰会       | 島 田 美 香   | 社会福祉法人 日翔会     | 山 田 嘉 子   |
| 社会福祉法人 日翔会     | 小 早 川 統 理 | 医療法人社団 ひがしの会   | 山 下 依 久 子 |
| 医療法人社団 水澄み会    | 角 田 誠     | 医療法人社団 水澄み会    | 斎 藤 徹 哉   |
| 株式会社 ライフアシスト   | 中 谷 祐 香   |                |           |

### 《チームケア学会》

(学会長) 小笠原 泰 (代表理事) 小松 順子 (理事) 久保 明 原田 和美 太田 恵美 佐藤 信一

### 《倫理委員会委員》

深澤 勲 久保 明 黒田 恵美子 原田 和美 太田 恵美 佐藤 信一 堀 彩芳

### 《査読委員会委員》

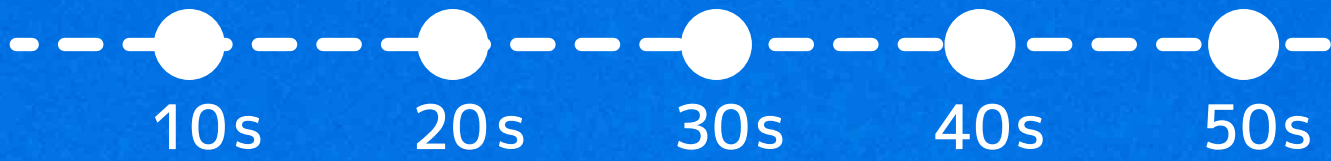
田部 光行 本多 さなえ 渡部 周子 高橋 舞子 佐々木 真由美  
花城 久子 上總 広美 上野 忍 今村 真澄 田中 薫

### 《多摩成人病研究所》

(所長) 湖山 泰成

### 《運営事務局》

特定非営利活動法人ヘルスケア・デザイン・ネットワーク 瀧柳 聡一 平井 慶太 堀 彩芳 大倉 知子 川田 拓巳



チームケア学会

Teamcare Society2023



一般社団法人チームケア学会

一般財団法人 愛生会 多摩成人病研究所